岡山大学構内遺跡調査研究年報５

１９８７年度

１９８８年　１０月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学構内遺跡調査研究年報５

１９８７年度

１９８８年　１０月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

岡山大学埋蔵文化財調査室は，1987年11月26日をもって同埋蔵文化財調査研究センターに発展的に改組され，学則による大学の正規の機関となった。それに伴い，調査員も増加し，センター事務所も年度末には完成し，体制はようやく整ってきた。ここにおいて，これまでの調査に追われていた状態から脱し，本来の文化財保護の精神に立ちかえって諸般を検討し直すことが必要であろう。また，研究活動が発掘調査にいかに重要であるかは明白であり，研究と調査技術の両輪がうまく嚙み合うことによって発掘調査は円滑かつ高度な成果を得ることができると思う。したがって，研究機関としての発展を目指していくことがセンターのこれからの任務と言えよう。

最後に，センター設立に当たっては岡山大学長をはじめ岡山大学施設設定委員会・埋蔵文化財保護対策検討委員会・事務局，並びに本学関係各位に多大な指導と協力を得た。今後も，一層の理解と援助をお願いする次第である。

1988年10月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長

近　藤　義　郎

例　言

1　本年報は岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（旧岡山大学埋蔵文化財調査室）が岡山大学構内において1987年４月１日から1988年３月31日までに実施した埋蔵文化財の調査と保存，および活動成果をまとめたものである。

2　岡山大学構内の埋蔵文化財の調査に際しては，国土座標を測量などの基準としているが，岡山大学津島地区と同鹿田地区ではその設置基準を次のように定めた。

1)　岡山大学津島地区では，国土座標第５座標系（X＝－144,500，Y＝－37,000）を起点とし，真北を基軸とした構内座標を設置した。一辺50ｍの方形地区割であり，それによって遺跡の位置を表示した。また，津島キャンパスは調査の便宜上，大きく津島北地区と同南地区に二分する（図版１）。

2)　岡山大学鹿田地区では，国土座標第５座標系（X＝－149,800，Y＝－37,400）を起点とし，座標軸をN15°Eに振ったものを基軸とした構内座標を設置した。地区割は一辺５ｍの方形を用い，調査に対応した（図版４）。

3)　本文中で用いる方位は津島地区では磁北を，鹿田地区では真北を使用している。

3　岡山大学構内及び関連施設内の遺跡の名称は，農学部演習林内に分布する古墳群等の周知の遺跡の場合はそのまま踏襲する。津島地区構内で新たに発見された遺跡は，遺存する小字名を用いるか，岡山大学津島地区遺跡群と仮称し，地点ごとに任意の記号を用いて示す。また，鹿田地区においては全域において，これまで称されてきた「鹿田遺跡」を用いる。

4　表に記載した所属部は，原則として各学部の頭文字を略号として用い，医学部附属病院等については医病という形で略した。

5　本文・目次・挿図・図版等で使用の調査番号は表１の番号と一致する。

6　遺物観察表の胎土表記は微砂：0.5㎜以下，細砂：0.5～1.0㎜，粗砂：1.0～2.0㎜，細礫：2.0㎜以上を指す。

7　遺構の実測は石坂俊郎・竹内浩一・中塚孝信・八谷隆生・福田真久・前原伸也・松岡かおり・山本悦世が行った。遺構の浄写は石坂・藤原千鶴・松岡・山本が，遺物の実測・浄写は石坂・高橋進一・竹内・藤原・安井宣也・山本が，遺物の写真撮影は入倉徳裕が各々担当した。

8　本文は第２章２～５を石坂・松岡・山本が分担して執筆し，それ以外は山本が担当した。執筆者名は末尾に記した。

9　本年報に掲載の津島地区の地形図は岡山市発行の1/2500の地形図を複製したものである。

10　編集は近藤義郎の指導のもとに藤原の協力を得て山本が当たった。

岡山大学構内遺跡調査研究年報５　1987年度

目　　次

第１章　岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項……1
　1　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター設置に至る経過……1
　2　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程……2
　3　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規程……3
　4　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程……5
　5　岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会規程……6
　6　岡山大学埋蔵文化財調査室設置要項……8
　7　岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会規程廃止の規程……8
第２章　1987年度岡山大学構内遺跡調査報告……10
　1　調査の概要……10
　2　発掘調査……13
　　①　学生部男子学生寮改築に伴う発掘調査……13
　　②　医学部附属病院管理棟改築に伴う発掘調査……20
　　③　医療技術短期大学部新営工事に伴う配管部分の発掘調査……24
　3　試掘調査……27
　　①　外国人宿舎建設予定地……27
　　②　情報処理センター増築予定地……30
　　③　身体障害者用エレベーター設置予定地……31
　4　立会調査……36
　　(1)　津島地区……36
　　(2)　鹿田地区……37
　5　分布調査……38
第３章　1987年度普及・研究・資料整理活動……40
　1　資料整理……40
　2　刊行物……40
　3　調査員の活動……40
　4　日誌抄……41

5　遺物収蔵量及び保管施設…… 43
第４章　1987年度構内遺跡の調査及び活動のまとめ…… 45
附　表 …… 46
附　編　瀬戸内技法小考…… 51
— 一接合資料から類推される作業面の補正技術について —

挿　図　目　次

図１　調査区土層断面概略図…… 14
図２　遺構全体図および11層上面地形図…… 15
図３　13層出土縄文土器…… 16
図４　17～19層出土縄文土器…… 17
図５　調査区土層柱状図…… 21
図６　遺構全体図…… 22
図７　井戸１・出土遺物…… 23
図８　調査区配置図…… 24
図９　調査区土層断面図…… 25
図10　出土遺物…… 26
図11　試掘坑配置図…… 27
図12　試掘坑土層断面図…… 27
図13　ＴＰ１遺構平面図…… 28
図14　出土遺物…… 29
図15　調査地点図・土層柱状図…… 30
図16　調査地点図・土層柱状図…… 31
図17　遺構検出状況…… 32
図18　調査地点図…… 33
図19　調査区土層断面図…… 33

図20　遺構平面図・遺構覆土断面図…… 34
図21　出土遺物…… 35
図22　立会調査⑱土層柱状図…… 36
図23　立会調査㉑出土遺物…… 37
図24　本島位置図…… 38
図25　本島団地全体図…… 38
図26　本島遺跡分布図…… 39
図27　本島遺跡分布調査採集遺物…… 39

表　目　次

表１　1987年度調査一覧…… 10
表２　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要…… 44
附表１　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）…… 46
附表２　1986年度以前の構内主要調査（1983～1986年度）…… 46
附表２―(1)　発掘調査…… 46
附表２―(2)　試掘調査…… 47
附表２―(3)　立会調査…… 48
附表３　埋蔵文化財調査室刊行物…… 49
附表４　埋蔵文化財調査研究センター刊行物…… 49

図　版　目　次

図版１　津島地区全体図

図版２　津島北地区

図版３　津島南地区

図版４　鹿田地区全体図

図版５　津島地区（学生部男子学生寮発掘調査）

　　１　７層上面遺構検出状況（西から）

　　２　８層上面遺構検出状況（西から）

図版６　津島地区（学生部男子学生寮発掘調査）

　　１　11層上面遺構検出状況（西から）

　　２　貯蔵穴１（南から）

図版７　鹿田地区（医学部附属病院管理棟発掘調査）

　　１　南区中世遺構完掘状況（南から）

　　２　土壙墓１（北から）

図版８　津島地区（教養部身体障害者用エレベーター設置試掘調査）

　　１　縄文時代遺構完掘状況（東から）

　　２　土壙01完掘状況（西から）

　　３　土壙01断面（西から）

図版９　出土遺物

　　１　学生部男子学生寮予定地

　　２　医学部附属病院管理棟予定地

　　３　医療技術短期大学部配管工事部分

図版10　センター施設

　　１　センター事務所（津島地区）

　　２　収蔵施設（鹿田地区）

第１章　岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

１　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター設置に至る経過

岡山大学構内の埋蔵文化財の調査は，1978年に岡山市教育委員会（以下市教委とする）が実施した，岡山大学医学部附属病院臨床研究棟及び講議棟の新営工事の立会工事に始まる。以来，構内の工事に際しては大学からの依頼のもとに市教委が各々について対応してきた。しかし，1981年，医学部附属動物実験施設新営工事の際，未調査のまま掘削を行ったことを契機に，学内に埋蔵文化財の保護を目的とした組織作りが求められた。

そして，1982年９月25日付けで岡山大学施設設定委員会に埋蔵文化財保護対策検討専門委員会（以下「専門委員会」とする）が設置された。続いて，1983年３月１日に岡山大学埋蔵文化財調査室設置要項が制定され，専門委員会に学内の埋蔵文化財の保護・研究・調査活動を目的とした埋蔵文化財調査室（以下「調査室」とする）が設置された。

以上の調査室設置までの経過については年報１[註１]において詳細に述べている。

調査室は，当初，室長１名・助手１名で始まり，1985年には助手１名が増員された。この1985年までについては，発掘調査後の整理期間もある程度確保可能な状況であった。しかし，1986年以降になると，新たに助手１名の増員があったにもかかわらず，将来的に，年間平均面積3000～3500㎡程度の発掘調査の必要が予想され，現在の人員数ではあらゆる研究・調査が停滞する状態となってきた。また，組織的にも不安定であるため，運営面においても事あるごとに支障をきたすことが多く，今後の学内の埋蔵文化財の保護を考える上で，より安定した組織作りおよび人員の確保が強く求められることとなった。

1987年に入ると，調査室をセンターに格上げする方向が示され，度重なる討議の末，1987年11月26日付けで調査室を改組した形で岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」とする）の設置が学則で正式に制定された。センターは従来と同様に学内の埋蔵文化財保護を目的として，センター長１名・調査研究員７名（内室長兼任１名）・技術補佐員３名の構成で発足した。同年度末に津島地区に仮事務所が設けられ，1988年度には調査研究員５名・技術補佐員２名が採用となり，センター長１名・調査研究員７名（内室長兼任１名）・技術補佐員２名により学内の埋蔵文化財保護・研究・調査活動に従事することとなった。

註１　岡山大学埋蔵文化財調査室「岡山大学構内遺跡調査研究年報１」1985

2　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

（設　置）

第１条　岡山大学（以下「本学」という。）に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

（目　的）

第２条　センターは，本学の敷地内の埋蔵文化財について，次の各号に掲げる業務を行い，もって埋蔵文化財の保護をはかることを目的とする。

一　埋蔵文化財の発掘調査に関すること。

二　発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。

三　埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成に関すること。

四　その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項

（センター長）

第３条　センターにセンター長を置く。

２　センター長は，専門的知識を有する本学の教授の内から学長が命ずる。

３　センター長は，センターに関する業務を掌理する。

４　センター長の任期は，２年とし，再任を妨げない。

（調査研究室）

第４条　センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

２　調査研究室に室長，調査研究員及びその他必要な職員を置く。

３　室長は，専門的知識を有する本学の教官の内から学長が命する。

４　室長は，センター長の命を受け，センターの業務を処理する。

５　室長の任期は，２年とし，再任を妨げない。

６　調査研究員及びその他の職員は，上司の命を受け，センターの業務に従事する。

（調査研究専門委員）

第５条　センターに，センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため，調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

２　専門委員は，本学の教官のうちから学長が命ずる。

３　専門委員の任期は，２年とし，再任を妨げない。

（管理委員会）

第６条　本学に，センターの管理運営の基本方針を審議するため，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）を置く。

２　管理委員会に関する規程は，別に定める。

（運営委員会）

第７条　センターに，センターの運営に関する具体的な事項を審議するため，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

２　運営委員会に関する規程は，別に定める。

（事　務）

第８条　センターの事務は，施設部企画課において処理する。

（雑　則）

第９条　この規程に定めるもののほか，センターに関し必要な事項は，学長が別に定める。

附　則

１　この規程は，昭和62年11月26日から施行する。

２　この規程施行後最初に任命されるセンター長，室長及び専門委員の任期は，第３条第４項，第４条第５項及び第５条第３項の規程にかかわらず，昭和64年３月31日までとする。

○設定理由

岡山大学の敷地内の埋蔵文化財の発掘調査などの業務を行い，もって埋蔵文化財の保護を図るため，学内施設として，新たに岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを設置すること及びその組織等必要な事項について定めるため。

３　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規程

（趣　旨）

第１条　この規程は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規程第48号）第６条第２項の規程に基づき，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）に関し，必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　管理委員会は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針その他重要な事項を審議する。

（組　織）

第３条　管理委員会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

一　学長

二　各学部長及び教養部長

三　自然科学研究科長

四　農業生物研究所長

五　附属図書館長

六　各附属病院長

七　地球内部研究センター長

八　学生部長

九　医療技術短期大学部主事

十　事務局長

十一埋蔵文化財調査研究センター長

（委員長）

第４条　管理委員会に委員長を置き，学長をもって充てる。

２　委員長は，管理委員会を召集し，その議長となる。

３　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

（委員以外の者の出席）

第５条　委員長が必要と認めたときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聞くことができる。

（幹　事）

第６条　管理委員会に幹事を置き，庶務部長，経理部長及び施設部長をもって充てる。

（庶　務）

第７条　管理委員会の庶務は，施設部企画課に置いて処理する。

附　則

この規程は，昭和62年11月26日から施行する。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針等を審議するために置く岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会に関し，必要な事項を定めるため。

〈管理委員会委員〉

学　　長	高橋　克明	教養部長	石井　　旭
文学部長	坪井　清彦	自然科学研究科長	小合　龍夫
教育学部長	岸田　喜一	農業生物研究所長	河崎　利夫
法学部長	丸岡　松雄	附属図書館長	佐藤　二郎
経済学部長	浦田　昌計	医学部附属病院長	小倉　義郎
理学部長	富島　康雄	歯学部附属病院長	中後　忠男
医学部長	金政　泰弘	地球内部研究センター長	松井　義人
歯学部長	西嶋　克巳	学生部長	坂田　　洼

薬学部長	大和　正利	医療技術短期大学部主事	喜多嶋康一
工学部長	本田　和男	事務局長	初見　忠男
農学部長	長堀　金造	埋文調査研究センター長	近藤　義郎

幹　事

庶務部長	谷口　　裕	経理部長	倉部　隆司
施設部長	上村　保人		

4　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程

（趣　旨）

第１条　この規程は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規程第48号）第７条第２項に基づき，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し，必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　運営委員会は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

（組　織）

第３条　運営委員会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

一　埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二　本学の教授のうちから学長が命じたもの若干名

三　センターの調査研究専門委員から学長が命じたもの１人

四　センターの調査研究室長

五　施設部長

２　前項第２号の任期は，１年とし，再任を妨げない。

（委員長）

第４条　運営委員会に委員長を置き，センター長をもって充てる。

２　委員長は，運営委員会を召集し，その議長となる。

３　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

（委員以外の者の出席）

第５条　委員長が必要と認めたときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聞くことができる。

（庶　務）

第６条　運営委員会の庶務は，施設部企画課において処理する。

附　則

1　この規程は，昭和62年11月26日から施行する。

2　この規程施行後最初に任命される第3条第1項第2号の委員の任期は，同条第2項の規程にかかわらず，昭和64年3月31日までとする。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの運営に関する具体的な事項を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会に関し，必要な事項を定めるため。

〈運営委員会委員〉

文学部教授　近藤　義郎（センター長）

工学部教授　本田　和男（管理委員会委員）

医学部教授　中山　　沃

教養部教授　定兼　範明

歯学部教授　小田嶋梧郎（調査研究専門委員）

文学部助手　山本　悦世（調査研究室長）

施設部長　　上村　保人

運営委員会審議事項

1988年2月16日　調査研究員の新規採用について

1988年度の調査計画について

管理委員会審議事項

1988年2月24日　調査研究員の新規採用について

1988年度の調査計画について

1987年度の決算報告

その他

5　岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討委員会規程

第1条　岡山大学施設設定委員会規程（昭和41年岡山大学規程第3号）第9条の規程に基づき，岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討委員会（以下「専門委員会」という。）を置く。

第2条　専門委員会は，岡山大学の敷地内の埋蔵文化財の保護対策について必要な事項を審議

する。

第３条　専門委員会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

一　各学部長及び教育部長のうちから互選された者１人

二　施設設定委員会のうちから各学部及び教養部ごとに推薦された者１人

三　専門的知識を有す本学の教官のうちから２人

四　その他学長が必要と認めた者

第４条　専門委員会に委員長を置き，前条第１号の委員をもって充てる。

第５条　委員会は，会議を召集し，その議長となる。

２　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

第６条　委員長が必要が有ると認めたときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聞くことができる。

第７条　専門委員会に幹事を置き，庶務部長，経理部長，施設部長，及び学生部次長をもって充てる。

第８条　専門委員会の庶務は，施設部において処理する。

附則　この規程は，昭和57年２月25日から施行する。

委　員	竹内　和夫（文学部教授）	小田嶋梧郎（歯学部教授）
	近藤　義郎（文学部教授）	田坂　賢二（薬学部教授）
	稲田　孝司（文学部助教授）	本田　和男（工学部教授）
	高橋　達郎（教育学部教授）	河野伊一郎（工学部教授）
	藤井　俊雄（法学部教授）	岩佐　順吉（農学部教授）
	土生　芳人（経済学部教授）	外村　直彦（教養部教授）
	富永　久雄（理学部教授）	定兼　範明（教養部教授）
	田邊　剛三（医学部教授）	小倉　義郎（医学部附属病院長）
幹　事	谷口　　裕（庶務部長）	勝俣　美治（経理部長）
	上村　保人（施設部長）	星野　啓二（学生部次長）

6　岡山大学埋蔵文化財調査室設置要項

1　岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会（以下「専門委員会」と言う。）に，岡山大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」と言う。）を置く。

2　調査室は，専門委員会に必要な資料を提供するため，岡山大学の敷地内の埋蔵文化財に関する次の事務を行う。

一　保護，調査，発掘等の実施計画の立案に関すること。

二　保護，調査，発掘等の実施に関すること。

三　保護，調査，発掘等の報告書の作成に関すること。

四　その他必要な事項

3　調査室には，室長及びその他必要な職員を置くことができる。

4　この要項は，昭和58年３月１日から実施する。

室　長　（併）稲田　孝司（文学部助教授）

室　員　（専）石坂　俊郎（医学部助手）

（専）山本　悦世（歯学部助手）

（専）松岡かおり（技術補佐員）

補助員　八谷　隆生（岡大経済学部学生）

福田　真久（　〃　〃　）　竹内　浩一（岡大法学部学生）

前原　伸也（　〃　〃　）　中塚　孝信（　〃　〃）

室内作業員　佐々木育子

綱澤　靖枝

専門委員会審議事項

1987年６月30日　調査室調査員の整備について

1987年９月10日　埋蔵文化財調査研究センターの設置について

1987年９月25日　〃　〃

1987年11月18日　〃　〃

7　岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会規程を廃止する規程

岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会規程（昭和57年岡山大学規程第５号）は，廃止する。

附　則

この規程は昭和62年11月26日から施行する。

○廃止理由

岡山大学の敷地内の埋蔵文化財の発掘調査などの業務を行い，もって埋蔵文化財の保護を図るため，学内施設として，新たに岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが設置されたため。

センター組織一覧

〈 学　長 〉

管理委員会

学長：委員長
各学部長・教養部長　　附属図書館長
自然科学研究科長　　各附属病院長
農業生物研究所長　　学生部長
地球内部研究センター長　　事務局長
医療技術短期大学部主事　　埋文センター長

〈 埋蔵文化財調査研究センター長 〉……（併）近藤　義郎（文学部教授）

運営委員会

〈 調査研究専門委員 〉
小田嶋梧郎（歯学部教授）
千葉　喬三（農学部教授）

センター長：委員長
学長任命の本学教授若干名
調査研究専門委員から１人
調査研究室長
施設部長

〈 調査研究室室　長 〉……（専）山本　悦世（文学部助手）

調査研究員…（専）石坂　俊郎（文学部助手）
（専）松岡かおり（技術補佐員）

補佐員…　竹内　浩一（岡大法学部学生）
中塚　孝信（　〃　）
八谷　隆生（岡大経済学部学生）
福田　真久（　〃　）
前原　伸也（　〃　）

室内作業員…　佐々木育子

第２章　1987年度岡山大学構内遺跡調査報告

１　調査の概要

センターにおいては，大学構内における掘削工事に際して，事務局施設部企画課を通して行政的手続きを行った上で，発掘・試掘・立会調査に分けて調査を実施している。

現在までのところ，その調査対象は津島地区と鹿田地区が中心となっている。特に，鹿田地区ではその大半が周知の遺跡（鹿田遺跡）に指定されており，ほとんどの掘削工事に対して届出を提出した上で対応を行っている。また，津島地区においても新たな遺跡の確認が進んでいることから，届出の有無に関わらず，少なくとも立会調査を行っている。

1987年度は発掘調査３件（津島地区１件・鹿田地区２件），試掘調査４件（津島地区），立会調査20件（津島地区８件・鹿田地区12件）を実施した。立会調査については，長期間にわたり数カ所に及ぶ工事についても一連の工事に伴うものは１件として数えており，実際に現場で行った数は51件（津島地区14件・鹿田地区37件）に達す。詳細は表１に挙げた（表１・図版１～４）。

表１　1987年度調査一覧

番号	種類	所属	調査名称	調査地区	調査期間	掘削深度(m)	備考
①	発掘	学生	男子学生寮予定地	津島北 AV 00･01	4.1～6.18 8.24～9.5	3.0 4.0	調査面積1550㎡ 弥生～縄文晩期の集落址 調査面積80㎡ 縄文晩期～後期の河道
②	〃	医病	管理棟改築予定地	鹿　田 BB～BH 35～42	10.6～'88.3.2 '88.3.23～3.31	2.0～2.5	調査面積1192㎡ 弥生中期後半～中･近世の集落址
③	〃	医短	新築校舎周辺の配管工事	〃　DC～DE 25,DF 27 DG～DH 28	11.2～11.21	2.0～2.5	調査面積90㎡ 古代の河道
④	試掘	事	外国人宿舎建設予定地	土　生 AP 02	6.29～7.6	2.2～2.8	近世･弥生･縄文の遺構面
⑤	〃	情セ	情報処理センター増築予定地	津島北 AV 11	6.29～7.1	2.0～3.0	黒色土を標高2.2m前後で確認､遺構は未検出 造成土２m
⑥	〃	理	身体障害者用エレベーター建設予定地	〃　AY 09	7.13～7.30	3.0～3.5	近世・中世の遺物 中世・古代の水田址 造成土約１m
⑦	〃	教養	〃	津島南 BD 09	7.13～7.31	2.5	縄文時代土壙群を確認 縄文･中世･近世土器出土 造成土0.7m
⑧	立会	医病	管理棟改築に伴う基礎杭確認	鹿　田 BC 37	6.26	2.5	弥生時代包含層･遺構確認

番号	種類	所属	調査名称		調査地区	調査期間	掘削深度(m)	備考
⑨	立会	医病	看護婦宿舎厨房北西隅配管工事		鹿　田 CR 28	7.7	0.7	造成土内
⑩	〃	理	身体障害者用エレベーター設置に伴う汚水管移設工事		津島北 AY 09	7.9～7.11	1.2 一部1.6	造成土1m前後
⑪	〃	医病	(旧)第一内科，動物舎及び渡り廊下撤去		鹿　田 CG ～ CK 38～44	7.29	0.3	造成土内
⑫	〃	〃	管理棟中央 WC 汚水排水管付設		〃　CG ～CK 39	7.30	0.5	〃
⑬	〃	〃	管理棟改築関連工事	樹木移植	〃　AD 29･30･38 AY 37～43 CP 41	8.5･6	0.5～0.8	〃
				ガス管工事	〃　BA・BB 41	8.8	0.6	〃
				水道管工事	〃　BF 33	8.18	1.0	既設管内
				電線工事	〃　AZ 40～42	8.25	0.15	造成土内
				基礎確認	〃　BD 35･BE 37	9.19	2.0	
⑭	〃	事	北宿舎跡地樹木伐採･整地工事		津島北 AV 04･05	8.20･21	0.6～0.8	造成土内
⑮	〃	〃	土生宿舎屋外排水管改修工事		津　島 AQ 02･03	9.7･8	0.7	造成土0.6m
⑯	〃	学生	馬場東給水管修理		津島北 AW 01	9.11	2.0	〃　0.96m，谷部分
⑰	〃	医短	校舎新営	配管工事	鹿　田 CN ～ CS 26 CS ～ DB 27	10.19 10.23	0.7 0.8	造成土内
				〃	〃　CW 14～17	11.10	1.3	造成土1.16m 中世水田層
				〃	〃　DC ～ DE 23	〃	1.9	〃　1.1m，攪乱内
				〃	〃　CN ～CU 14･15	11.14	0.7	造成土内
				樹木移植	〃　CX 16	11.19	1.2	造成土1.1m
				配管工事	〃　DF 24 DF 23～29	〃 〃	1.6 3.0	〃　〃 中世層確認 〃　〃 攪乱内
				〃	〃　DC ～ DF 25 DF 23･24	11.24 〃	1.38 1.8	〃　〃 〃　〃 中世層確認
				〃	〃　DC ～ DE 28	〃	0.8	造成土内
				樹木移植	〃　CW ～DC 16 CU～DC 26･27	11.24･27	0.6	〃
				配管工事	〃　DH 28	11.27	0.6	〃
				〃	〃　CT ～CW 18･19	〃	0.9	〃
⑱	〃	農	農場施設新営その他工事	a 施設新営	津島南 BF 22･23	10.29･30 11.4～7	1.8	造成土1.25m
				給排水工事	〃　BF 21	11.25	0.7	造成土内
				b 合併処理槽	〃　BG 22	12.2	3.6	造成土1.2m，自然流路内
				電気工事	〃　BE 17～21	12.3・4	0.7～1.5	〃　〃
				c 給排水工事	〃　BE 22	'88.1.11	3.0	〃　1.3m

番号	種類	所属	調査名称		調査地区	調査期間	掘削深度(m)	備考
⑲	立会	理	西側通路排水管改修工事		津島北 AZ 12	11.12	0.9	造成土内
					〃 AY 12	11.25	0.8	〃
⑳	〃	医病	看護学校宿舎ポンプ室配管修理		鹿 田 CU 43	'88.1.13	0.5～0.8	既設管内
㉑	〃	〃	構内環境整備事業		〃			
			基礎医学棟中庭駐輪場基礎		〃 BE ～ BH 57	1.20	0.6	造成土内
			旧混合病棟北駐輪場	樹木移植	〃 BB 14～16 AD 61～66, CM 16	1.25	0.3～0.7	〃
				基礎	〃 BA・BB 17～22	1.28・29	0.6	〃 ,弥生土器出土
			道路排水整備工事		〃 CC ～ CN 44～47 CL ～ CN 30～43 CL・CM 34～40 CJ ～ CL 36・37	1.25～27 3.2～3.3	0.5 0.7～1.1	〃 〃 ,掘削深度1.1m 地点のみ造成土65cm
			基礎医学棟南駐輪場基礎工事		〃 BQ 56～62	2.18	0.7	造成土内
			危険物屋内貯蔵所樹木移植		〃 AI 02～07	3.2	0.9～1.0	〃
			病院正門東駐輪場基礎工事		〃 AD・AE 12～19	3.2	0.6	〃
			動物実験棟北駐車場	樹木移植	〃 BY・CC 56～67	3.7	0.6～1.0	〃
				桝部掘削	〃 BY ～ CB 56～68	3.9	0.6～0.8	〃
			基礎医学棟北駐輪場樹木移植及び基礎工事		〃 AD 56～63	3.10～3.11	0.3～0.5	〃
㉒	〃	医短	東駐輪場基礎工事		〃 CO ～CW 13 CU ～ CY 14	2.22	0.7	〃
㉓	〃	医	動物実験施設焼却炉	桝部掘削	〃 CH ～ CI 56	3.2	1.0～1.2	造成土は0.8m
				配管工事	〃 CH 56	3.9～3.11	0.3～1.0	〃 〃
㉔	〃	埋	埋文調査研究センター	基礎掘削	津島北 AV 11	2.25	0.5	造成土内
				配管工事	〃 〃	3.4	0.6	〃
㉕	〃	医	動物実験施設東車置場	樹木移植	鹿 田 CD 56～58 CJ 58・59	3.18	0.35	
				基礎掘削	〃 CD～CF 56・57	3.22	0.3	〃
㉖	〃	医病	脳代謝棟北給水管改修工事		〃 CM 14～26 CM ～CP 15 CO 12～14 CN ～ CO 26	3.23～24	0.8～0.9	造成土0.8m
㉗	〃	理	防火施設改修工事		津島北 AY 09・10, AZ 10	3.28	0.7	造成土内

2　発掘調査

①　学生部男子学生寮改築に伴う発掘調査（津島北地区　ＡＶ00・01区）

調査の経過

男子学生寮改築にあたり，1985年６月に予定地周辺部に試掘調査を行った結果，縄文時代後期～中世の遺跡の存在が確認された。その中で，最も遺構密度が低い南半地区に建物の建設が決定された。昨年度は，1986年12月に調査を開始し，近代から古代までの調査を行った。

今年度は，引き続いて，古代の面から調査を開始した。当初，調査終了予定を1987年６月としていたが，調査区の北西部に最終確認のためトレンチを設定し掘り下げたところ，先の試掘調査では確認することのできなかった縄文時代後期の良好な資料の存在が判明した。そのため，縄文時代晩期までの調査を６月18日に一旦終了し，発掘体制を立て直した上で，同年８月24日より調査区を北西部に限定して調査を再開した。その結果，縄文時代後期の河道と遺物を確認した。湧水層まで掘り上げ，一部の断面を記録して，９月５日に全ての調査を終了した。

1987年６月までは，調査面積1550㎡，調査員３名，８月以後は調査面積約80㎡，調査員２名で調査を実施した。

調査終了後，現在，整理途上にあるため，ここで述べることは暫定的なものである。

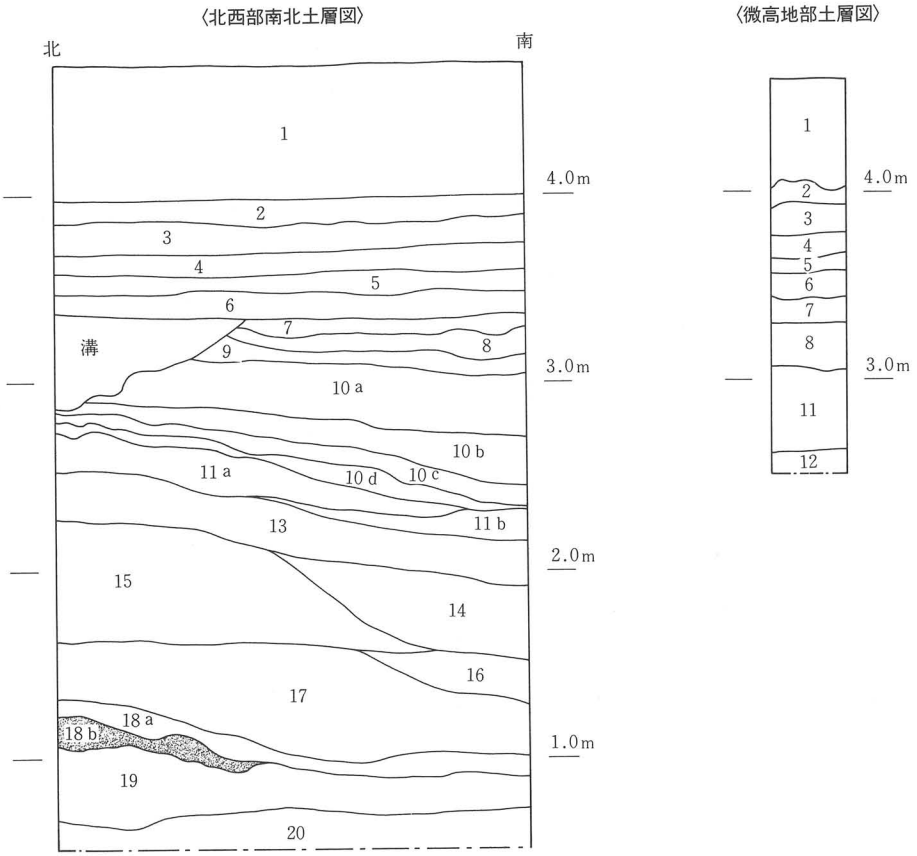
層序と地形（図１・２）

１～６層については昨年度調査済みであるため，その説明は，年報４[註1]に譲りたい。７層は古代耕作土である。８～10層は弥生時代耕作土である。11層は弥生時代前期以前に形成されたと考えられる黒褐色土で，その上面では弥生時代前期にあたる水田址が確認されている。11層上面では標高3.2ｍをピークとする北東から南西方向にのびる尾根状の微高地が調査区南方を走り，北方は急な斜面の河道が形成されている（図２－４）。９層・10層は，この河道部分に堆積した土層であり，微高地上には存在しない。また，11層は調査区全面に広がるが，微高地上では砂質土（11ａ層）であるのに対し，河道部分では灰色化するとともに粘質土へと漸次変化していく（11ｂ層）。

12層の黄褐色砂質土層では，部分的な調査によれば，明確な遺構は検出されず，極めて少量の縄文後期土器片を出土したに過ぎない。13層以下は11層堆積以前に形成された縄文時代の河道の埋土である。13層は縄文時代晩期の遺物を多量に包含する暗青灰色粘土層である。遺物は調査区の北側からの流入と考えられる。14層・16層は共に細砂を含む灰色粘質土で，それぞれ晩期の河道埋土と思われる。15層は間層で，遺物はほとんど含まれない。17層は有機物，特に，木質を多く含む暗灰色細砂混粘質土である。18層も同様に，細砂を含む暗灰色の粘質土層である。19層は円礫と粗砂の混じった砂礫層であり，これらと共に，非常に保存状況が良好な縄文時代後期土器が多量に出土している。20層は汚れのない細砂で遺物はほとんど含まない。以上

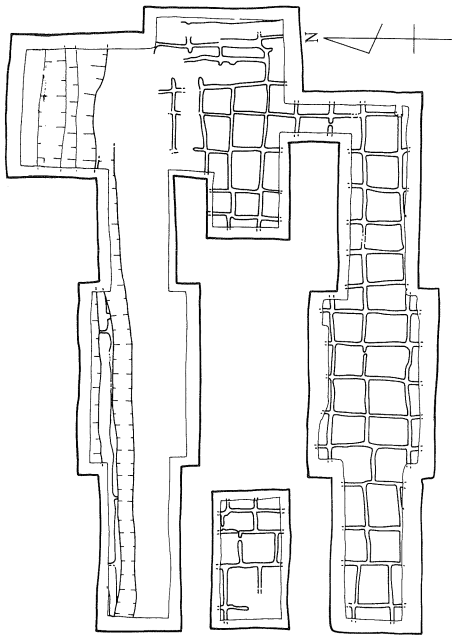
の状況からみて，17層は縄文時代後期から晩期に対応し，18・19層は縄文時代後期の自然河道埋土であると考えられる。20層の湧水が著しかったため，20層上面で調査を中止せざるを得なかった。発掘終了レベルは最低部で標高約70cmを測る。

ここで縄文時代から古代にかけての旧地形の変遷を概観してみる。調査区北辺には縄文時代後期から弥生時代前期にかけて河道が走っており，後・晩期には河道の北側に集落の存在が推測される。この河道部分は，弥生時代を通して埋積作用が進み，古代にはいると調査区はほぼ全面水平堆積となり，それまでの地形を無視した形で河道が調査区北辺を東西に流れる。河道部以外の微高地部については弥生時代前期以来水田が営まれたと考えられる。

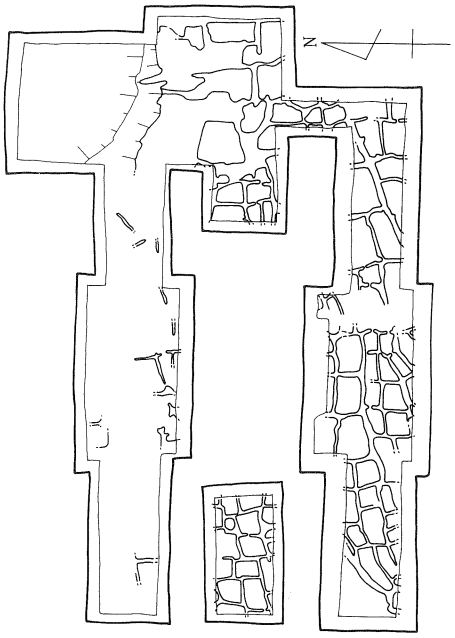


1　造成土
2　灰色微砂
3　灰褐色砂質土
4　茶褐色砂質土
5　灰色粘質土
6　灰褐色砂質土
7　灰色粘質土
8　灰黄色砂質土
9　暗黄色砂質土
10a 灰色粘質土
10b 明茶褐色砂質土
10c 淡灰色粘質土
10d 淡灰色砂質～砂
11a 黒褐色砂質土
11b 青灰色粘土
12　黄褐色砂質土
13　黒褐色粘土
14　暗灰色粘土
15　淡青灰色砂質土
16　暗茶灰色細砂混粘土
17　暗灰色粘質土
18a 暗灰色粗砂混粘質土
18b ドングリ層
19　暗灰色細礫混土
20　暗灰色砂

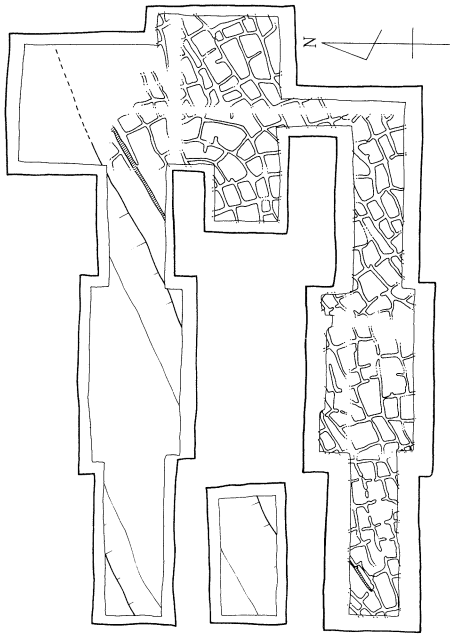
図1　調査区土層断面概略図　(縮尺1/40)



1　7層上面遺構検出状況

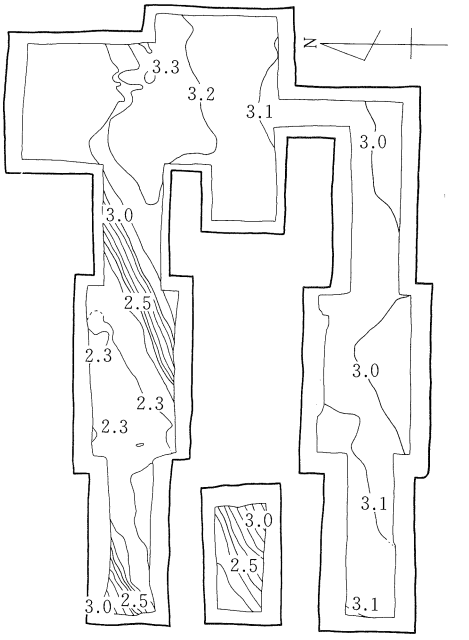


2　8層上面遺構検出状況



3　11層上面遺構検出状況

溝部分



4　11層上面地形図（標高m）

図2　遺構全体図および11層上面地形図　（縮尺1/800）

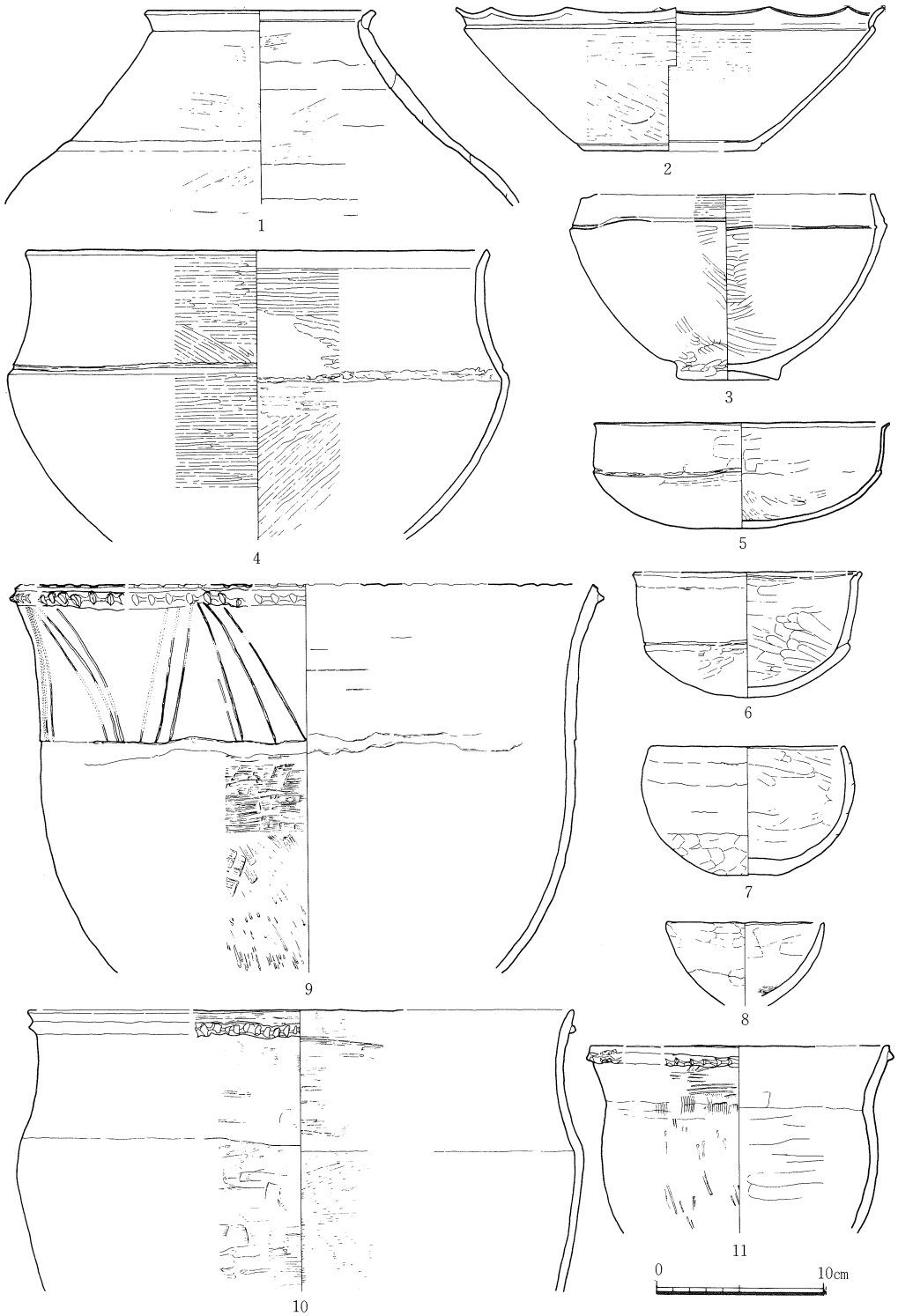


図3　13層出土縄文土器　（縮尺1/4）

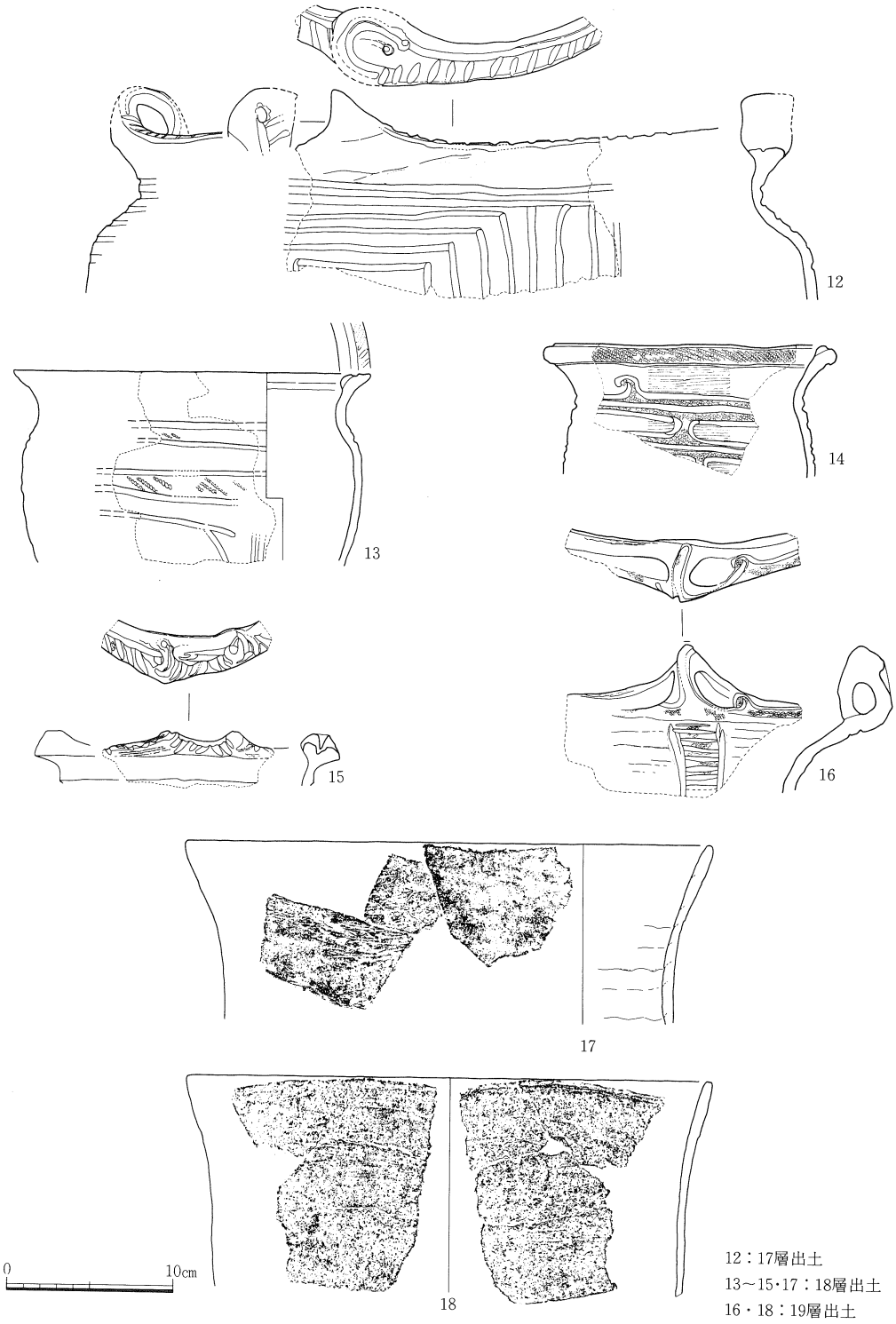


図4　17～19層出土縄文土器　（縮尺1/4）

縄文土器観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	胴径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	壺	(7.0)	−	−	−	肩の張る算盤玉状の器形か，口縁部粘土紐1段外傾，接合部内面に沈線，頸部接合部外面にゆるい段がつく，口縁部横ナデ，端部面取り，外面横・斜めナデ，細かな条線残る，内面は外面と同じ調整，粘土紐接合痕を多く残す。	(外)淡灰褐色 (内)黒色	微砂・細砂
2	浅鉢	(26.1)	(25.0)	(10.5)	8.7	口縁部有段でS字状，端部は規則的につまみ上げ波状，底部平底，口縁内面と底部外縁に沈線，口縁部横ナデ，外面上半横ケズリ・下半斜めケズリ，内面横ミガキ	黒褐色	微砂多量
3	〃	(17.6)	(19.1)	6.0	11.2	どんぶり鉢状の胴部に内傾する直線的口縁部，屈折部内外面に沈線めぐる，底部凹底，口縁部外面丁寧な横ミガキ，内面やや雑な横ミガキ，端部面取り，内・外面雑な横・斜めミガキ	黒色・灰黒色	細砂多量
4	〃	(27.8)	(30.6)	−	−	肩部外面に沈線（内面に赤色顔料残存）めぐる，口縁端部面取り，内面横ナデ，口頸部を含む体部上半外面横ミガキ・一部に斜めミガキ，口頸部内面ナデの後雑な横・斜めミガキ，肩部内面荒い横ナデ，胴部下半やや雑な斜めミガキ	(外)灰褐色 黒斑有り (内)淡黄灰褐色	微砂・細砂多量
5	〃	(17.8)	(17.4)	−	6.4	下半は皿状にゆるく立ち上がり上半は直立，屈折部外面に沈線めぐりわずかに段がつく，口縁端部は口唇状につまみ出され面取り，底部は丸底か，外面上半横ナデ・下半横～斜めミガキ，内面上半横板ナデ・下半横ミガキ	淡黄灰褐色 (外)黒斑有り	粗砂多量
6	〃	(13.6)	12.4	−	7.6	下半は皿状にゆるく立ち上がる，上半は直立するがわずかに外傾気味，屈折部外面に沈線めぐる，口縁端部は口唇状につまみ出され一端面取り，屈折部内面に沈線めぐる，外面上面横ミガキ・ナデ，下半ナデ・ミガキ，内面やや雑なナデ	(外)上半 黒色 下半 赤褐色 (内)灰黒色	細砂・粗砂多量
7	〃	(11.6)	(12.9)	3.6	7.8	底部平底でややくぼむ，外面半横ナデ・下半は雑なナデ，内面横・斜めナデ	(外)黒褐(内)灰黒	微砂・細砂多量
8	〃	(9.4)	(9.5)	−	−	やや開き気味の半球形，口縁端部に内傾する面取り，外面ナデ，内面雑なナデ	(外)黒(内)暗灰褐	〃・〃
9	深鉢	(34.8)	(32.8)	−	−	段を境に上半は文様帯となり3条1組の斜行沈線が山形にめぐる，口縁部は面取りし刻目，直下に断面三角形の刻目突帯がめぐる，刻目はD字に近い，外面下半上部は横板ナデ・条痕，下部は斜め板ナデ・ケズリ，内面は平滑なナデ，煤多量に付着	黒褐色	微砂・細礫多量
10	〃	(33.0)	(34.6)	−	−	わずかに肩が張り，口頸部は内傾し，ゆるく外反しながら立ち上がる，口縁端部下1㎝弱に刻目突帯がめぐる，刻目は小D字，外面上半丁寧なナデ・下半横板ナデ，内面上半横板ナデ・下半丁寧な板ナデ，口縁付近は内外面とも横ナデ	淡灰褐色	細砂・粗砂多量
11	〃	(18.0)	(16.4)	−	−	胴がわずかにふくらみ，頸部はゆるく屈折する，口縁端部を面取りし，数㎜下がって刻目突帯がめぐる，刻目はV字と小D字，外面口頸部に貝殻条痕・頸部に縦板ナデ・胴部は縦ケズリか，内面口頸部丁寧なナデ・胴部横指ナデ，外面に煤付着	(外)黒褐色 (内)暗褐色	粗砂少量
12	〃	(41.0)	−	−	−	上半⅓周遺存，頸部くびれ胴張，口唇部ほぼ水平に拡張し耳状の突起を付す，斜行沈線めぐる，頸部無文帯をはさみ頸部くびれ以下直角に組み合わされた直線文で飾る	(外)黒色 (内)灰褐色	微砂・細砂多量
13	〃	(21.5)	(20.5)	−	−	上半⅓周遺存，口径が胴径をしのぎ胴張，口唇部水平に拡張し斜行沈線めぐる，頸部無文帯をはさみ，頸部くびれ以下沈線で画された横走縄文帯・下半に斜行沈線残る	(外)赤褐色 (内)灰黒色	微砂多量
14	〃	−	(15.2)	−	−	上半⅓周遺存，口径が胴径をしのぎ胴張，口唇部肥厚し外面に上下沈線で画した縄文帯頸部以下3本1組の沈線で画された横走縄文帯がめぐり，部分的に上下が連結する	(外)黒色 (内)黒褐色	〃 〃
15		(18.4)	−	−	−	口縁部⅓周遺存，口唇部拡張するが平坦ではなく，曲面上に2つの突起を近接して付し全体に沈線や刺突を施す	灰黒色	細砂少量
16	深鉢	−	−	−	−	口縁部1/10周ほど遺存，口縁部やや大きく開く，口唇部外傾気味に拡張され，アーチ状の突起を付す，沈線と縄文を施す，突起直下にハシゴ状の沈線を施しその空白部に縄文	淡灰褐色	微砂多量
17	〃	(31.7)	−	−	−	上半⅓周遺存，口縁部やや広がり，口唇部は面取せず曲面，無文，外面斜め方向のナデ部分に斜め条痕残る，内面横方向のナデ，粘土紐接合痕が良好に残存	(外)黒色 (内)暗灰褐色	〃 少量
18	〃	(31.6)	−	−	−	上半⅓周遺存，口縁部わずかに広がり口唇部面取，無文，内外面とも横方向のナデ	(外)灰褐色(内)黒色	〃 〃

※法量（ ）内数字は図上復元による推定値

調査の結果（図２～４，図版５・６・９－１）

７層から11層までは各土層の上面において水田址の遺構及び溝状遺構を数条検出している。

調査区南半にひろがる７層上面の水田区画は極めて整然としており，一辺2.5～４.0ｍ四方の規模をもつ。同層では調査区北辺を東西に走る河道，およびそれと平行する溝が検出されているが，南に広がる水田と並存していたか否かは明らかでない。

弥生時代に属すると見られる８層～11層上面で検出された畦畔は，上層とは全く異なった様相を示す。図２に見るように幅広の畦畔が主軸をやや北東から南西方向に振りながら走り，それに直交する畦畔がその間を小さく仕切るという形をとっている。これは当時の地形に制約されたものであろう。一区画の規模はまちまちである。11層上面からは弥生時代前期に属する壺形土器が出土している。

以上のように、畦畔は検出できたものの，それと並存したであろう水利施設に関しては明確な遺構が確認できず，水田耕作技術の解明にいま一つの問題を残す。

次に，縄文時代の遺構・遺物について述べたい。

晩期に属する遺構は，貯蔵穴７基が挙げられる。それらはすべて13層を除去した15層上面において検出した。いずれも河道（14層）の北縁辺沿いに位置している。最も残存状況の良い貯蔵穴１は，東西96㎝，南北93㎝の正円形で，深さは検出面から約42㎝を測る（図版６－２）。掘り方はやや底部が広がる袋状を呈す。最下層（６層）にドングリが集中して包含されており，その直上層（３・４層）には木の葉や細い枝が重なるようにして堆積していた。さらに，その上部には人頭大の礫が２個置かれ，中央部がややたわんだ状態であった。他の貯蔵穴においても，埋土下層には暗灰色粘土に混じってドングリ，トチの実，種子や木の葉，小枝等が包含された状態で検出されている。貯蔵穴内からの出土土器は非常に少ないが，埋没状況から縄文晩期後半に属すると思われる。

縄文時代晩期の遺物（図３）は13層に集中する。深鉢形土器には一条突帯文のものと二条突帯文のものが混在しており，また，浅鉢形土器の割合も多く，バラエティがあるなど，その内容は豊富である。その他，石器も数多く出土している。特記すべきものとしては，全国でもほとんど出土例がない石製指輪がある。

縄文時代後期では河道が確認され，遺物はそのほとんど河道内からの出土であるため層位学的分類は困難であるが，瀬戸内海地方で後期前半にあたる福田ＫⅡ式の土器が中心となっているようで，一部中津式のものも含まれている（図４）。

いずれにせよ縄文時代の遺物の保存状態は良好で，摩滅も少なく，集中出土していることから，調査区北辺部に該期の集落が近在していた可能性が非常に高いと言える。　　（松岡）

② 医学部附属病院管理棟改築に伴う発掘調査（鹿田地区　ＢＢ～ＢＨ35～42区）

調査の経過

岡山大学鹿田地区において，医学部附属病院管理棟の改築が同外来診療棟の南西側に隣接して予定された。外来診療棟の位置する地点は，1983～1984年度に，当時の埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施し，弥生時代中期後半から中・近世にかけての質量共に豊富な遺構・遺物が検出され，非常に密度の濃い内容の遺跡であることが判明していた。(註２) その調査結果から，管理棟改築予定地においても遺跡の存在が予想されたため，1987年10月６日から1988年３月31日にかけて現埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施した。調査面積は1192㎡である。

本調査対象地区にはそのほぼ中央部に旧耳鼻科棟の建物が約700㎡を占めていた。当初は，その建物の解体後，一面での調査を計画していたが，基礎解体時の周囲に及ぼす遺跡破壊が予想以上に大きいことから，上屋解体後基礎のみを残し，まず，南及び北側の調査区域（以後南区・北区と称す）と基礎内に点々と桝状に残っている部分の調査を実施，その後，基礎の徹去，そして，基礎下部の調査を行った。1987年10月６日から1988年３月２日までは調査員２～３名が担当した。基礎徹去後，基礎下の調査については，上層部の破壊が著しく残存遺構として予想されるものとしては井戸状遺構のみであったため，調査員１名が３月23日から３月31日まで調査を実施した。

調査終了後，現在整理途上にあり，以下に述べる概要は暫定的なものである。

層序と地形（図５）

鹿田遺跡における層序は，当遺跡内における最初の発掘調査となった医学部附属病院外来診療棟改築工事に伴う発掘調査（1983～1984年度実施）において次のような基本層序を設定している。第Ⅰ層：造成土　第Ⅱ層：淡灰色土（近代水田土壌）　第Ⅲ層：茶灰色粘質土（中世包含層）　第Ⅳ層：灰茶色土（古墳時代初頭以後古墳時代後期以前の包含層）　第Ⅴ層：暗黄褐色砂質土（弥生～古墳時代初頭の包含層）　第Ⅵ層：Ⅴ層以下（基盤層）である。

本調査区においては上記の層序と基本的に大差はないが，第Ⅲ層が比較的厚く堆積しており，分層が可能である点と，第Ⅳ層が明瞭に識別できなかった点において違いが認められた。また，第Ⅵ層以下については黄灰色～灰色粘土層の下の青灰色の粘土と砂層までの確認を行った。特に，南区においてはそれらがラミナ状を構成し，非常に顕著であった。

図５は，南北両壁の西端部・中央部・東端部の各々３ヶ所の土層堆積状況を示す柱状図である。北壁では，４層（Ⅲ層）以上はほぼ水平堆積を示すのに対して，５層（Ⅴ層）上面は西に向かって急激に下降する。また，８層（Ⅵ層）は砂の混入は少なく粘土が主体を占める。一方，南壁では３層（Ⅲ層）および４層（Ⅲ層）上面において39ラインのやや東側に東に落ちる段が認められる。５層（Ⅴ層）上面については北壁とは逆に東に向かって下降する傾向があり，40

ライン周辺が一番高く，西に向かっても緩やかに下降するとみられる。8層（Ⅵ層）についても北壁とやや状況が異なり，砂の割合が高く，粘土と砂がラミナ状を呈する。

以上の状態から，本調査区の地形を外来診療棟予定地の調査結果を踏まえて考えてみると次のようになる。外来診療棟改築予定地の東半部を頂部とした弥生時代の微高地は西南方向へ向かって下がって行き，本調査区は全体的には微高地の端部にごく近い位置にあたることが明瞭となった。しかし，その微高地は外来診療棟の地点を中心に単純に円を描くわけではなく，本調査区の西南隅に向かって舌状に突き出すような状態で広がることが予想される。北区では東端（36ライン付近）が，そして，南区では中央部（40ライン付近）が舌状部分の頂部となる可能性が高い。中世に至ると，調査区全域はかなり水平な状態となり，次の近世の段階で水田造成に伴う大幅な段落ち形成が行われたと考えられる。

調査の概要（図６・７，図版７・９－２）

本調査区においては竪穴住居・掘立柱建物各２棟，井戸８基，溝状遺構約55条，土壙45基，土器溜り１ヶ所，土壙墓10数基，野壺状遺構約３基，柱穴多数が検出された。竪穴住居はいずれも弥生時代後期に，掘立柱建物は中世に属する。調査区東部に位置する住居１については床面に薄い炭層および重複する壁体溝が確認され，１度の建て替えが想定される。また，住居２は半円形の溝が確認されたのみでやや不明瞭な点が多い。

井戸状遺構は古墳時代初頭に１基・古代に２基・中世に５基が各々属す。古代及び中世の井戸各々１基には井戸枠が残存していた。中世の井戸は12世紀～14世紀にかけて連続している。

溝状遺構および土壙は遺物が非常に少ないものが多

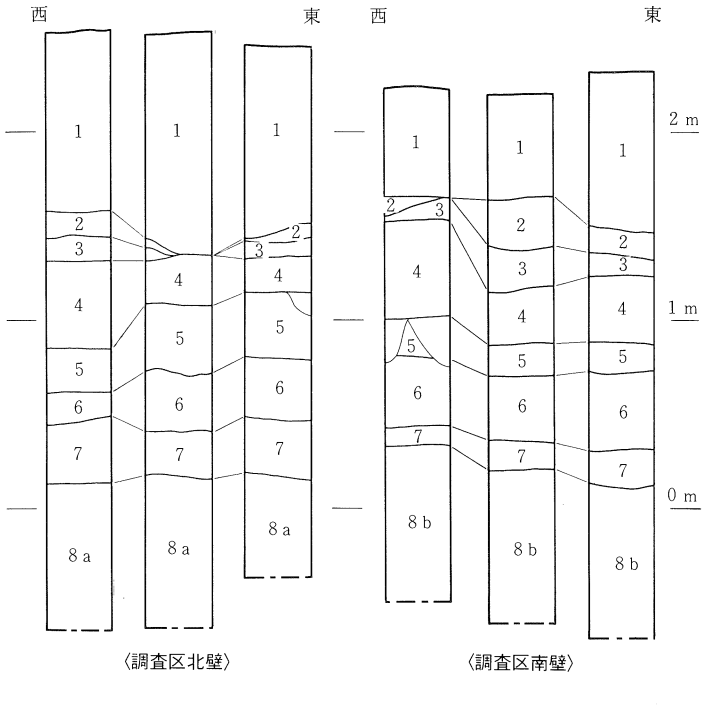


図５　調査区土層柱状図　（縮尺1/40）

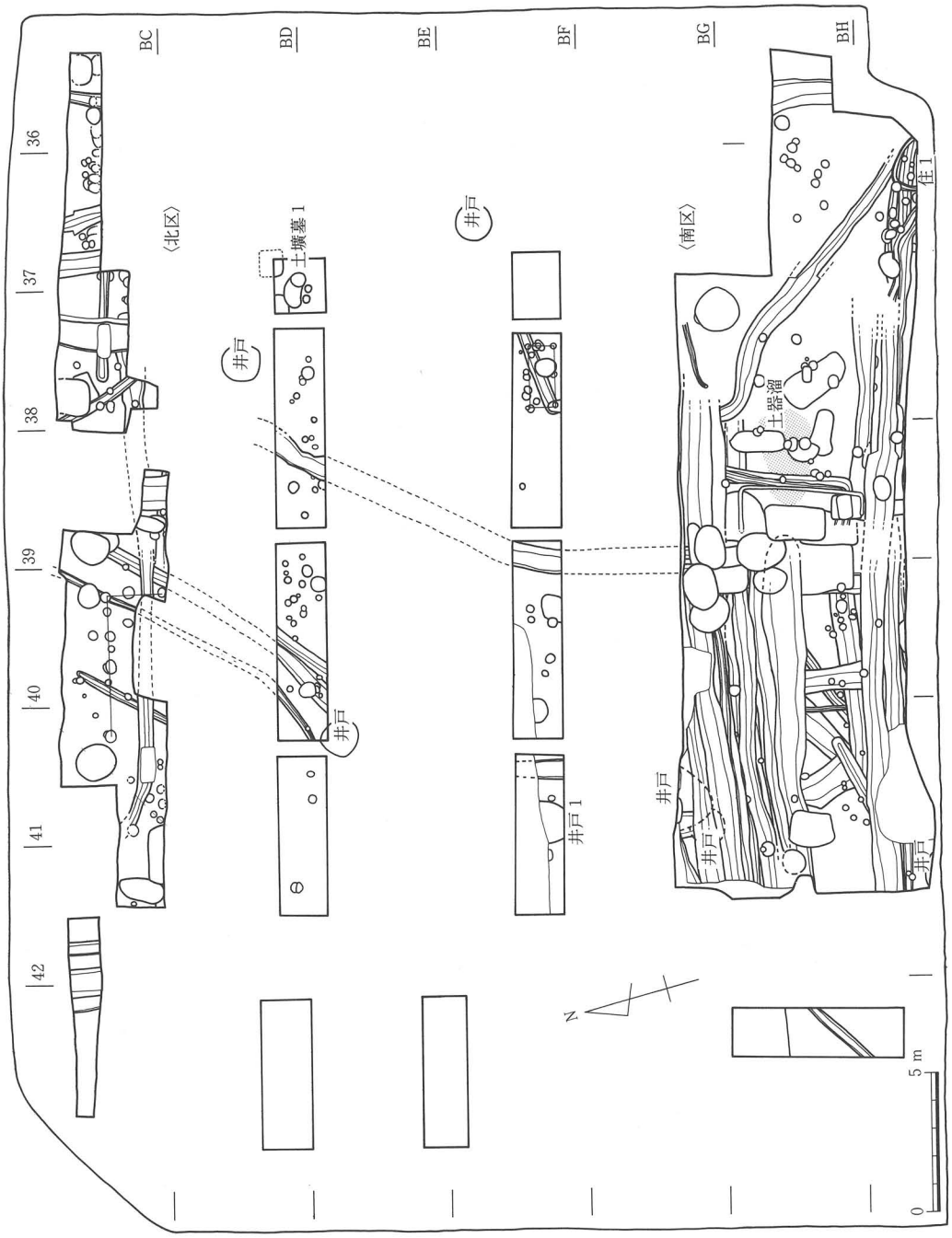


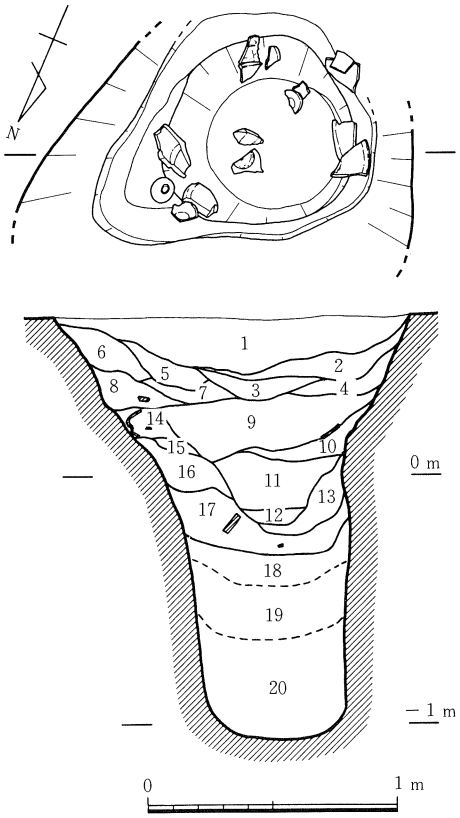
図6　遺構全体図　(縮尺1/250)

いため，現状では，全ての時期決定には及んでいない。ここでは，遺物から時期がある程度判別可能のものについてのみ述べたい。溝状遺構は約半数が中世に，残りが弥生時代に属すると考えられる。土壙についても，中世に属するものが多く，全体の約¾を占め，残りの¼が弥生時代とみられる。しかし，調査区全域で中世の遺構がこのように大勢を占めるわけではなく，北区と南区でそれらの分布状況は大きく異なっている。まず，溝状遺構については弥生時代に属するものが，北区で全体の約85％を占めるが，南区では約30％に下がる。土壙については，弥生時代に属するものが，北区では全体の約30％を占め，南区においても約25％程度を示す。このように，弥生時代には溝状遺構に関しては北区に集中する傾向が強い。また土壙は，やや北半部に多い傾向は認められるが，全体的に数は少ない。中世になると，土壙の数は増加し，溝状遺構は南区に集中する。中世の溝は東西方向のものが特徴的であり，時期が下るにつれて南へ移動する傾向がある。時期は12世紀から14世紀にかけてとみられる。

以上のことから，集落は弥生時代には調査区北半から東半に位置したとみられるが，中世にはその範囲は拡大し，調査区全域に広がると考えられる。

その他の遺構としては中世～近世の土壙墓があり，新しい時期には南区の中央部に集中する傾向が認められる。野壺状遺構は近世に属する。

（山本）



1　暗灰色土
2　暗灰色粘質土
3　暗灰色土
4　暗緑灰色土
5　暗灰色粘質土
6　暗茶灰色土
7　暗灰色粘質土
8　暗茶灰色粘質土
9　黒灰色粘土
10　淡灰色粘土
11　灰色粘土
12　炭層
13　灰色粘土
14　淡灰色粘土
15　淡緑灰色粘質土
16　暗灰色粘土
17　黒灰色粘土
18　暗灰色粘質土
19　暗灰色粘土
20　粗砂混暗灰色粘土

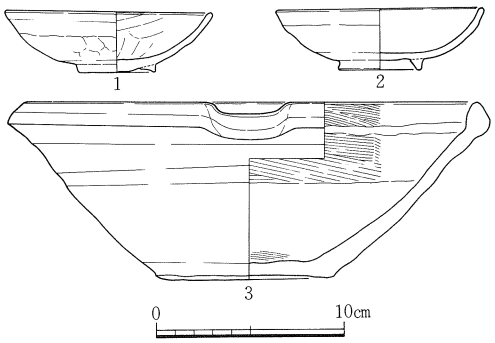


図７　井戸１・出土遺物　（縮尺1/30・1/4）

③　医療技術短期大学部校舎新営に伴う配管部分の発掘調査（鹿田地区　ＤＣ～ＤＥ25，ＤＦ27　ＤＧ～ＤＨ28区）

調査の経過

1986年度に当時の調査室が発掘調査を行った医療技術短期大学部新営予定地周辺における配管工事に際して，その掘削深度が２ｍを越え，前年度の調査で確認された遺物包含層に深く及ぶものが，設計図面の段階で確認された。そのため，急遽，設計変更を申し入れ，遺跡破壊を最小限に押さえた上で，回避不可能な部分に関してのみ，発掘調査を実施した。

調査区はＳ区（ＤＣ～ＤＥ25区），Ｎ区（ＤＦ27，ＤＧ～ＤＨ28）の二ヶ所で，調査面積は14㎡と16㎡を各々測る（図８）。

本調査では，前年度調査の南共同溝部分（本調査地点より東へ10ｍ）で灰色粘土層（10層）から古代の井堰の跡と思われる木杭が検出されたことから，その関連遺構の広がりが調査区内に及ぶ可能性があったため注目された。(註1)

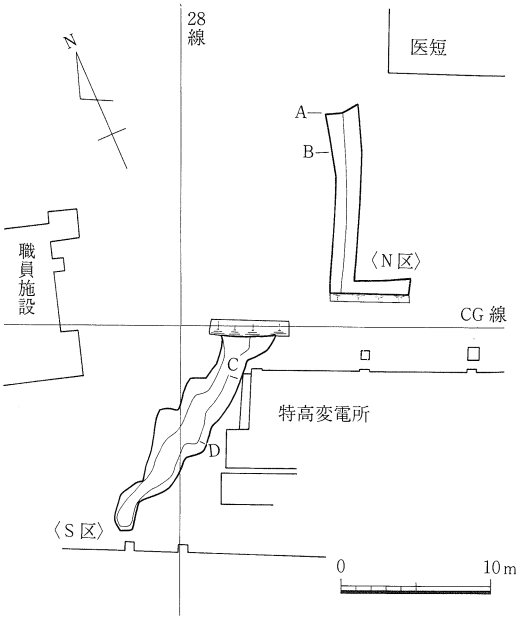


図８　調査区配置図　（縮尺1/500）

当初，Ｎ区は南北に長い長方形の部分のみを調査する計画であったが，南端部に検水桝を設置することになったため，東西に調査区を拡張した。

Ｎ区の調査は標高０ｍ前後で終了した。Ｓ区については，調査範囲の狭さ・湧水・壁の崩落など劣悪な作業状態であったため，標高－50㎝以下については発掘は不可能となった。発掘停止最下層においても遺物が包含され，遺構はさらに深くまで存在することは想像に難くない状態であったが，工事破壊がそこまで及ばないことから，保存の方向で調査を終了した。

調査期間は1987年11月2日～11月21日で，調査員１名が担当した。

層序（図９）

Ｎ区・Ｓ区とも１～６層までの様相はほぼ同様で，前年度の医療技術短期大学部本体工事部分で観察された各層の特徴(註1)と通じる。

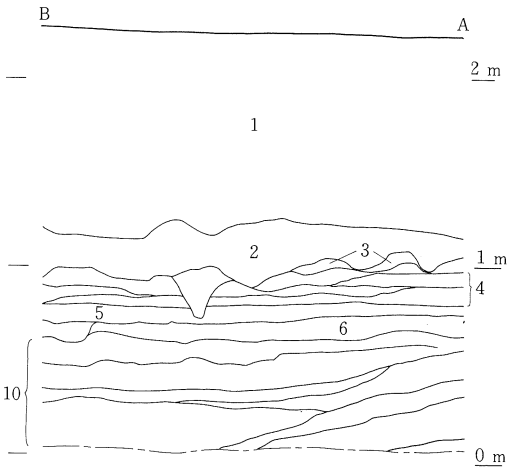
１層は造成土，２層は青灰色粘質土で近代水田土壌である。３～５層は中世包含層に当たる。３層は今回調査区内では残りが悪く，水平堆積を示さない。２層直下に４層が見られる場合が多く，４層はほとんどのところで三分される。５層は全体にわたって水平に堆積し，層は均一である。また，Ｎ区では５層に鉄分が含まれ，淡灰茶褐色を呈す。６層は黄灰色砂質土で，Ｎ

区・S区に同様の厚さで堆積し，前年度調査の本体部分南部にみられる10層と対応する。7層以下ではN区とS区で状況が異なる。N区では6層直下に灰色粘土と粗砂が互層を成す10層が南に向かって落ちる。一方，S区ではN区には認められなかった7～9層が検出された。7・8層は比較的水平堆積を示すが，9・10層については北へ向かって急激に落ちており，少なくとも，10層は自然河道内埋土と考えられる。

調査の結果

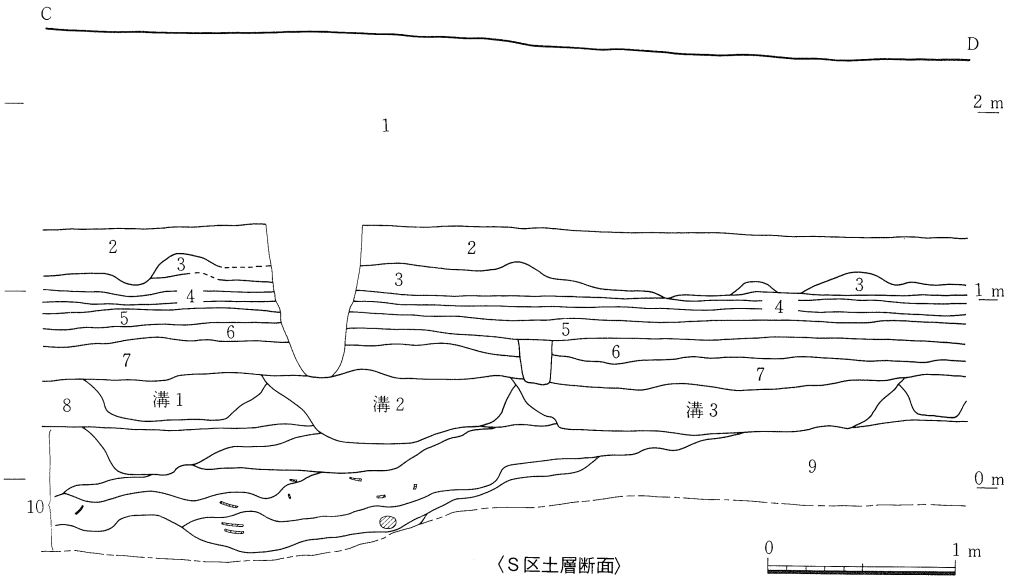
N区内では5層で中世の土器片がわずかに出土したに過ぎず，遺構は検出されなかった。

S区内では中世に属するピット2基，古代に属する溝3条が検出されている。ピットはいずれも5層上面で検出された。遺物は含まれていないが，土層関係から中世に属すると考えられる。溝は，3条とも7層下面から掘り込まれており，溝1は溝2に，溝2は溝3に切られている。調査区が幅狭のため主に断



〈N区土層断面〉

1 造成土
2 淡灰色
3 淡灰褐色土
4 淡黄灰褐色土
5 茶褐色粘質土
6 淡黄灰色砂質土
7 灰褐色粘土
8 暗灰色粘土
10 暗黄色細砂混粘土



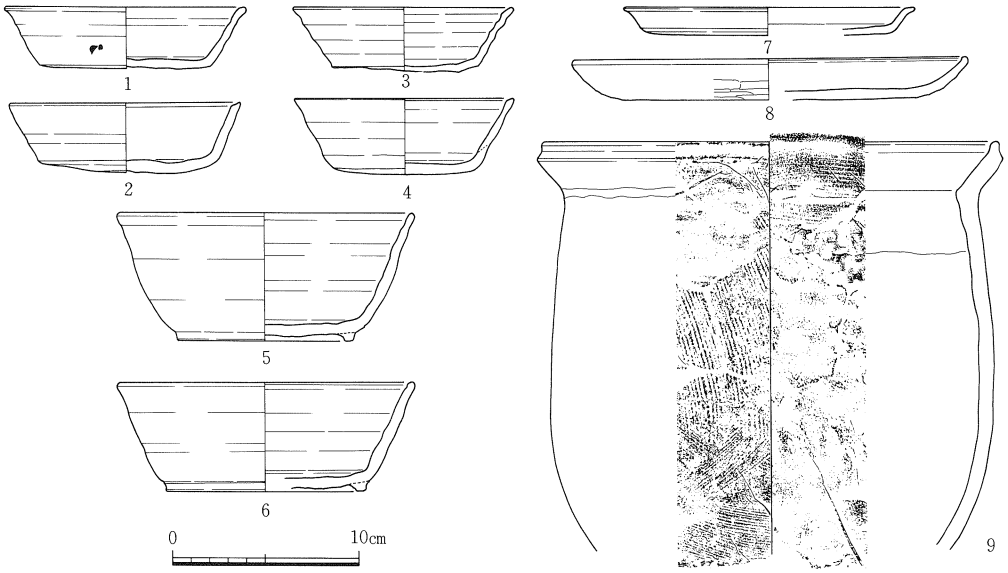
〈S区土層断面〉

図9　調査区土層断面図　(縮尺1/40)

面観察によるものであるが，大きな時期差はないと考えられる。溝１は幅100cm・深さ20cm，溝２は幅140cm・深さ40cm，溝３は幅210cm・深さ28cmを測る。出土遺物（図10・図版９－３）から古代に属すると思われる。

まとめ

今回の調査では，前年度調査済みの医療技術短期大学部南共同溝部の調査成果との比較に重点が置かれた。共同溝部で検出された井堰状施設との関係は杭列等の確認がなく，南共同溝付近にのみ設けられた部分的な施設であったと推定される。しかし，共同溝部で想定された古代の河道の存在についてはこの部分においても確認された。このように古代の遺構が予想以上の広がりを見せ，構内の南端部において確認できたことは非常に貴重であった。　（松岡）



番号	器種	出土地点・層位	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師器 杯	S区 10層	横ナデ，底面外面押圧，外面に墨書痕，底部外面以外丹塗り	暗赤褐色	微砂少量
2	〃 〃	〃 〃	〃 ， 〃 ，内外面炭素吸着	黒灰～暗灰色	〃
3	須恵器 杯	〃 〃	〃 ，底部外面篦ケズリ後中央部のみ押圧	灰色	〃 僅か
4	〃 〃	〃 〃	〃 ，底部外面ナデ，生焼け	灰白色	細砂多量
5	〃 〃	〃 〃	〃	(内)暗灰色(外)青灰色	微砂
6	〃 〃	〃 〃	〃	灰色	〃 多量，細礫少量
7	土師器 皿	〃 〃	〃 ，底部外面篦ケズリ後ナデ，内外面炭素吸着	暗褐色	〃 少量
8	須恵器 〃	〃 〃	内面横ナデ，外面篦ケズリ後ナデ，底部外面ナデ，生焼け	淡灰褐色	〃 〃 ，金雲母
9	土師器 甕	〃 〃	口縁部外面横ナデ，内面横ハケ後ナデ，胴部外面ハケ・内面押圧，全面煤付着	茶褐色	粗砂多量

図10　出土遺物　（縮尺1/4）

註１　岡山大学埋蔵文化財調査室「岡山大学構内遺跡調査研究年報」４　1987
註２　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第３冊　1988

3　試掘調査

今年度は４件の試掘調査（表１）を行った。すべて津島地区におけるもので，身体障害者用エレベーター設置に伴う調査（表１―⑥・⑦）については，理学部・教養部両地点において発掘調査に及んだ。

①　外国人宿舎建設予定地（津島地区 AP02区）

調査地点は津島地区ＡＰ02区に位置し，岡山大学と半田山山塊に挟まれた住宅街の一角，岡山大学土生宿舎の北に隣接している。北はダイミ山の山裾が迫り，東西とも高台に面する谷状の地形である。

調査期間は1987年６月29日～７月６日である。３×３ｍの試掘坑を約10ｍ隔てて東西二ヶ所（西からＴＰ１・ＴＰ２）に設定した（図11）。

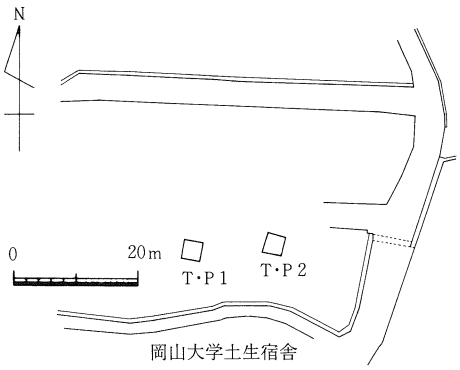
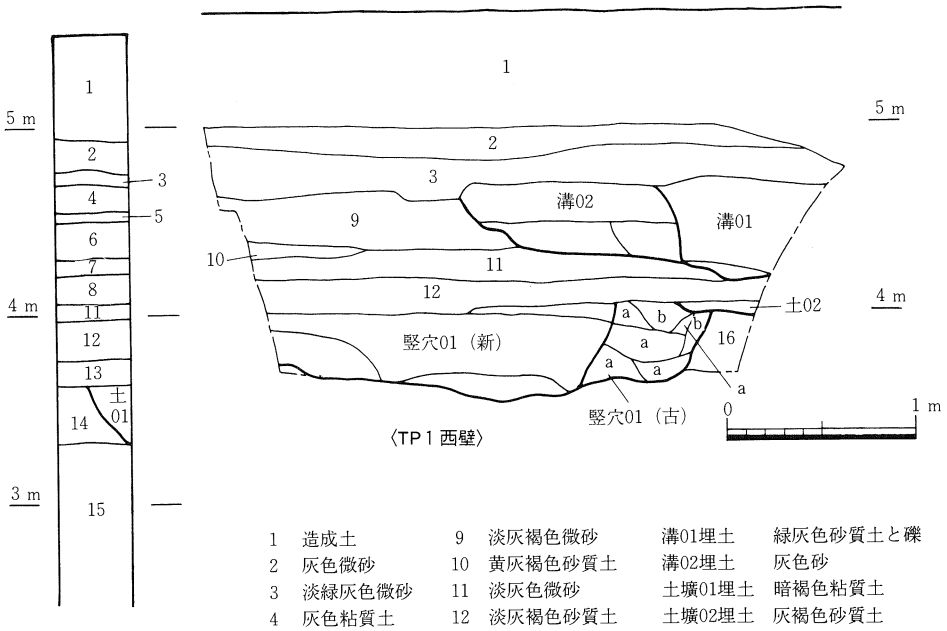


図11　試掘坑配置図　（縮尺1/1200）

層序（図12）

現地の標高は5.7～5.8ｍで，津島地区構内に比べ約１ｍ高い。ＴＰ２を中心に基本層序を見



1	造成土	9	淡灰褐色微砂	溝01埋土	緑灰色砂質土と礫
2	灰色微砂	10	黄灰褐色砂質土	溝02埋土	灰色砂
3	淡緑灰色微砂	11	淡灰色微砂	土壙01埋土	暗褐色粘質土
4	灰色粘質土	12	淡灰褐色砂質土	土壙02埋土	灰褐色砂質土
5	青灰色粘質土	13	灰褐色粘質土	竪穴01（古）	ａ：灰褐色粘土
6	緑灰色砂質土	14	灰褐色砂・砂利		ｂ：灰褐色砂質土
7	淡緑灰色粘質土	15	黄銅色礫	竪穴01（新）	淡灰黒色粘土
8	淡灰色砂質土	16	淡黄白色粘土		

図12　試掘坑土層断面図　（縮尺1/40）

て行きたい。１層は造成土である。２層は造成土直前の耕作土層で，最上面には南北に走る畝状の痕跡が認められた。以下，礫層に至るまで水平堆積の累層である。遺物に乏しいため正確な年代比定は難しいが，３～５層は近世，６・７層は中世，８層は古代，11層は土師器・須恵器片が出土することから古墳時代以降，12層は弥生時代，14層直上からは縄文土器が集中的に出土していることから13・14層は縄文時代の堆積層と思われる。

遺構（図13）

ＴＰ１の９層上面でほぼ南北に走る溝01を検出した。断面はおおよそ逆台形で，肩幅1.2m，底幅0.8m，深さ0.5mである。下半に拳大の礫を多く含んでいる。陶磁器片が出土しており，近世の所産と思われる。

同じくＴＰ１の12層下部で竪穴01を検出した。一部にとどまるが，平面形はやや角張っている。埋土断面（図12）を観察すると，竪穴01（新）は竪穴01（古）を切って堆積しており，底面においても両者の境界に対応して段階差が認められるところから，二つの遺構が重複しているようである。住居址である可能性が高い。竪穴01（古）埋土中に弥生時代中期～後期初頭に属するとみられる甕の破片が出土しており，遺構もほぼ同時期と考えておきたい。

この他，ＴＰ１の土壙02，ＴＰ２の土壙01が，遺構として認められる。

遺物（図14）

心要に応じ触れてきた通り，各層から陶磁器，土師器，須恵器，弥生土器，縄文土器等がいずれも破片ながら出土した。このうち注目されるのは，ＴＰ２の14層上面から集中的に出土した縄文土器である。いずれも深鉢の破片と思われるが，特徴的なものでは，湾曲した沈線文を持つもの（７・９・10），単節縄文を持つもの（８）があり，また，５は粗成土器である。７・９・10は中期に，５・８は後期に位置づけられる。

まとめ

今回の試掘調査地点は，これまでの調査の内最北端に位置し，その内容に注目したが，成果は予想以上に

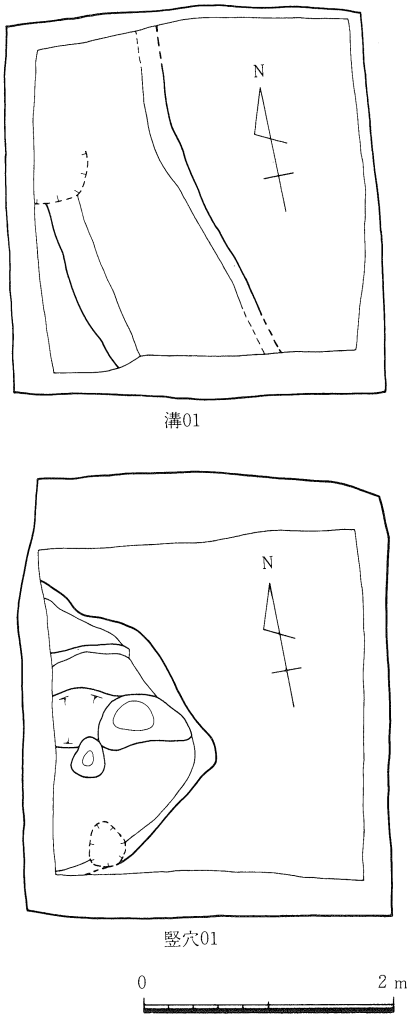
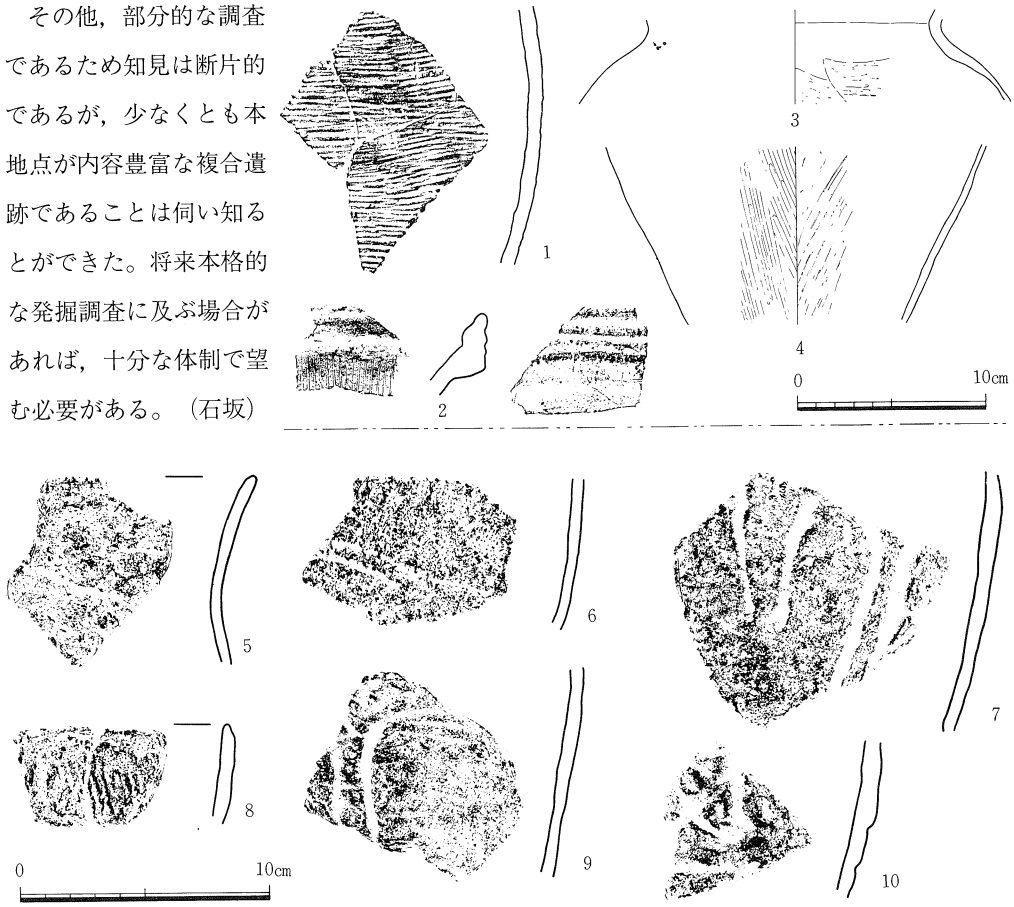


図13　TPI 遺構平面図　（縮尺1/60）

多彩であった。縄文土器がまとまって出土したことは，本地点が縄文遺跡であることを強く印象づけた。南へ約200ｍ隔たった地点には今や消滅してしまったが，やはり，中期末～後期の土器を出した朝寝鼻貝塚が存在し，それとの関係が注目される。

また，別項報告の通り，男子学生寮改築予定地（ＡＶ00・01区）で弥生時代水田址が検出されたが，今回の竪穴01の存在は，その経営主体である集落が，津島地区をはじめ津島構内以南の微高地のほか本地点のような山際の一帯にも展開した可能性を示唆している。

その他，部分的な調査であるため知見は断片的であるが，少なくとも本地点が内容豊富な複合遺跡であることは伺い知るとができた。将来本格的な発掘調査に及ぶ場合があれば，十分な体制で望む必要がある。（石坂）



番号	器種	出土地点・層位	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	須恵質 甕	ＴＰ１，溝01	外面平行タタキ，内面平行タタキ後ナデ	(外)淡灰色(内)灰黒色	細砂多量
2	備前焼 摺鉢	〃 ， 〃	口縁部肥厚し外面に凹線文，内面のオロシメは，１単位８本以上	赤褐色	〃 僅か
3	弥生土器 甕	〃 ，11層	外面摩滅で調整不明，内面横位の篦ケズリ	淡黄褐色	〃 多量,細礫
4	〃 〃	〃 ，竪穴01	外面縦の篦ミガキ，内面縦に篦ケズリ，外面煤付着	(外)淡赤褐色(内)茶褐色	細砂・細礫
5	縄文土器 深鉢	ＴＰ２，12層上面	口縁部緩く外反の粗製土器，口唇部に曖昧な平坦面，無文,外面荒い横ナデ,内面横ナデ	〃 〃 〃 〃	微～粗砂多量
6	〃 〃	〃 ， 〃	無文，摩滅で調整不明	(外)暗灰色(内)淡赤褐色	微・細砂多量
7	〃 〃	〃 ， 〃	垂直に平行沈線文，内外面平滑なナデ	〃淡褐色〃黄褐色	細砂～細礫
8	〃 〃	〃 ， 〃	口縁部僅かに外傾,口唇部尖り気味,口唇部から僅かな空白後外面に単節縄文(RL)横走	〃黄褐色〃暗灰色	微・細砂多量
9	〃 〃	〃 ， 〃	横走から垂下する沈線文，外面平滑なナデ，内面横ナデ	(外)淡灰褐色(内)茶褐色	微～細礫
10	〃 〃	〃 ， 〃	下端で連結しＶ字状に残る沈線文，その下に横走の沈線文，内面平滑なナデ，外面摩滅	〃淡褐色 〃灰褐色	微砂多量

図14　出土遺物　（縮尺1/4・1/3）

② 情報処理センター増築予定地（津島北地区　ＡＶ11区）

調査の経過

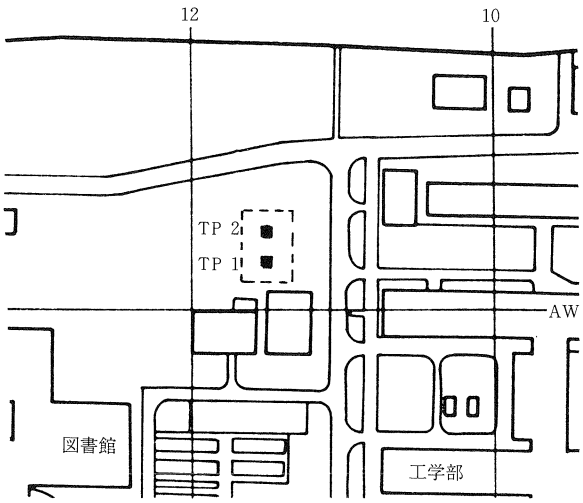
既設の情報処理センター建物の北側に増築計画が予定されたため，遺跡の有無の確認を目的として，東西２ヶ所に４×４ｍ規模の試掘坑を設定し（図15），試掘調査を行った。

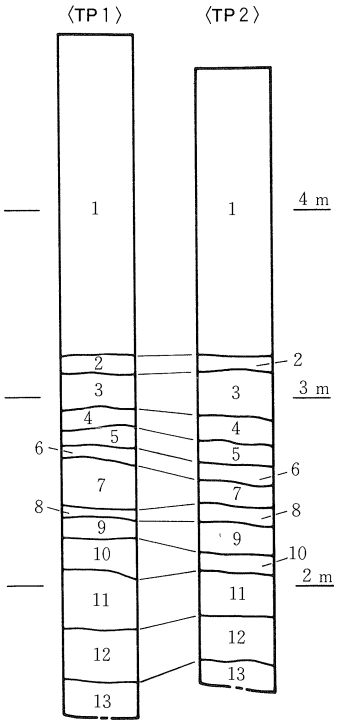
調査期間は1987年６月29日～７月１日である。

調査結果（図15）

造成土は約1.7ｍを測る。津島地区の平均造成土の厚さが0.8～1.2ｍであることを考慮にいれると非常に厚いことがわかる。２～７層についてはその性状から水田の可能性が考えられるが，明瞭な遺構は確認できなかった。また，津島地区全域に見られる黒色有機質土層に対応する10層（黒褐色粘質土）については，その上面レベルが標高2.2ｍ前後を測り，遺構・遺物は認められなかった。10層の上面レベルは男子学生寮予定地においては標高3.0ｍ前後であったことから考えると，やはり，低地部に位置すると言えよう。11層以下についても均一土層であり，遺構・遺物の存在は考え難い状況であった。

遺構・遺物が確認されなかったこと・造成土が厚く最近まで低地であったと予想されること。10層上面のレベルが低いこと等から本予定地は長期間にわたり，低湿地の状態が続いていたものと判断される。　（山本）





1　造成土
2　暗青灰色土
3　茶灰褐色土
4　淡灰褐色粘質土
5　淡灰色粘土
6　灰色粘土
7　灰褐色粘土
8　黄褐色粘土
9　暗茶灰色粘土
10　暗褐色粘質土
11　黄白色粘質土
12　淡黄灰色粘質土
13　淡灰色粘土

図15　調査地点図・土層柱状図　（縮尺1/2400・1/40）

③　身体障害者用エレベーター設地予定地（津島北地区　ＡＹ09区，同南地区　ＢＤ09区）

調査の経過（図16・18）

1987年度の理学部入学生に身体障害者が含まれていたことから，身体障害者用エレベーターの設置が不可欠となり，対象地となる理学部及び教養部に対して，急遽，やや規模の大きな試掘調査という形での緊急調査を行った。

理学部の調査は約５ｍ×７ｍ範囲で実施し，調査面積は約35㎡を測る。調査期間は1987年７月13日～30日である。

教養部の調査は教養部Ｃ棟北側に接し，6.6ｍ×6.6ｍの範囲で実施し，調査面積は約45㎡を側る。調査期間は1987年７月13日～31日である。

調査結果

ａ　理学部（津島北地区　ＡＹ09区）　（図16・17）

１層は造成土である。２層は灰色土で近代の水田層と考えられるが，後世の造成によってその多くは削平を受けている。４層は淡灰褐色土で，鉄分とマンガンの互層構造が顕著に認められる。上面には鉄分の沈着が厚く，鉄分層（３層）を除去すると，幅約20㎝前後の溝が南北に走る状態が10条程度確認された。畑の畝状遺構と考えられる。

５層は灰褐色粘質土である。陶磁器あるいは土師質の燈明皿等の細片が出土しており，中～近世に対応すると判断される。粘質が強く水平堆積であることなどから，水田土壌の可能性が考えられるが，調査範囲が狭く畦畔状のものは検出できなかった。６～７層は灰色系の粘質土で黄白色の土師質高台付き椀（いわゆる「早島式土器」）の小片が出土しており，中世に属すると考えられる。やはり，水平堆積を成しており，水田の存在が想定されるが，畦畔は確認されなかった。８層は茶褐色の砂混じり土である。土壌的に水田の可能性は薄いようであるが，平面的に精査すると砂が畦畔の際に溜った状態で帯状に検出され（図17），断面においても僅かに認められることから中世の畦畔の存在が予想される。９層は淡灰色粘土で，その上面において畦畔が検出された（図17）。遺物は出土していないが，すでに発掘調査済みの男子学生寮予定地の状況

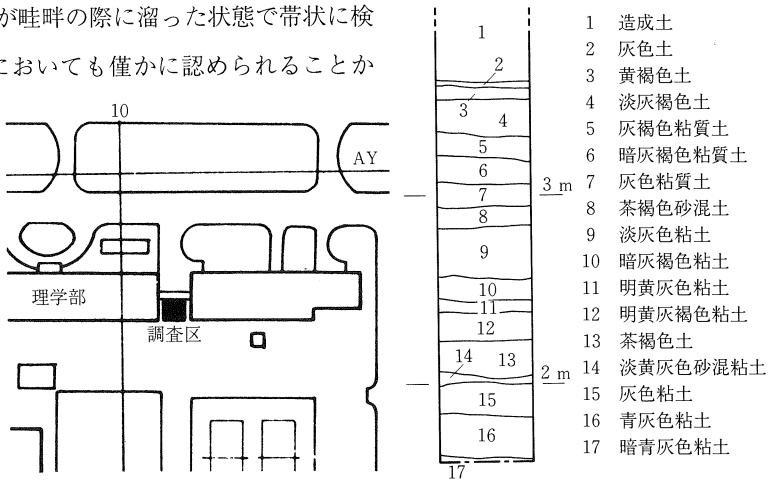


図16　調査地点図・土層柱状図　（縮尺1/2400・1/40）

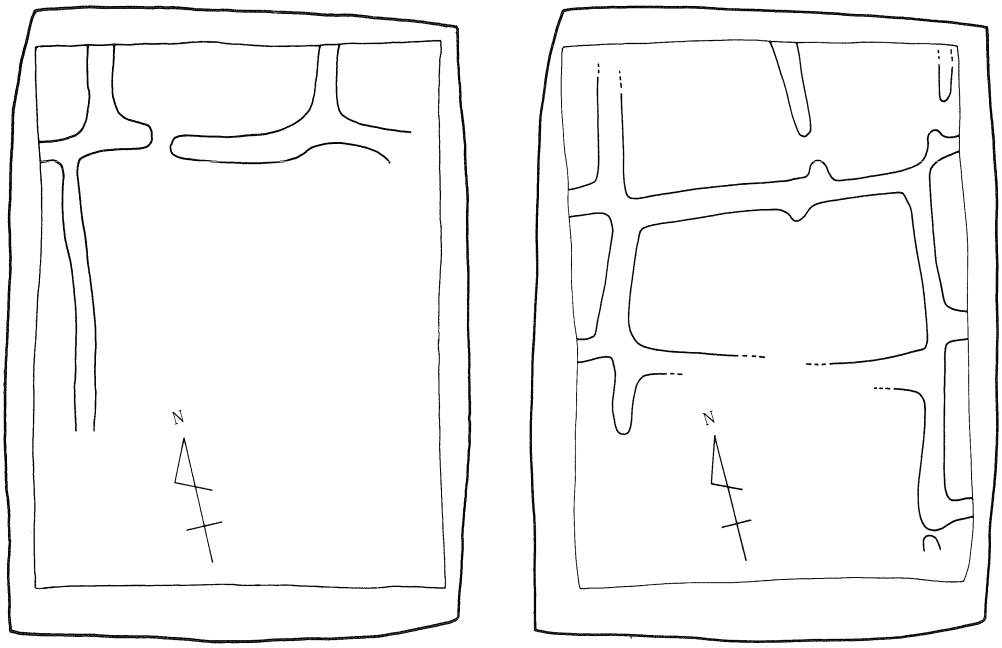
及び他の試掘調査などの結果から，その性状はいわゆる古代の層に酷似しており，９層は該期に対応すると判断される。

10～12層は灰褐色系の粘質～粘土である。遺構・遺物は未検出である。13層は茶褐色土でマンガンの沈着が特徴である。従来の，津島地区での発掘・試掘調査結果から考えて，この13層は弥生時代前期に比定される黒色土に対応する可能性が認められる。その上面レベルは標高2.2～2.3ｍを測る。それに対して，男子学生寮では弥生時代前期水田が検出された面（黒色土上面）が標高3.2～3.3ｍ，河道の底が標高2.2ｍ前後である。本地点が非常に低いことは明瞭である。

14～17層は砂混粘土～粘土層で16・17層については有機物の堆積が顕著であり，低湿地の様相を呈す。遺構・遺物は全く検出されなかった。

以上の状態から，本調査地点では少なくとも弥生時代以前に関しては低湿地的状態を示す低い場所であり，古代・中世の段階で水田化が成されたと考えられる。

弥生時代以前のこうした状況は前年度試掘調査を行った総合大学院予定地の西側の試掘坑の土層堆積状況にも認められる(註1)ことから，本地点より約100ｍ東から西に向かって大きな地形の下がりが存在し，本調査地点が津島地区の中でかなり低い位置にあったことが窺われる。　（山本）



８層上面畦畔状遺構　　９層上面畦畔状遺構

0　2 m

図17　遺構検出状況　（縮尺1/80）

b　教養部（津島南地区　ＢＤ09区）

〈層序〉（図19）

現地表の標高は4.4～4.8ｍである。１層は，1907年の陸軍頓営地造成土およびそれ以降に盛られた造成土で，0.7ｍの厚みを持つ。以下，８層までは旧陸軍の建設物跡によって大きく破壊されていた。２層は近代水田土層ともに出土遺物が稀であったため厳密な年代比定は難しいが，従来の所見と対比すると，３・４層は近世，５層は中世の堆積層と思われる。６層は須恵器片とともに土師質高台付き椀の小片が出土しており，平安時代末以降に下る

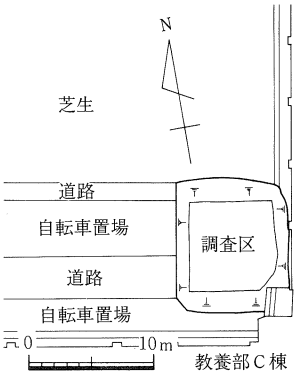
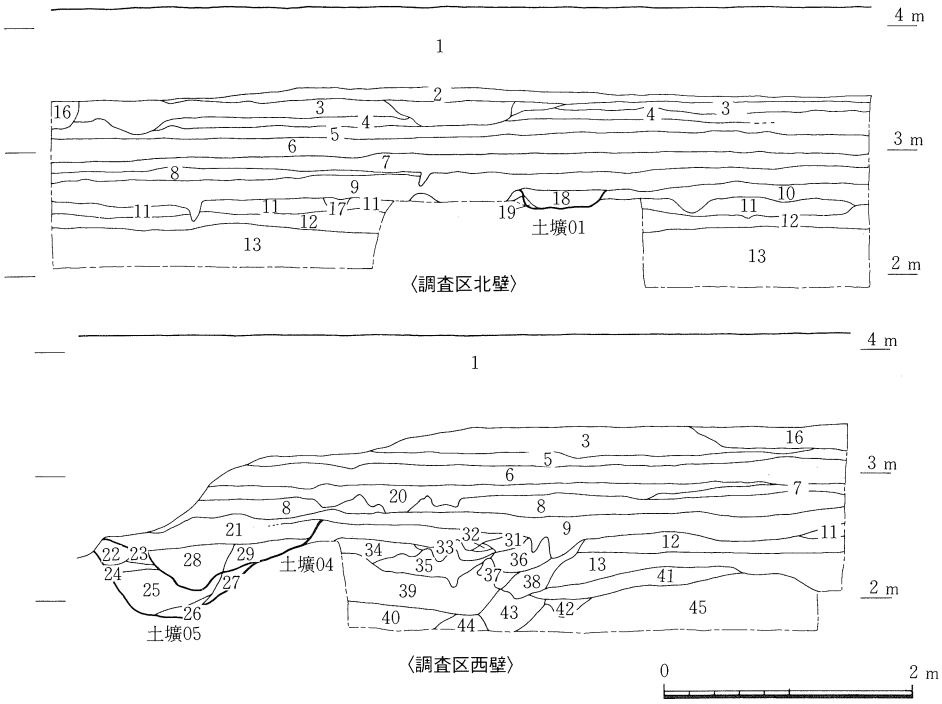


図18　調査地点図（縮尺1/600）



1	造成土	13	灰白色砂	24	暗黄灰色砂質土	35	黄灰褐色砂
2	灰色微砂	14	灰緑色微砂	25	灰褐色砂	36	暗灰褐色砂質土
3	（黄）灰褐色微砂	15	暗灰褐色微砂	26	暗灰褐色砂	37	暗灰色粘質土
4	（黄）灰色微砂	16	灰色微砂	27	黄灰色砂	38	暗灰色粘質土
5	黄灰色微砂	17	暗灰色砂	28	暗灰色砂	39	淡黄灰色砂
6	灰色粘質土	18	灰色砂	29	暗灰褐色砂	40	淡灰褐色砂
7	黄灰色微砂	19	暗灰色砂	30	黄灰色砂	41	淡灰褐色砂
8	灰褐色粘質土	20	灰色粘土	31	暗灰色砂	42	黄灰色砂
9	暗灰褐色土	21	淡黄灰色砂	32	黄灰色砂	43	淡灰色砂
10	灰色砂	22	黄色粘質土	33	淡黄灰色砂	44	灰色粘土
11	淡灰褐色砂	23	淡黄灰色砂	34	淡灰褐色砂	45	淡黄灰色砂
12	黄灰色砂						

図19　調査区土層断面図　（縮尺1/60）

可能性が強い。７層は弥生時代に属すると思われ，両者の間に時間的空白が認められる。８・９層は津島地区一円に分布する黒褐色土に似るが，色が淡く，微高地からは外れているようである。10層以下は砂・砂質土で，縄文時代の堆積層と見られるが，無遺物であった。

通観すると，基本的に水平堆積の累層であり，津島地区で確認されている諸例とほぼ共通する内容であった。縄文時代晩期以前の堆積層は，本地点の場合，粘土層が認められず，砂・砂質土が発達するのが特徴である。流水を伴う地形に当たっている可能性がある。

また，西壁中央部に水平堆積の乱れがあるが（図19下），周囲と異質な粘質土（36・37層）が分布しており，何等かの遺構痕跡の可能性もある。この状況は，側溝部分を挟んで調査区内

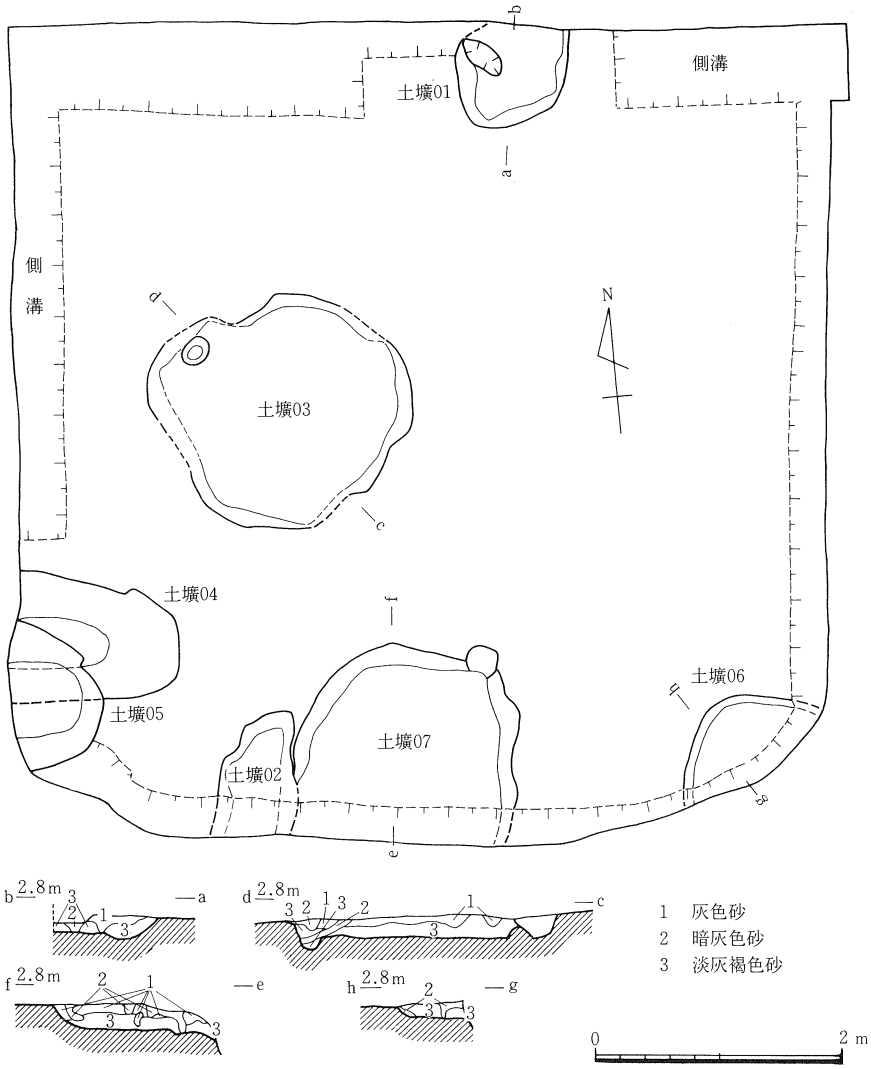


図20　遺構平面図・遺構覆土断面図　（縮尺1/60）

にはおよばず，性格を明らかにできなかった。

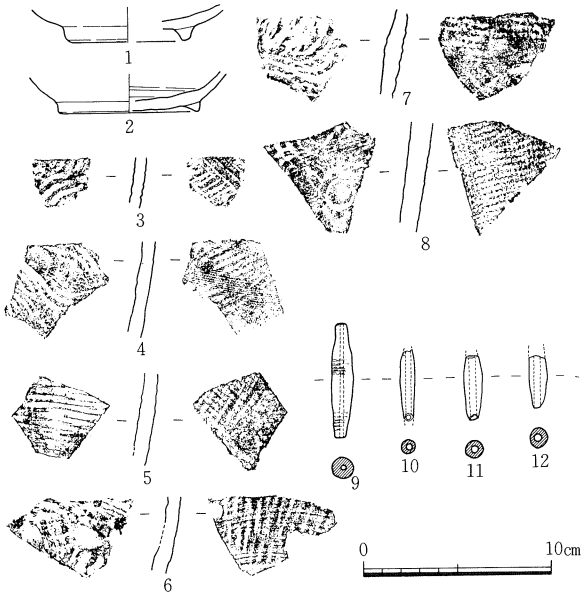
〈遺構・遺物〉

2～9層から須恵器・土師質土器・陶磁器片（図21）が散発的に出土したが，遺構は認められなかった。ただし，水田土壌である可能性が高い。

9層を除去した段階で，土壙状の遺構が6基出土した（図20・図版8）。完掘できたのは土壙04のみである。径2.0mのほぼ円形で深さは10cmである。他は円形もしくは楕円形に近い形状と思われ，深さは土壙04・05がやや深いのを除けば，10～20cmと浅い。埋土も似ており，灰色系の砂が堆積していた。遺物は皆無である。所属時期を推定する材料を欠くが，これまでの調査から8・9層は縄文時代晩期～弥生時代前期頃の堆積と考えられ，それに覆われていることから，これらの遺構は縄文時代の所産と見なされる。

〈まとめ〉

今回の調査では，弥生時代遺構については遺存状態が不良だったことから目立った成果を挙げることはなかったが，縄文時代に属すと見られる土壙群の検出が際だっている。性格的に不明瞭であるが，分布がやや密である点・現状では遺物が全く含まれない点は，これを人工的所産と認める限り，特徴的現象として注目しておきたい。　（石坂）



番号	器種	出土地点・層位	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師質 椀	6層	細片，器面摩滅	黄白色	微砂少量
2	須恵質 〃	7層上面	内外面横ナデ，高台は断面三角形	淡灰色	〃 〃
3	須恵器	6層	外面平行タタキ後部分的ナデ，内面同心円タタキ	〃	微・細砂多量
4	〃	2・3層	〃 〃 〃 ， 〃	暗灰色	細砂多量
5	〃	6層	〃 格子目タタキ，内面同心円タタキ後平行タタキ	灰色	微砂 〃
6	〃	7層上面	外面平行タタキ後板ナデ，内面同心円タタキ	淡灰色	〃 少量
7	〃	6層	〃 格子目タタキ，内面同心円タタキ，生焼け	淡茶褐色	〃 僅か，精良
8	〃	〃	〃 〃 ， 〃 〃 後ナデ	淡灰色	〃 多量
9	土 錘	2・3層	管状，中ぶくらみで両端細くなる，外面にコイル状の圧痕，長6.1cm，最大径1.1cm	淡灰褐色・淡赤褐色	〃 〃
10	〃	〃	〃 ， 〃 ，長3.8cm以上，最大径0.8cm	暗褐色・灰黒色	細砂 〃
11	〃	〃	〃 ， 〃 ，長3.4cm 〃 ， 〃 1.0cm	淡黄褐色	微砂少量
12	〃	〃	〃 ， 〃 ，長2.8cm 〃 ， 〃 〃	淡赤褐色	〃 僅か，精良

図21　出土遺物　（縮尺1/4）

註1　岡山大学埋蔵文化財調査室「岡山大学構内遺跡調査研究年報」4　1987

4　立会調査

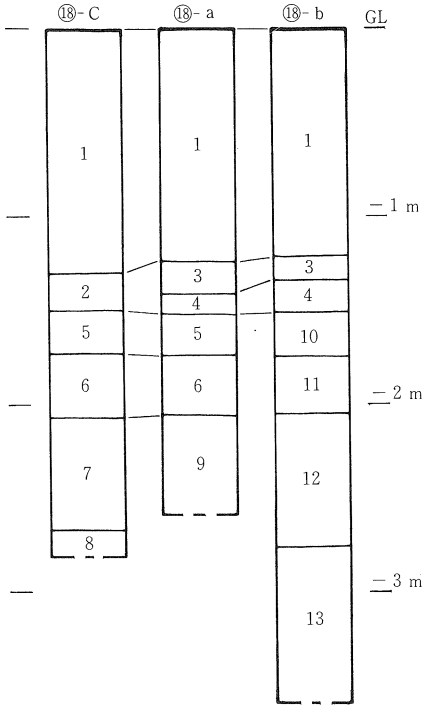
本年度は合計20件の立会調査を行った（表１）。津島地区８件，鹿田地区12件を数え，詳細な項目をあげると51件に及ぶ。両地区における建物新営工事の重複による増加である。

（１）津島地区

津島地区では８件，詳細には14件の立会調査が実施された。その多くは造成土内あるいは既設攪乱内で納まったが，調査⑮・⑯・⑱において造成土以下に及んだ。

最も規模が大きかったのは，津島南地区西辺に近いBF22・23区を中心とする農学部農場施設新営工事関連のもの（調査⑱）である。付近では1983年度に試掘調査が行われており，その結果，水田耕作土層の下に粘土層が発達する状況が確認された[註1]。今回の調査結果も，全体にそれと似た状況を示している（図22）。いずれの地点でも弥生時代前期以前の微高地部に特徴的な黒褐色土は見あたらず，全体に水成堆積によると思われる粘土層が厚く堆積することから，下限は限定できないが，低湿地の状態が長く続いていたものと思われる。遺物は出土しなかった。これに似た状況は，1986年度実施されたＡＶ16・17区での立会調査（文学部グランド改修工事）でも確認されている[註2]。両者を一連のものと考えるには位置的に離れすぎているが，津島地区西部において旧低湿地の存在が目立つことは注目しておきたい。また，最も南に位置する合併処理槽部（調査⑱－b）では，上層に砂，下層に砂利が厚く堆積し，粘土が全く認められない（図22）。東西５ｍ・南北13ｍの掘削範囲にわたり状況は一様で，比較的規模の大きな自然流路跡にかかっていると思われる。現状でも湧水は著しい。流路方向は確定できないが，北に位置する調査地点にはいずれも触れていないことから，東西方向に近いのではないかと思われる。

ＡＷ01区の馬場東給水管修理に伴う調査（調査⑯）では，弥生時代前期以前の微高地に特徴的な黒褐色土が堆積せず，当時の低地部に当たることが確認された。本地点は，1986～87年度にかけて発掘調査を実施した男子学生寮改築予定地の西南約20ｍに位置し，当時検出された，調査区を北東から西南に横断する弥生時代以前の谷状地形の延長上に当たる



1　造成土
2　灰褐色粘土
3　灰色微砂
4　灰褐色砂質土
5　明灰色粘土
6　淡灰色粘土
7　暗灰色粘土
8　淡緑色微砂
9　灰黒色粘土
10　灰色砂
11　灰褐色砂
12　灰色砂・砂利
13　黄灰色砂利

図22　立会調査⑱・土層柱状図（縮尺1/40）

ものと推定される。遺物は出土しなかった。

ＡＱ02・03区の土生宿舎屋外排水管改修工事に伴う調査（調査⑮）では，部分的な自然堆積土の遺存が確認され[註3]，鉄筋建物群の間隙もおろそかにできないことが再認識された。（石坂）

（２）鹿田地区

本年度行った調査は12件，詳細には37件に上る。そのうち約80％が厚さ0.8～１ｍの造成土内あるいは既設の攪乱内に納まった。

主な調査としては管理棟改築に伴う事前工事関係（調査⑬）・医療技術短期大学部校舎新営に伴う付随工事関係（調査⑰）・構内環境整備関係（調査㉑）の３件で，他には医学部附属動物実験施設焼却炉（調査㉓）・医学部附属病院脳代謝棟北給水管工事（調査㉖）等がある。

管理棟関係及び構内環境整備関係については，特殊の場合（調査⑧）[註4]を除いて，いずれも掘削深度が浅く，造成土内の工事であった。ただし，後者の中で旧混合病棟北駐車場基礎工事で弥生時代後期末の高杯・弥生時代後期の甕・近世の擂鉢土器（図23）等が出土したが，その出土位置が高いこと・土層の状態・時期の異なる遺物が混在することなどから，鹿田遺跡内の包含層が再堆積したものであると判断した。

医療技術短期大学部関係の調査では，設計変更後，遺跡破壊が及ぶ可能性が非常に高い部分についてのみ発掘調査を実施[註5]し，他については立会調査を行った。立会調査実施部分では，1.1ｍの造成土下に中世包含層の存在が確認された。遺物はほとんど出土していない。土層状態に医療技術短期大学部の1986年度調査[註2]結果と矛盾は認められなかった。

また動物実験施設焼却炉・脳代謝棟北給水管工事の調査についても約0.8ｍの造成土の下に中世の包含層の存在が確認された。

以上の結果から，鹿田地区ではほぼ全域において，0.8～1.1ｍの造成土下には中世の包含層が存在することが再確認された。

（山本）

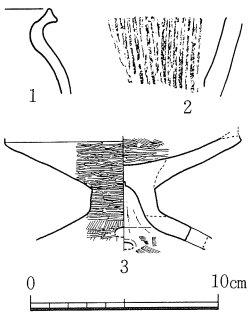


図23　立会調査㉑
出土遺物（縮尺1/4）

註１　岡山大学埋蔵文化財調査室「岡山大学構内遺跡調査研究年報」１　1985
註２　〃　「　〃　」４　1987
註３　遺物が少なかったため，包含層と断定できないが，他地点と堆積土の状態を比較すると，工事部分西端では中世以前，他の大部分では弥生時代以前の堆積土が遺存している。
註４　管理棟改築に伴う発掘調査の概要は本年報の20頁に掲載しており，それと，同一の結果を得ている。
註５　発掘調査の概要は本年報24頁にある。

5　分布調査

岡山大学は，津島・鹿田の両キャンパスの他，岡山・香川・鳥取各県に附属施設を有している。津島・鹿田については，これまで報告してきたように，近年相次ぐ調査によって遺跡の実態が把握されつつあるが，そのほかの施設については，施設内の埋蔵文化財の有無からして確認できていないところが多い。とりあえず機会あるごとに表面観察による遺跡分布調査を実施してきたが，その一環として，1988年３月10日，香川県丸亀市本島町泊494に所在する医学部附属病院本島分室・岡山農場研究施設本島分場（以下「本島団地」と称する）およびその周辺地域について遺跡分布踏査を行った。時間的関係で，周辺地については，今後本格調査の実施を前提とした予備調査として行った。

本島は，岡山県倉敷市の南沖合い約４㎞に位置し，塩飽諸島の一つに数えられている。面積6.75㎢，人口は1000人余りである。島の中央には標高200ｍ近い急峻な山塊が東西に並列しており，沿岸の平坦地に集中して集落が発達している（図26）。本島団地は，面積27884㎡，本島の玄関口となっている本島港に南面する独立丘陵（標高約21ｍ）の頂部を占め，その立地の良さから遺跡との重複が予想された。分布にはやや偏りがあり，東辺に当たる農場学生宿舎周辺（図25－Ａ）が比較的密で，その南西に広がるミカン畑（同Ｂ・Ｃ）内にも僅かながら散布し，西辺に当たる病院分室周辺ではほとんど認められなかった。遺物は土器・陶磁器片に限られ，確実に古墳時代以前に遡るものはない。中・近世に属するものが主体と思われるが布目瓦（図27－４）が含まれていることから，建物跡の存在も予想される。以上の結果から，本島団地内は，少なくとも遺物散布地として認識する必要がある。

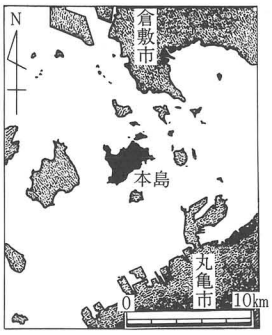


図24　本島位置図
（縮尺1/600000）

周辺地域については，島の東南部に開けた平野部とその周辺丘陵部（本島泊，甲生，笠島）を踏査した。島内はすでに，『全国遺跡地図（香川県）』（文化庁文化財保護係 1977）において遺跡の分布が把握されており，今回は，そこに記載された遺跡の現状確認，および未知の遺跡の発見を目的とした。その結果，所在のつかめなかった遺跡もあった反面，新たに３地点で遺物の散布が確認された（図26）。いずれも現状は畑地である。遺物は土器・陶磁器片少数であるが（図27），確実に弥生時代以前に遡るものはない。３地点とも土錘が採集されており，所属時期を確定できないものの，漁労との密接な関わりを窺わせている。

（石坂）

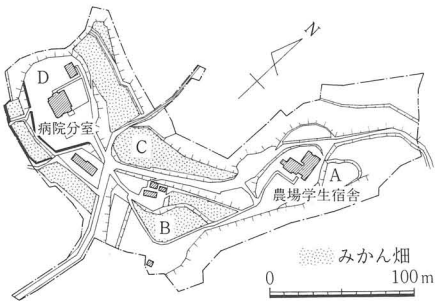


図25　本島団地全体図　（縮尺1/5000）

図26　本島遺跡分布図　（縮尺1/30000）

1．第1地点，2．第2地点，3．第3地点，4．岡山大学本島団地，5．笠島東山古墳（註1），6．笠島城跡，7．亀山古墳，8．旗坂経塚，9．寺田経塚，10．小坂1号墳，11．小坂2号墳

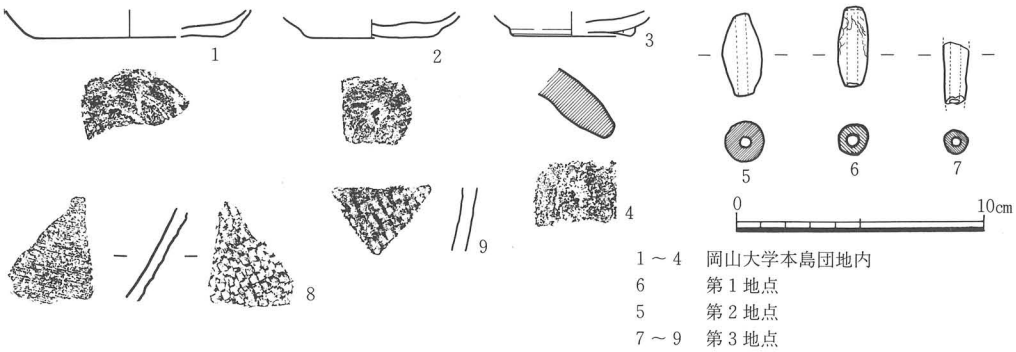


図27　本島遺跡分布調査採集遺物　（縮尺1/3）

註1　1987年，香川県教育委員会によって分布調査が行われていることを今回の踏査実施後に知った。香川県教育委員会に成果を照会し，資料を頂いた。図26制作に当たって参照させて頂いた。

第3章　1987年度普及・研究・資料整理活動

1　資料整理

本年度は次の3件の発掘調査の資料整理を行った。

① 鹿田遺跡（医学部附属病院外来診療棟改築及びNMR-CT室新築に併う発掘調査）

発掘調査報告書の校正・印刷

② 鹿田遺跡（医療技術短期大学部校舎新築に伴う発掘調査）

a　本体工事及び南北共同溝部分：出土遺物の実測を実施

b　配管工事部分：出土遺物の洗浄・注記・復元を実施

③ 津島地区遺跡群（学生部男子学生寮改築に伴う発掘調査）

出土遺物の洗浄・注記・復元，出土種子類の洗浄・採集を実施

2　刊行物

① 岡山大学構内遺跡調査研究年報4　1986年度

1987年10月31日　発行

② 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第3冊

「鹿田遺跡　I」

—医学部附属病院外来診療棟改築及びNMR-CT室新築工事に伴う発掘調査—

1988年3月31日　発行

なお　1987度までの刊行物については附表3で一覧にして挙げている。

3　調査員の活動

(1) 資料収集活動

石坂俊郎　〈九州地方の土器について〉

佐賀，北九州周辺

山本悦世　〈遺物の科学的保存処理について・畿内における中世土器〉

元興寺保存処理研究所，滋賀県教育委員会　他

(2) 資料報告ほか

石坂俊郎　考古学研究会で発表

4　日誌抄

1987年

4月1日	男子学生寮改築予定地発掘調査継続中（調査員：石坂・松岡・山本）
6月2日	八谷・竹内・福田・佐々木・綱澤 非常勤職員として採用
6月18日	男子学生寮改築予定地発掘調査終了
6月22～23日	三朝地区分布調査：石坂・松岡・山本
6月29日	外国人宿舎建設予定地（土生地区）試掘開始：石坂
	情報処理センター増築予定地試掘調査開始：山本
6月30日	埋蔵文化財保護対策検討専門委員会開催
	・埋蔵文化財調査室調査員の整備について
7月1日	情報処理センター増築予定地試掘調査終了
7月3日	調査室月例会議（第1回）
	・今年度の運営方針及び活動について
7月6日	外国人宿舎建設予定地試掘終了
7月9日	農研（倉敷地区）・養護学校（平井地区）現状調査：石坂
7月13日	身体障害者用エレベーター建設予定地（教養部・理学部）試掘調査開始
	教養部：石坂，理学部：山本
7月30日	身体障害者用エレベーター建設予定地（理学部）終了
7月31日	〃　〃　〃　（教養部）終了
8月4日	調査室月例会議（第2回）
	・試掘調査結果報告
	・事務局との打ち合わせ報告
	・分布調査について
8月24日	男子学生寮改築予定地発掘調査再開：石坂・山本
9月5日	〃　〃　〃　終了
9月10日	埋蔵文化財保護対策検討専門委員会開催
	・埋蔵文化調査研究センター設置について
9月10日	調査室月例会議（第3回）
	・発掘・立会調査報告
9月21～23日	山本出張
9月25日	埋蔵文化財保護対策検討専門委員会開催
	・埋蔵文化財調査研究センター設置について

9月25日　調査室会議

・専門委員会の報告…埋蔵文化財調査研究センター設置に関して

9月28～30日　石坂出張

10月2日　調査室月例会議（第4回）

・医学部附属病院管理棟改築予定地発掘調査計画について

・遺物整理計画について

・発掘調査報告書3・年報4の作成について

10月6日　医学部附属病院管理棟改築予定地発掘調査開始

10月31日　年報4発行

11月2日　医療技術短期大学部校舎周辺配管工事に伴う発掘調査開始：松岡

11月13日　調査室月例会議（第5回）

・管理棟・医療技術短期大学部配管部の発掘調査状況および立会の報告

・報告書の今後の予定

11月18日　埋蔵文化財保護対策検討専門委員会開催

・埋蔵文化財調査研究センター設置について

11月21日　医療技術短期大学部配管部発掘調査終了

＊工事掘削深度よりかなり深い一部の下部遺構は現状保存とした

11月25日　評議会開催

・埋蔵文化財調査研究センターの設置決定

11月26日　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター発足　　センター長：近藤義郎

12月1日　岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第3冊　入稿

12月9日　調査研究室月例会議（第6回）

・埋蔵文化財調査研究センターについての説明

・医学部附属病院管理棟予定地の発掘調査について

・報告書作成について

12月28日　御用納め

1988年

1月4日　仕事始め

1月25日　岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第3冊　初校

2月6日　調査研究室月例会議（第7回）

・医学部附属病院管理棟予定地の発掘調査の今後の予定

・今年度および来年度の活動計画

2月16日　埋蔵文化財調査研究センター運営委員会開催（第1回）
・調査研究員の新規採用について
・1988年度の調査計画について
2月24日　埋蔵文化財調査研究センター管理委員会開催（第1回）
3月3日　医学部附属病院管理棟予定地の発掘調査中断（残存基礎徹去のため）
3月4日　〃　の旧建物基礎の解体開始
3月4日　調査研究室研究会（第1回）…縄文土器について
3月7日　津島地区公共座標設置について打ち合わせ
3月9～12日　医学部附属病院管理棟予定地の旧建物基礎解体の立会
3月10日　本島分布調査：石坂・山本
3月15日　調査研究室月例会議（第8回）
・医学部附属病院管理棟予定地の発掘調査について
・立会調査の結果報告
・埋蔵文化財調査研究センターの建物建設について
・津島地区の公共座標設置について　他
3月17日　半田山山塊の一部分布調査：石坂
3月23日　医学部附属病院管理棟予定地発掘調査再開
3月25日　調査研究室臨時会議
・1988年度活動計画案について
・本島分布調査結果報告
・医学部附属病院管理棟予定地発掘調査の予定
3月25日　調査研究室研究会（第2回）…縄文土器について
3月30日　松岡かおり退職
3月31日　医学部附属病院管理棟予定地発掘調査終了
岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第3冊：発行
岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの事務所が津島地区に完成

5　1987年度までの遺物収蔵量および保管施設

(1)　遺物収蔵量（表2）

1988年3月31日における本センターの遺物収蔵量は，鹿田遺跡（医学部附属病院外来診療棟改築予定地・NMR-CT 室新築予定地）：726箱，同遺跡（医療技術短期大学部校舎新築予定地）：125箱，同遺跡（医学部附属病院管理棟改築予定地）：119箱，農学部合併処理槽・排水

管埋設予定地：18箱，学生部男子学生寮改築予定地：48箱，試掘調査：6.5箱，立会調査：6箱，総計1048.5箱を数える。詳細は表2にあげた。1箱の容量は約30ℓを目安としている。また，木器の中で大型水槽に保管のものについても約30ℓを1箱に換算して計算している。

(2) 保管施設

本年度は前年度と変化はなく，施設としては医学部旧基礎医学棟内の一室（約150m²）と医学部附属病院管理棟の一階西半部（292.3m²）を引き続き借用した。基本的には，前者を事務的作業の部屋とし，後者を遺物および発掘用器材の収蔵・保管施設にあてると共に，遺物の洗浄から実測までの作業を行う場として利用した。使用総面積は347.3m²である。

また，年度末には津島地区に，恒久的な建物ではないが，平面積100m²の管理事務所が完成した。1988年度には，津島地区への移転が予定されている。

表2　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要

所属	種類	地区 調査名称	箱数（1箱30ℓ） 総数	土器	石器	木器	その他	サンプル	備考 主要時期・特殊遺物	文献
医病	発掘	鹿田 NMR−CT室	116	90	3	20	1 ガラス 鉄器 銅鏃 他	3	弥生後期～中世 田舟・木簡	⑦
〃	〃	鹿田 外来診療棟	610	491	6	60		52	弥生中期～中・近世 短甲状・櫂状木器等	〃
医短	〃	鹿田　新校舎	122	30		90		2	古代～中世，杭等	⑥
〃	〃	〃　配管	3	3			鹿角製品		古代	⑧
医病	〃	〃　管理棟	119	79	1	20		19	弥生後期～中・近世	〃
農	〃	津島 合併処理槽 排水管工事	18	7 6	1			4	縄文晩期～弥生前期	④
学生	〃	津島　学生寮	48	30	6	2		10	縄文後期～近世	⑥
医病	試掘	鹿田　駐車場	1	1					弥生～中生	⑤
学生 教育 教養	〃 〃 〃	津島　男子寮 〃　研究棟 〃　講義棟	1	0.7	0.3				縄文後期～弥生前期	〃
学生	〃	〃 屋内運動場	1	1					縄文晩期～弥生前期	⑥
理	〃	津島 総合大学院	1	1					縄文後期～弥生前期	〃
事	〃	津島 外国人宿舎	1	1					縄文～中世	⑧
理	〃	津島 エレベーター	0.5	0.5					中・近世	〃
教養	〃	〃　〃	1	1					〃　（遺構縄文）	〃
全学	立会	'83年度	2	2					分銅形土製品	①
〃	〃	'84年度	1	1						②
〃	〃	'85年度	1	1						⑤
〃	〃	'86年度	1	1						⑥
〃	〃	'87年度	1	1						⑧
総箱数			1048.5	748.2	17.3	192	1	90		

＊　文献番号は附表3・4の番号に対応する。　文献⑧は本年報5を指す。

第４章　1987年度構内遺跡の調査及び活動のまとめ

本年度は津島・鹿田両地区において昨年に引き続き，比較的多くの発掘・試掘調査が実施された。

津島地区においては，男子学生寮改築予定地あるいは身体障害者用エレベーター設置予定地（教養部）等の調査において弥生時代前期にまで遡る水田遺構の検出・縄文時代晩期及び後期に遡る遺構・遺物の検出が行われた。そして，鹿田地区においては医学部附属病院管理棟予定地あるいは医療技術短期大学部配管工事地点の調査などにおいて，鹿田遺跡の弥生時代・古代・中世の各時期における遺跡の広がりをより広範囲に把握することができた。

以上のように，発掘・試掘調査については比較的スムーズな調査が進められ，着実な成果が上がっているが，一方，立会調査に関してはいくつかの問題点が表面化した。

一点は，小規模工事における立会調査についてである。今年度発掘調査を実施した医療技術短期大学部配管工事地点は，当初，全ての工事について立会調査で対応する計画で進められていた。詳細については前述しているが，本センターとしては遺跡保護の立場から一部に設計変更を申し入れ，回避不可能な部分について発掘調査を実施した。その結果は予想以上のものであり，立会調査では到底確認できないものであった。このことは，いかに立会調査が危険であるかということを改めて明確にした例である。小規模工事については，発掘調査が困難なことから工事立会で処理してしまう傾向が強い。立会調査と称して，配管等の工事による点あるいは線的破壊が進み，遺跡が虫食い状態で確認されないまま破壊・消滅することも有り得ないことではない。立会調査とするには十分な検討が必要であろう。

二点は連絡ミスなどの十分回避可能な初歩的なミスである。医療技術短期大学部新営工事関係の調査では建物の竣工期限が迫っていたこともあり，強い建築優先志向による連絡不徹底・無断の一部掘削等が何度も繰り返される結果を生んだ。また，構内環境整備事業関係では担当事務官の埋蔵文化財に対する知識不足による不手際が目立った。これは２～３年ごとに移動のある職では仕方のないことかもしれない。こうした状態を回避し，構内での埋蔵文化財に対する対応をより円滑にして行くためには埋蔵文化財に対する関心を高めることが重要であり，求められることであろう。学内における啓蒙活動，そして，引いては一般社会に対する啓発活動の必要性を強く感じた。

埋蔵文化財調査室から埋蔵文化財調査研究センターへと，組織自体も学則に乗っ取った正式な機関として確立し，充実した体制作りが着実に進んできたが，これを契機により積極的な活動を進めて行きたい。　（山本）

附　表

附表１　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）

年度	遺跡名 調査地区名	種類	所属	調査名称	調査組織	調査面積(㎡)	文献	備考
1980	鹿　田	立会	歯	同附属病院棟新築工事	岡山市教育委員会	8.0		
1981	津島南 BD 26	〃	農	寄宿舎新営工事	〃			
	津島北	〃	文法経	合併処理槽埋設工事	〃			
	津島南 BD 09 BC 09～11	〃		基幹整備工事 （共同溝取付）	〃			
	津島南 BD ～ BE 04～07	〃		陸上競技場改修工事 （配水管埋設）	〃			
	鹿　田	〃	医病	高気圧治療室新築工事	〃			
	〃	〃	〃	動物実験施設新築工事	〃 岡山県教育委員会			試掘調査をせず破壊 残存壁面等の調査
	〃	〃	〃	病理解剖体臓器処理保管庫新築工事	岡山市教育委員会			
	〃	〃	医	運動場改修工事	〃			
1982	津　島 AV 06・10 AW 05・14 AX 08, BD 07 BE 10	試掘		排水基幹整備工事	〃			津島 AW 14区で弥生時代包含層を確認，協議
	小橋法目黒 津島北 AW 14	発掘	法文	排水管集中槽（NP-1）埋設工事	岡山大学	24.0	③	
	津島南	試掘	学生	武道館新築	岡山市教育委員会	2.3		
	津島北 AY 15・16	〃	法経	校舎新築工事	〃	7.0		
	鹿　田	〃	医	標本保存庫新築工事	岡山県教育委員会	8.0		
	〃	〃	医病	外来診療棟改築工事	〃 岡山市教育委員会	4.0	2	
	〃	立会	医	動物実験施設関連排水管・ガス管埋設工事	岡山県教育委員会		1	
	鹿　田 AE ～ AN 22 AE 22～26	〃	歯	電話ケーブル埋設工事	〃 岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室			

※文献１　光永真一「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　1983　岡山県教育委員会
　　２　河本　清「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　1983　岡山県教育委員会
　　③　番号は附表３に対応する。

附表２　1986年度以前の構内主要調査（1983～1986年度）

附表２－(1)　発掘調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	期間	面積(㎡)	備考	文献
1983	鹿　田 AU ～ BD 28～40	医病	外来診療棟改築工事	7.27～11.22 '84.1.9～3.31	2188	弥生時代中期後半～中・近世集落址	⑦
	〃　BG ～ BH 19～21	〃	NMR-CT 室新築工事	8.1～12.30	176	弥生時代後期～中世集落址	〃

年度	調査地区名	所属	調査名称	期間	面積(m²)	備考	文献
1983	津島南 BE 14・18 BF 17・18,BG 14 BH 14・15	農	排水管埋設工事	'84.1.9～3.5	265	縄文時代晩期～弥生時代前期集落址	④
	〃 BH 13	〃	合併処理槽埋設工事	11.14～11.22 '84.1.9～3.5	276	〃 ～ 〃	〃
1984	鹿　田 AU ～ BD 28～40	医病	外来診療棟改築工事	4.1～8.31	2188	弥生時代中期後半～中・近世集落址	⑦
1986	鹿　田 CN ～ CU 27・28 CT ～ CX 19～27 CY 16～25 CZ ～ DD 16～25 DE・DF 22・23	医短	校舎新築工事	6.1～11.29	2320	古代～中世の集落址	⑥
	津島北 AV 00・01	学生	男子学生寮改築工事	12.1～'87.3.31	1550	近代～古代の水田址	〃
	津島南 BF・BG 09	〃	屋内運動場新営	'87.1.19～1.22	70	弥生時代前期溝,中世河道検出	〃

附表２－(2)　試掘調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1983	津島南 BH 13	農	合併処理槽予定地	2.5	弥生時代前期土器片 〈1983年度発掘調査〉	①
	〃 BE ～ BG 14 BE・BH 15 BF 16・17 BE・BF 18	〃	排水管埋設予定地	2	〃 , 〃	〃
	〃 BF 17	〃	排水管中間ポンプ槽予定地	3.5		〃
	〃 B F 22・23	〃	農場畜舎新築予定地	2～3	土器片出土, 造成土0.6m 〈1987年度工事立会〉	〃
	〃 BC・BD 15	事務	大学事務局改築予定地	〃	土器片出土, 〃 0.9m	〃
	〃 BB 10	学生	保健管理センター改築予定地	〃	溝検出, 〃 0.8m	〃
	〃 BI 16	事務	津島宿舎改築予定地	2	土器片出土, 〃 0.9m 〈1987年度工事立会〉	〃
	津島北 AW 05	工	校舎増築予定地	3	土器片出土, 〃 1.0m	〃
1984	鹿　田 BT 29・30	医病	西病棟北側受水槽予定地	1.4	中世土器・包含層確認, 造成土0.5～0.7m 〈盛土保存〉	②
	〃 CU 23,CZ19・24	医短	医療短期大学部新営予定地	2.7	中世・古代の遺物出土, 〃 0.8～1.0m 〈1986年度発掘調査〉	〃
1985	津島南 DE 08	教養	議義棟予定地	3.5	遺構・遺物未確認, 〃 1.2m 〈1986年度工事立会〉	⑤
	津島北 AX 02	教育	研究棟予定地	2.6～3.4	縄文～弥生時代土器出土, 〃 1.2m	〃
	〃 AV ～ AW 99～01	学生	男子学生寮改築予定地	2～3	縄文～中世の遺構・遺物, 〃 1.0m 〈1986年度発掘調査〉	〃
	鹿　田 AI 33,AJ・AK 26 AH・AI 40～41	医病	外来診療棟環境整備工事に先立つ範囲確認調査	2.2～3	弥生～中世の遺物, 〃 0.9～1.4m	〃
1986	津島南 BF・BG 09	学生	屋内運動場新営	2.4 1.2～1.7	弥生前期溝・中世河道検出, 造成土1.1m 〈1986年度発掘調査〉	⑥
	津島北 AY・AZ 07	理	総合大学院新営	1.6～3.2	縄文中期末～後期の遺構・遺物検出 造成土0.6～0.8m	〃

附表２―(3)　立会調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1983	東山	教育	附属中学校改築予定地	4～5	シルト層中	①
	鹿　田 AR 38,BC 40	医病	外来診療棟及び旧耳鼻科棟基礎杭保存状況確認調査	2.5～3		〃
	津島北 AX 15	文	中庭水銀燈地下ケーブル埋設工事	0.7	造成土中	〃
	鹿　田 AX 23	医病	旧中央診療棟埋設給水管修繕工事	1	〃	〃
	〃　AL 32	〃	外来診療棟シールド取付に伴うアース線埋設工事	2		〃
	〃　AM ～ BB 39 ～ 41	〃	旧耳鼻科棟水道管修繕工事	0.5	造成土中	〃
	〃　BC 38～42	〃	プール周辺植樹作業	0.7	〃	〃
	〃　AO ～ AY 22	〃	外来診療棟蒸気配管埋設工事	1.3	弥生後期土器（分銅形土製品），貝集積	〃
	津島南 BC ～ BF 18	薬	周辺排水用集中棟埋設工事 水道管埋設工事	2.5 1.5		〃
	津島北 BA 13	事務	西門橋梁改修工事	2.6		〃
	鹿　田 BH 17～18	医病	混合棟北側ガス管埋設工事	1	造成土中	〃
1984	鹿　田 BG ～ BH 17～19	〃	NMR-CT 室新設関係排水施設取付工事	0.6～1.5		②
	〃　BD ～ BH 64	医	旧基礎医学棟中庭駐車場整備工事	0.8		〃
	津島北 AW・AX 11 AZ・BA 12・13	情報	総合情報処理センター 通信用管路埋設工事	0.7～1.4	造成土0.9～1.2m	〃
	鹿　田 AE 37	医病	外来診療棟改築関係電柱架設工事	1.95	〃　1.25m	〃
	〃　BQ 33	〃	中診北病棟外来リカバリー室医療機器用取付工事	1.6	〃　1.5m	〃
	〃　BS・BT 21･22	〃	厨房棟東側埋設ガス管修繕工事	0.8	造成土中	〃
	〃　DB 29	〃	看護婦宿舎前水道管修繕工事	2.0	中世包含層確認，中世・弥生式土器出土 造成土1.15m	〃
	津島南 BI 16	事務	非常勤講師宿泊施設新営工事	1.6	〃　1.0m	〃
	〃　BI 15	〃	南宿舎合併処理槽取付工事	2.0		〃
	〃　BI 15～17	〃	南宿舎合併処理槽関係配水管埋設工事	1.0～2.2	溝・土壙検出，須恵器・弥生式土器出土 造成土1.0m	〃
	鹿　田 BA ～ BB 15～23	医病	外来診療棟関係ガス管引込み工事	1.2～1.4	ほとんど造成土	〃
1985	鹿　田 AX ～ BF 23 BG・BH 24･25	〃	外来診療棟関係屋外排水管埋設工事	1.3～1.7	造成土0.7～1.3m 中世・弥生の遺構・遺物確認	⑤
	〃　CS 68	〃	看護学校構内水道メーター取設工事	1.0	造成土中	〃
	〃　AN ～ AS 42他	医	基幹環境整備給排水その他工事	1.0	近世土器溜り検出，造成土0.8m	〃
	鹿　田 AT ～ AV 40 BA 35～43	医病	基幹環境緑化工事，外来診療棟西	1.1	中世包含層確認，造成土0.8m	〃
	〃　AK・AL 34～39 AM ～ AR 39 AG・AI 34～38	〃	〃　，外来診療棟北	1.1	〃　，〃　〃	〃
	〃　BB 22他	〃	基幹環境整備給排水その他工事	1.15	造成土1.0m	〃

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1985	津島北 AV 06・07	工	三次元棟新設関係排水管埋設工事 三次元棟建設	1.5～1.7	土器細片出土，造成土1.0～1.5m	⑥
1986	鹿　田 CS ～ CX18～26 CQ・CU・CW 15 CM 12,CH 33 CN ～ CU 13	医短	樹木移植	0.8～1.5	造成土1.0m	〃
	〃　BM 45 BI ～ BN 45	医	排水・汚水管改修	0.8～1.3	〃　0.8m	〃
	津島南 BE 08・09	教養	校舎新営	2.3	〃　1.3m，中・近世土器・溝検出	〃
	鹿　田 BI 10, CW 28 DC 29,CK 27 CN・CO 26・27 CK ～ CN 26 CK ～ CV 28 CV 26・27	医短	〃　設備	0.5～1.2	〃　0.8～0.9m	〃
	津島北 AU 04・16・17 AV 15	文	樹木移植	1.0～1.6	造成土内	〃
	〃　AV 16・17	〃	グランド改修	3.5	造成土1.5m	〃
	津島南 BG 08	学生	ハンドボールコート新設	0.2～2.0	〃　0.8m，黒土確認	〃
	津島北 AX 16	文	動物実験室新設	0.95	造成土内	〃
	鹿　田 CM ～ CZ 12～14	医短	護岸及び囲障工事	2.0	造成土0.8～1.0m，中世包含層	〃
	津島南 BF 07・08	教養	校舎新営に伴う電気配管	1.8	〃　0.9m，　〃	〃

※　発掘・試掘調査については全てを，立会調査については主要なもののみを対象としている。
文献番号は附表３・４に対応する。

附表３　埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名　称	発行年月日
①	岡山大学構内遺跡調査研究年報１　1983年度	1985年２月28日
②	岡山大学構内遺跡調査研究年報２　1984年度	1985年３月30日
③	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW 14区）の発掘調査 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第１集	1985年５月７日
④	岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ（農学部構内 BH 13区他） 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第２冊	1986年３月31日
⑤	岡山大学構内遺跡調査研究年報３　1985年度	1987年３月31日
⑥	岡山大学構内遺跡調査研究年報４　1986年度	1987年10月31日

附表４　埋蔵文化財調査センター刊行物

番号	名　称	発行年月日
⑦	鹿田遺跡Ⅰ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第３冊	1988年３月31日

附　編

瀬戸内技法小考

―接合資料から類推される作業面の補正技術について―

絹川　一徳

はじめに

瀬戸内技法についての論議は，ここ数年，ますます活発になっているといえる。瀬戸内技法は，石刃技法とともに多くの研究者に知られている石器製作技術の１つである。しかし，その反面，実際の個々の資料レヴェルでの認定に至っては，少なからず混乱を生じえている事実は否めない。瀬戸内技法は，鎌木義昌氏によって提唱され（鎌木1960），二上山北麓で表採された膨大な瀬戸内技法関連資料の検討を行なった松藤和人氏によって，その修正，例証がなされた（松藤1974，1979）のであった（図28）。そして，その後も瀬戸内技法をめぐる重要な論考がいくつか示されている。だが，各研究者においても，瀬戸内技法の理解に関しては，その概念的な模式図を範としすぎるきらいがある。むろん，瀬戸内技法はシステマティックであり，素材の獲得（第１工程）から，翼状剥片の剥離（第２工程），国府型ナイフ形石器の製作（第３工程）までの一連の規格的な石器製作技術であることに相違はない。だが，冒頭で述べたように，近年岩戸的横長剥片剥離手法（綿貫1982），三国技法（平口他1984）や殿山技法（織笠1987）などの瀬戸内技法と対置される諸技術の提唱や，殿山技法に対する批判（松藤1987）等，瀬戸内技法の認識のみならず，その内容自体が深く問われようとしている。瀬戸内技法を主体とする国府石器群の中心的地域ともいえる近畿，備讃瀬戸地域においては，層位的に不利な条件下にあり，良好な一括資料，接合資料が欠如したままであり，そのため，定量的な分析による瀬戸内技法の技術的要素の抽出という作業が中心になされてきた。したがって，その普遍性は深く追求することはできるが，実際の個々の資料レヴェルでの差異をどのように理解するかということになると，どうしても典型的なもの以外は，その認定に苦慮する面があった。そのため，本来同技術であるものが他技術として誤認されるおそれも多々あろうかと考えられる。本論では，香川県国分台遺跡[(1)]から出土した翼状剥片と翼状剥片石核の接合資料，ならびに剥片剥離作業面に複数の剥離痕をもつ打面調整が施された石核等の資料を中心として，瀬戸内技法における石核作業面の補正作業について言及したい。

瀬戸内技法について

瀬戸内技法の名称は鎌木氏が『図説世界文化史大系』の中で解説したのが初見である（鎌木1960）。1965年の『日本の考古学Ⅰ』の中で同氏はさらに詳述している（鎌木1965）。この中で，瀬戸内技法は横長の刃器を剝ぎとる特殊な技術として理解されている。また，国府型ナイフ型石器の製作段階までが，瀬戸内技法に含まれており，翼状剝片剝離については，以下のように説明される。

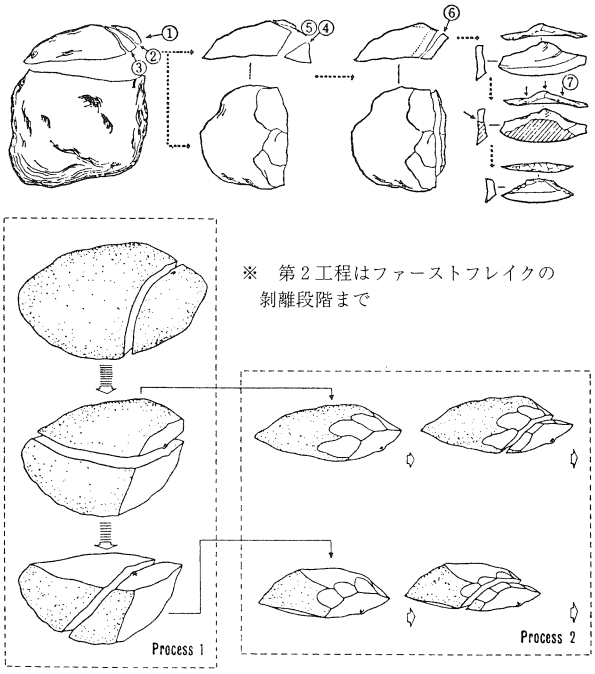


図28　鎌木（上）と松藤（下）による瀬戸内技法工程模式図
（鎌木1965，松藤1979）

「…〈中略〉この石核から，横長の剝片をとりやすいように，打撃面を調整する工作もおこなわれなければならない。つまりこの調整工作は石核となる石のうえに打撃をくわえやすい稜線をつくることが目的となっている。…〈中略〉…打撃は調整された打撃面の稜線にむかってなされるわけで，稜線に対して順次なされる打撃によって，ほぼ似かよった横長の刃器がえられる。調整面の稜線がなくなると，さらに打撃面の調整をおこない作業を継続する。…」

この中で翼状剝片石核の性質として，〝打撃面を調整する工作〟，つまり，山形状に打面調整を施すことが必須の条件として述べられている。この調整によって，打撃を加えやすくすることと，翼状剝片の規格性が保証されるわけである。さらに，〝打撃面が不適当になれば，たえず打撃面を有利なように調整する〟という方法がとられるのである。

このように，鎌木氏が瀬戸内技法を提唱した当初から，山形状の打面調整は瀬戸内技法の中で重要な調整技術として位置づけられたのである。松藤氏は，この打面調整を打面部の整形のみならず，石核整形の側面ももちうるものとして理解した（松藤1974）。このような見解から，さらに一歩踏み込んだのが柳田俊雄氏である。柳田氏は，岩戸遺跡と越中山Ｋ遺跡における瀬戸内技法第２工程（翼状剝片剝離の段階）の接合資料から，瀬戸内技法における打面調整作業の意義を以下のように指摘する（柳田1982）。まず，(1)石核の正面観が打点を中心として左右

均等な山形状を呈すること，(2)山形状に整形された左右の打面縁はほぼ直線的であること，また，(3)打面部の両端は底面に接触すること，そして(4)打点付近には調整作業がほとんど施されないことなどが掲げられている。この調整作業は，瀬戸内技法の目的ともいえる翼状剝片の石核底面の付着（底面を付着させることによって安定した刃部を得られる）と，同形剝片の多量生産のためにあるのである。

このように，瀬戸内技法と打面調整との関係は不可分なものであり，同時に瀬戸内技法を行なううえで必要不可欠な調整技術であるといえよう。翼状剝片石核に施される打面調整の方法には，いくつかの変異を認めることができる[2]（松藤1979，竹岡1980）が，上述したような意義，目的自体は，何ら薄らぐことはないのである。

次に瀬戸内技法のもう一つの特徴として，打点の直線的な後退ということが指摘できる。この点についても，鎌木氏は〝おなじ稜線上に打撃をくわえる〟と理解し，この稜線がなくなれば，打面調整によってふたたび稜線を形成すると考えたわけである（鎌木1965）。山形状の打面調整と打点移動の相関は柳田氏等の一連の研究によって確認されている（柳田・藤原1981，柳田1982）。翼状剝片石核の正面観が山形状を呈しておれば，剝片剝離が続行され，形状が不都合であれば，ただちに補正されるわけである（図29）。このように，瀬戸内技法第２工程，すなわち翼状剝片の剝離段階においては，山形状の打面調整を石核に施し，絶えずその形状の保持に努めることが重要な要件であることが理解できるわけである。では，その打面調整による補正によっても剝片剝離の進行が困難な場合，つまり石核作業面の著しい変形などのアクシデントが生じた場合，石核にはどのような補正作業が施されるのであろうか。以下，いくつかの資料を例示しながら考えてみたい。

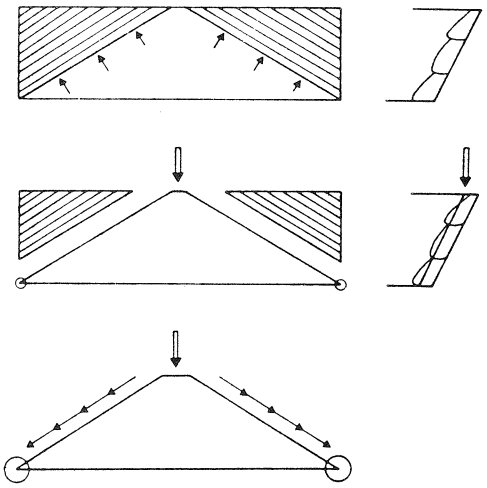


図29　翼状剝片石核の理想的な石核正面観
（柳田1982）

資料について　（図30，図31）

ここに紹介する資料は，1959年に岡山大学の国分台遺跡発掘調査団（団長近藤義郎）によって発掘された国分台遺跡出土の資料であることを明記しておく。

No１．翼状剝片（図30）　西２区出土[3]。石材はサヌカイトである。背面はほぼ同方向のポジティヴな底面とネガティヴな前段階の剝離痕を残している。打面部は合計３面の打面調整痕が残されており，うち一面はこの翼状剝片が剝離される直前に

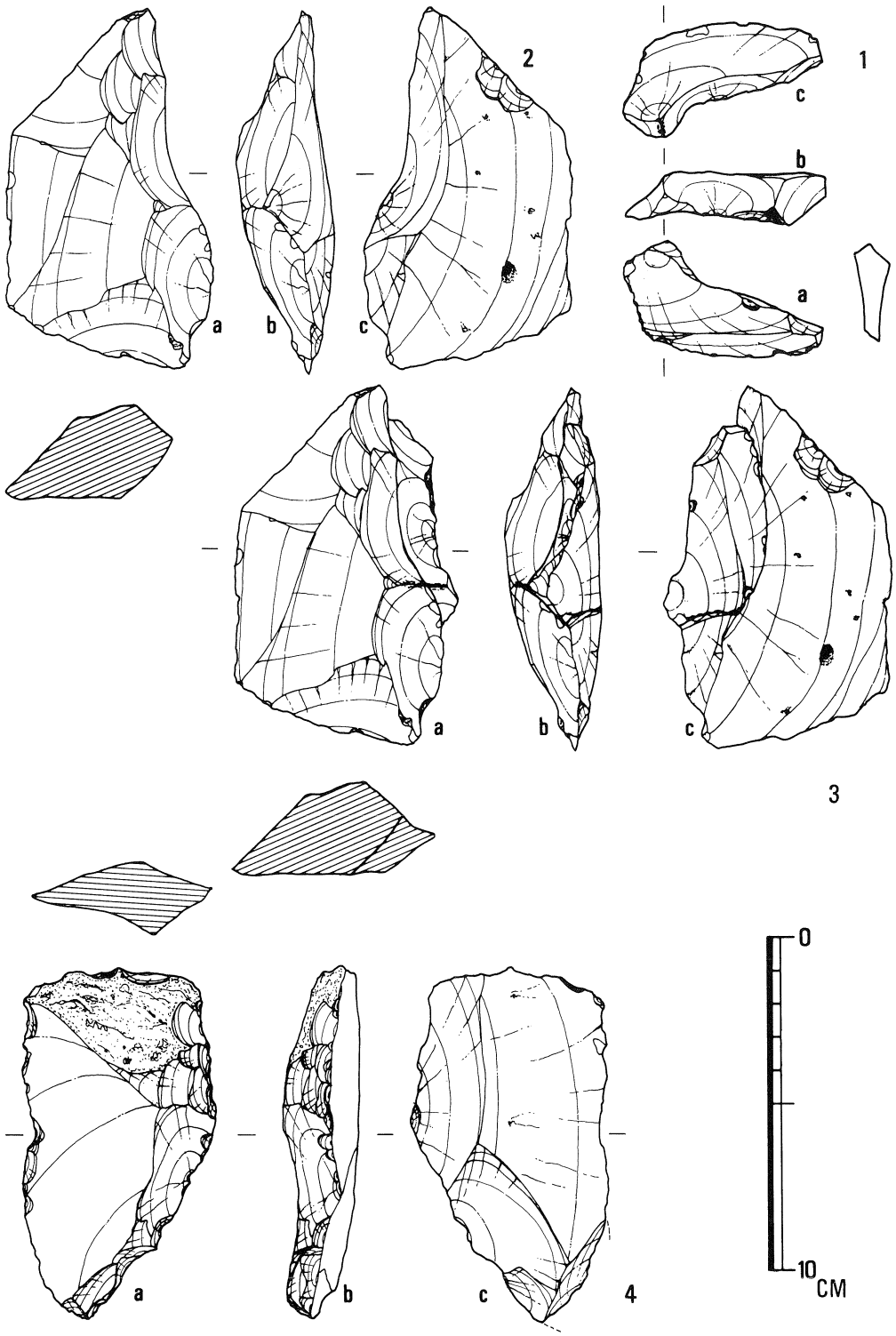
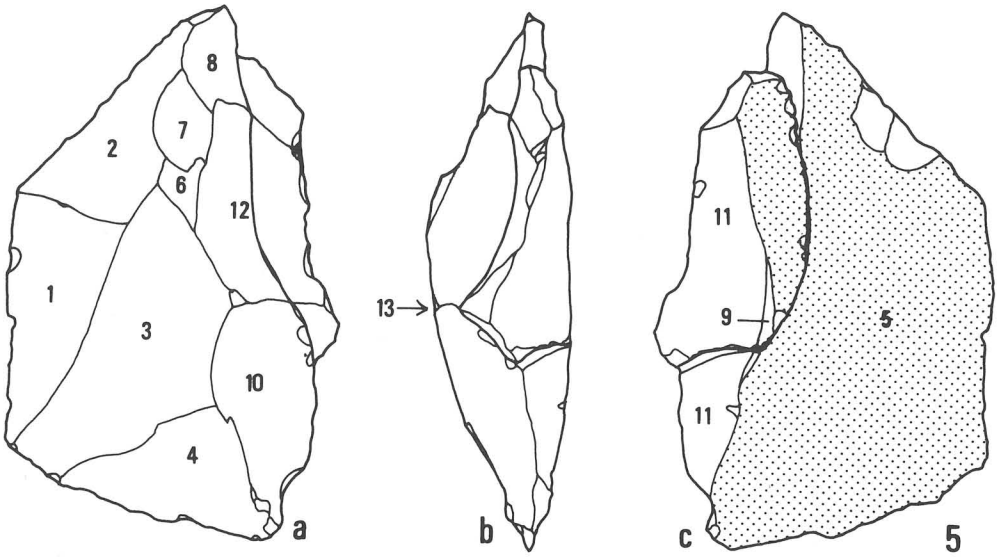


図30　国分台遺跡の石器　（縮尺1/2）



※スクリーントーン部はポジティヴな剥離面

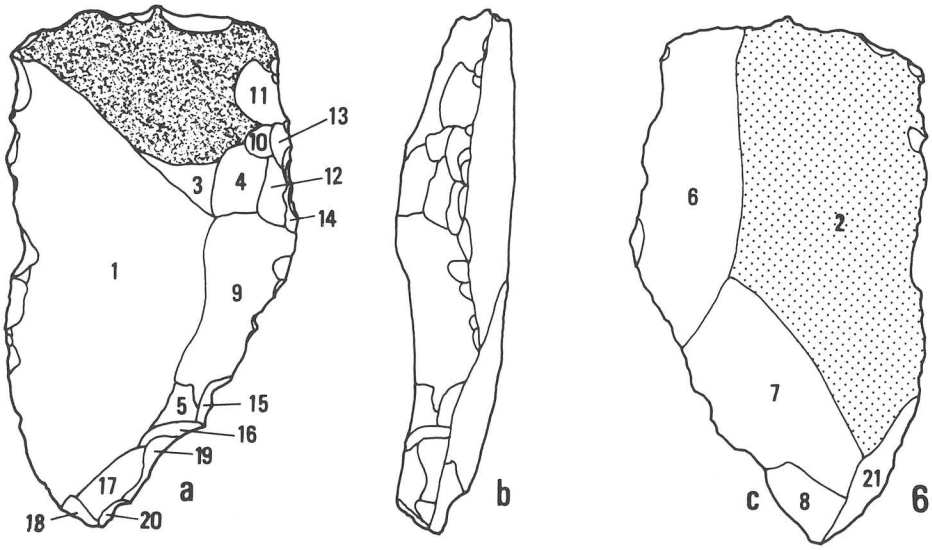


図31　剥片剥離順序関係図

剥離されたものである。全体として大きく右に片寄っており，典型的な翼状剥片のような左右対称形を呈さない。

No 2．翼状剥片石核（図30）　西２区出土[4]。No 1 の翼状剥片が接合する。数回の大まかな剥離によって，山形状に打面が形成されている。前述の翼状剥片は石核上面中央の稜線上を打点として剥離されている。この翼状剥片が右に大きく片寄って剥離されたため，石核腹面

（C面）の左側に前段階の翼状剥片の剥離痕を残している。したがって，b面の石核正面をみる限りにおいては，左右対称の山形に近い状態になるものの，a面の石核上面をみると，打点の進行位置にあたる中央稜線からみて，左右打面縁が不均等になっている。このように打面縁が直線的に整っていなければ，翼状剥片を継続して剥離することは困難となろう。事実，剥離された翼状剥片は使用されておらず，また翼状剥片剥離もこれで終了している。No 3（図30）はこのNo 1とNo 2の接合した状態である。前段階に剥離された翼状剥片の剥離痕がよく観察できる。剥離面の残存部を計側すると，長さ1.8cm，幅7.6cmである。打点付近や左右縁片部が欠損するため，実際はもう少し大きな数値を示すだろう。また，この剥離面以外にもう一面ネガティヴな剥離面が認められるが，これはさらに前段階の翼状剥片剥離面である。No 5（図31）は接合資料の剥離面の新旧関係を示したものである。剥片剥離技術に関係があろうと思われる剥離面には番号を付けてある。①～⑬面までがそれである。①～⑤面はこの翼状剥片石核の素材となった盤状剥片の剥離（瀬戸内技法第1工程）に由来するものである。①面は平坦な剥離面である。②～④面もネガティヴな剥離面であり，⑤面はポジティヴな剥離面である。次に打面調整として⑥～⑧面の剥離が施されている。これら打面調整の後に翼状剥片が剥離され，⑨面を残したと思われる。この⑨面の剥離後，ふたたび打面調整として⑩面が剥離される。そして，⑪面の翼状剥片が取られている。次にふたたび⑫面が打面調整として施される。この⑫面の打点はNo 1の翼状剥片に残されている。⑫面と⑩面のなす稜が次の翼状剥片剥離の加撃点となっている。こうして最後に⑬面（接合面）の剥離，すなわちNo 1の翼状剥片が剥離され，この石核は放棄されたものと思われる。No 2とNo 3の図を比較すればすればわかるように，No 3の接合図では，a面（石核上面）の打面縁の状態はほぼ一直線状になっており，翼状剥片剥離には理想的な形状を示している。ところが，No 1の翼状剥片が片縁に大きく片寄って剥離されたため，No 2の石核の打面縁は著しく左右非対称となってしまったわけである。このNo 2の石核においては，もはや打面調整を施すだけでは，打面縁の形状を補正することは難しい。もし，翼状剥片剥離を継続するなら，作業面の補正を行なわねばなるまい。このように，この接合資料からは，作業面の補正作業の原因をみることができよう。

No 4．打面調整石核（図30）　東3区出土[5]。石材はサヌカイトである。a面には丁寧な打面調整が施されている。c面には，並列する剥離痕が2面認められる。2面とも打点は，打面調整によって失われている。No 6（図31）はこの石核の剥離面の新旧関係を示したものである。①～㉑番号を付けてある。①面はネガティヴな剥離面である。②面はポジティヴな剥離面だが，ほとんど平坦な面となっている。この①と②面の剥離方向は約65°のズレをみせる。①，②面とも盤状剥片に由来する剥離面である。次に③，④，⑤面の打面調整が施される。これらは他の打面調整面と比較しても平坦で，もともとは大きな剥離面を形成していた可能性が

ある。この後に，⑥，⑦，⑧面の順で剥離が行なわれるが，⑧面は末端が階段状剥離を示し，意識的に剥離されたものではなく，アクシデンタルなものと思われる。続いて，⑨～⑳面までの細かな打面調整が施される。㉑面は折れ面と考えられる。

さて，この石核の性格であるが，瀬戸内技法と山形の打面調整の有意な相関は先に述べたが，問題は，この石核を翼状剥片石核，つまり瀬戸内技法の所産であるとするならば，並列する⑥，⑦面の剥離面をいかに理解するかということである。瀬戸内技法は打点を直線的に後退するのがその特徴といえる。とすれば，打点を横に移動させたこの石核は，典型的な瀬戸内技法の所産とはいえないわけである。しかし，筆者はこの石核が瀬戸内技法によるものではないかと推測する。そのためには，この並列する剥離面の意味をさらに詳しく説明する必要があろう。

まず，⑥面が剥離されて，⑦面が剥離されている。⑥面が剥離される以前には，③，④，⑤面の打面調整が施されたと考えられるので，剥片剥離においては，打面調整が恒常的に施されていた可能性は強い。b面をみると，⑥面の打点方向にむけて山形状に打面調整が施されているのがわかる。これは⑦面と比較しても明らかである。では，⑥面と⑦面の作業面の性格はいかなるものか。筆者は⑥面を翼状剥片剥離面，⑦面を作業面補正のための調整剥離面と考える。なぜ作業面の補正を行なうかということについては，理由として，先に示した接合資料のように，石核の打面縁が著しく歪んだ場合，また，剥離が石核幅一杯に行なわれなかった場合など，いずれも翼状剥片剥離の失敗に起因するものと思われる。⑦面を作業面調整剥離面と考えるなら，さらに根拠が必要となろう。そこで，⑥面，⑦面の剥離面の質的な差異を考えてみたい。まず，剥離角であるが，⑥，⑦面とも打面調整によって打点が失われているため正確に計測はできない。残存する剥離面と打面調整面との角度は，⑥面が58.5°，⑦面が53°とそれほど相違はみられなかった。しかし，底面（②面に相当）と⑥，⑦面のなす角度は，⑥面139°，⑦面154°と⑦面が底面に対して浅い角度で剥離していることがわかる。つまり，底面に近い角度に⑦面を剥離することによって，その後⑥面を後退して剥離されるであろう翼状剥片の変形をおさえようとしたのではあるまいか。しかし，この石核は打面調整を施したところで放棄されている。

このように，No 6の石核は翼状剥片石核ではないかという推測をしたのであるが，打面調整を施し，並列に目的剥片を剥離する技術に三国技法（平口他1982）がある。三国技法も打面調整が施されるが，打点をジグザグに後退するため，その打面調整も翼状剥片石核の山形状の打面調整とは質的に異なっているようである。三国技法の認定云々[6]はここでは詳述しないが，打面調整においても，No 6の石核は⑥面に比重がかけられていたと考えることができるのである。また，筆者は国分台遺跡の東3区の出土石器の分析を行なったことがある（絹川1988）が，このように入念な打面調整が施された石核は，翼状剥片石核を除けばこの1点に限られた。

とすれば，この石核をもって，一技法の形態を示すものと考えるのではなく，むしろ例外的，偶然的な産物であると考えた方がより自然であろう。瀬戸内技法が，充分計算された石器製作技術であるということは，No 6 の石核が偶然的に生じた翼状剥片剥離の失敗に対処し，補正された石核であるとすることと矛盾はなかろう。

以上のことからも，翼状剥片石核の作業面補正という作業が推論されるわけである。次に，他遺跡においても，同様の例がみられるかを検討してみたい。

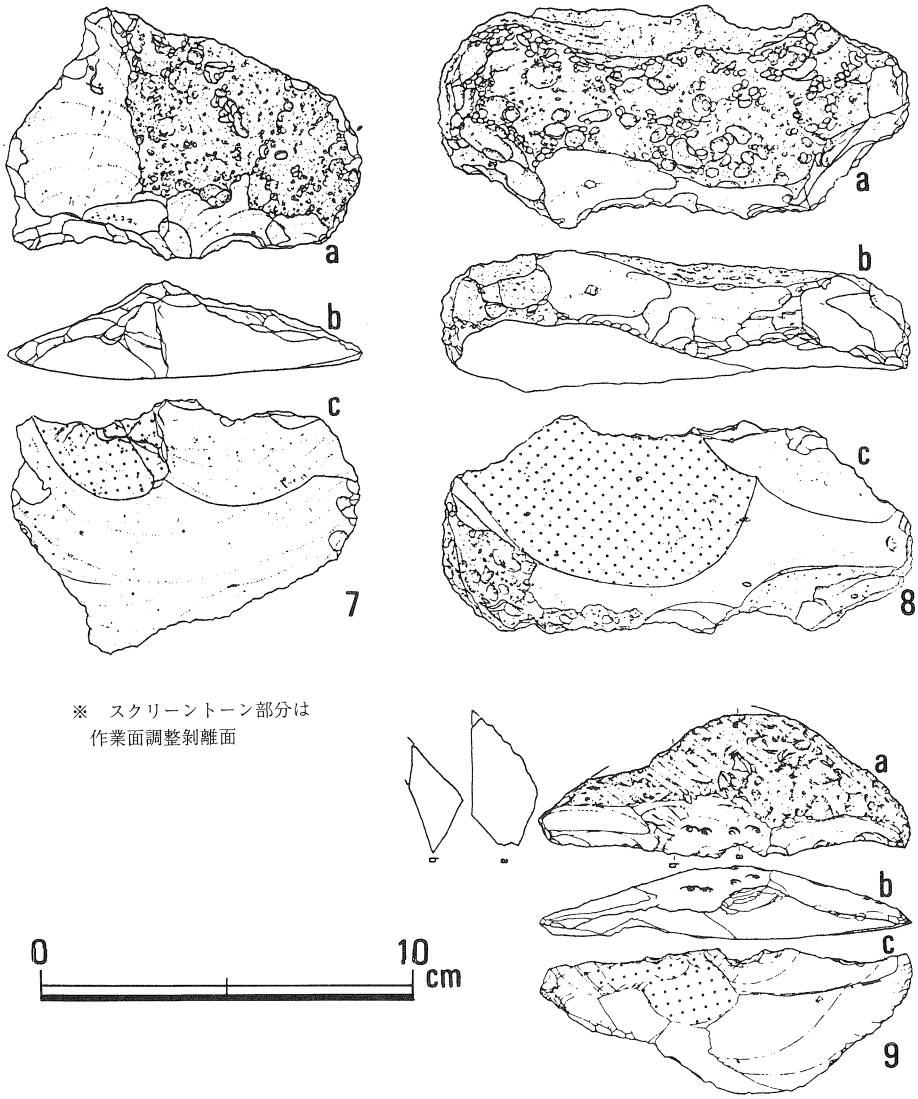


図32　作業面補正が行われた翼状剥片石核
7・8（松藤1974），9（佐藤1984）

類似資料の検討

前節までは国分台遺跡の資料を中心に作業面補正の調整剥離について検討してみたのであるが，次に他遺跡における類例を提示し，その検討を行ないたい。

桜ヶ丘第1地点遺跡（松藤1974）

奈良県北葛城郡香芝町大字穴虫に所在する。二上山北麓遺跡群の一つである。該当するものとして表採資料中に2点が認められる。図32－7，8がそれである。作業面調整剥離面はスクリーントーンで示してある。7はc面に2面の並行する剥離痕を残す。ただし，この2面は明

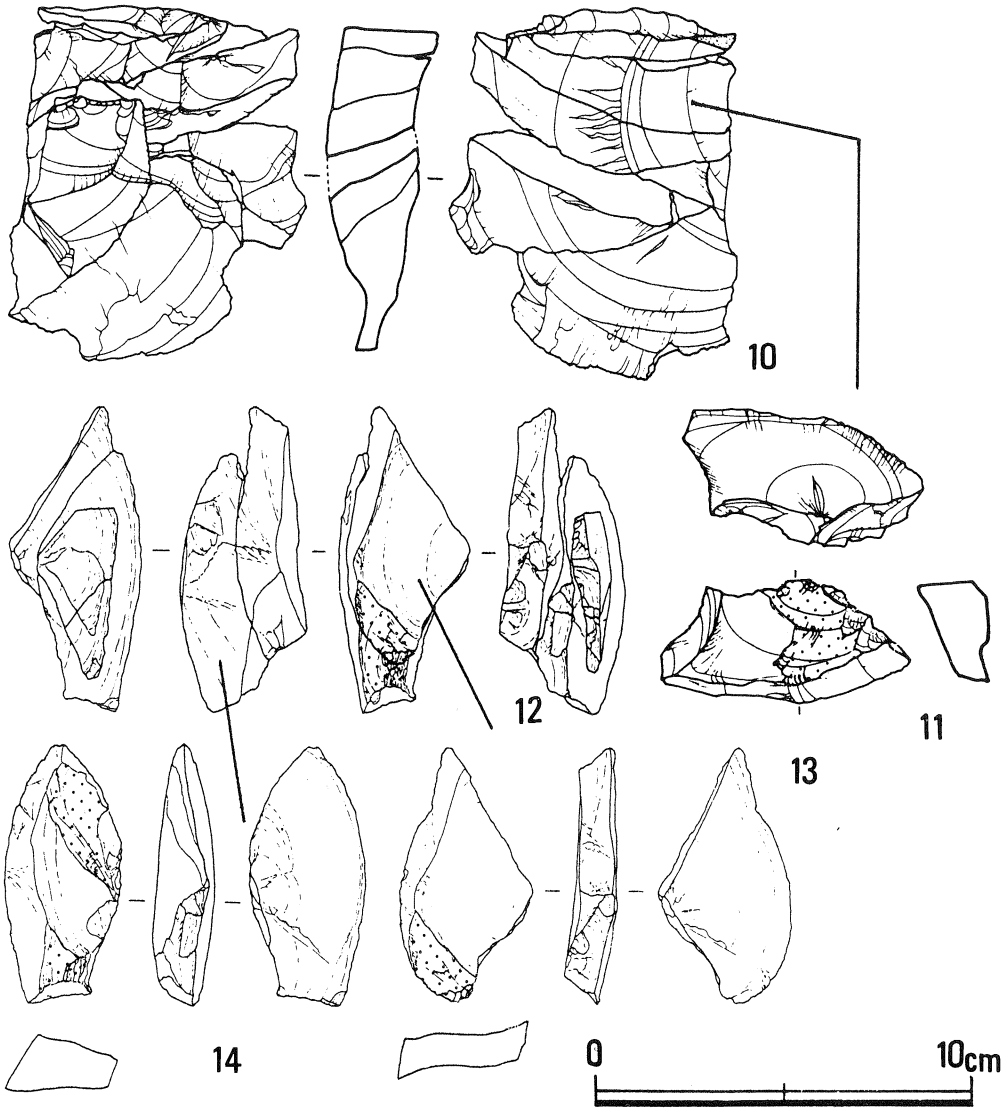


図33　作業面補正の痕跡を残す翼状剥片
10・11（芹沢1978），12～14（岐阜市教委1987）

らかな差異が認められる。すなわち，右の剝離面は山形状の打面頂部で剝離されているのに対し，左の調整剝離面は打面縁の中間に打点が認められる。この作業面の補正作業によって，石核の上面観（a面），正面観（b面）は理想的な形状となっている。8は石核自体が異質なものである。打面部の状況などから，翼状剝片剝離面はc面右側の面であろう。この場合の作業面調整は，単に石核作業面の補正にとどまらず，作業面幅の調整という意味もあったのかも知れない。いずれにせよこの石核の場合，補正作業はあまりうまくいったとは思えない。いずれの石核も，並列して2枚剝片が剝離された石核として報告されており，両方とも，変則的であるが，瀬戸内技法の範疇含まれるものとされている。だが，両方とも作業面の補正が行なわれた翼状剝片石核である可能性は高い。

清風荘第3地点遺跡　（佐藤1984）

これも二上山北麓遺跡群の一つである。奈良県北葛城郡香芝町大字穴虫に所在する。佐藤良二氏によって報告されている（図32－9）。表採資料である。やはり，並列して2枚の剝離面が認められる。打面部は数面の大まかな剝離によって形成されている。c面右の剝離面は，この打面頂部よりわずかにずれたところに打点をもつ。作業面調整剝離面と考えられるのは，左の剝離面である。右の剝離面と比較しても，形状は不定形である。また，この剝離面の断面をみても，両者の剝離面の大きな相違に気づく。すなわち，作業面調整剝離面の方が，底面に対して，より浅い角度で剝離されている。このようなことからも，この2枚の並列する剝離面は，翼状剝片剝離面と作業面調整剝離面である可能性が高いわけである。佐藤氏は，この石核を打点を横位に移動し，並列に剝片を取得した石核であると帰結している。しかし，同時に佐藤氏は，これまで二上山北麓の遺跡群から類似資料が報告されてきたことに留意し，一部に作業面調整の痕跡と推定されるものがあることを指摘[7]している。佐藤氏がこの石核を「典型的な翼状剝片石核の範疇から逸脱する」と表現したのは意味深長である。同時に，このような類例は二上山北麓遺跡群においても，やはり寡少であるという。

岩戸遺跡　（芹沢1978）

大分県大野郡清川村大字臼尾字岩戸に所在する。1967年に東北大学によって発掘されている。この中で岩戸Ⅰ文化層より出土した母岩㊾の接合資料がそれである（図33－10，11）。この接合資料は柳田俊雄氏によって，何度か分折がなされている（柳田1983，1985）。瀬戸内技法第2工程の接合資料である。この接合資料中の翼状剝片に背面が複数のネガティヴな剝離面で構成されるものが1点ある。この背面右側の剝離痕を柳田氏は石核正面部（作業面）に対する調整作業による可能性があるとしている（柳田1982）。岩戸Ⅰのこの接合資料は瀬戸内技法の地域的な変容例として知られる（松藤1985）が，接合資料によって，具体的な作業面補正作業を確認できる一例である。

日野Ⅰ遺跡[8]　（岐阜市教育委員会1987）

岐阜県岐阜市日野に所在する。1985年に発掘調査，1987年に報告書が刊行されている。個体別資料K116がこれにあたる。このK116の資料は，ほぼ瀬戸内技法第1工程から第2工程，国府型ナイフ形石器の三者が接合するという，きわめて良好な接合資料[9]である。さらに，3枚の翼状剥片が接合する資料[10]が存在する（図33－12～14）が，そのうちの2枚に，作業面調整と考えられる剥離面が認められる。この剥離面は明らかに翼状剥片剥離を意図したものではない。3枚の翼状剥片の打点の動きは，ややジグザグに後退するものの，作業面調整剥離面の打点は，これよりさらに横方向にずれている。また補正後の翼状剥片の打面部はおおむね良好な形状を示している。瀬戸内技法第2工程の接合資料中にも，直接翼状剥片剥離に関係がないと考えられる剥離面が認められ，これらも作業面補正のための調整剥離による可能性がある。

まとめと今後の課題

以上述べてきたように，各遺跡においても作業面調整を残す瀬戸内技法関連資料を指摘することができた。これまで，翼状剥片石核における石核作業面の補正作業は，その存在こそ指摘されたが，それほど注目されることはなかった。本論では，石核作業面の補正がなされる要因と，その諸例を提示した。また，作業面調整剥離面は，翼状剥片剥離面と比較して，形状や底面とのなす角度などの質的な差異が認められ，この剥離が目的剥離を取得するためではなかったという可能性を示している。だが，残された剥離面が果して石核作業面の補正のためにあったのか，目的剥片取得によるものか，正確な判定は困難な面もある。岩戸遺跡や日野Ⅰ遺跡のように接合資料であれば，その判定は比較的容易であるが，石核のみの場合は，剥離面の観察以外に情報は得られないという憾みもある。しかしながら，筆者がこれまで提示した資料を，翼状剥片石核に作業面調整痕が残されたものと考えるのは，剥離面の検討もさることながら，山形状の打面調整と瀬戸内技法の関係である。翼状剥片石核に山形状の打面調整が施されることに

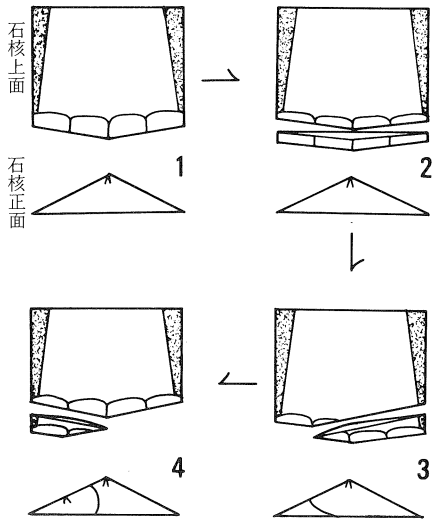


図34　翼状剥片石核における作業面補正模式図

1．翼状剥片石核の正面観が満足する形状を保持していれば，2．正常な翼状剥片剥離が行なわれる。3．ところが，翼状剥片が左右いずれかに片寄って剥離された場合，石核幅一杯に剥離されなかったため，石核上面観は，1の理想的な形状と比較して，著しい変形をきたす。これでは，翼状剥片の連続剥離は不可能である。4．そこで，作業面補正のため調整剥片が剥離され，改めて打面調整が施されて，石核上面観は理想的な形状となって，ふたたび剥離が続行される。

よって，翼状剥片の連続剥離が保証され，翼状剥片が連続的に剥離されるからこそ，瀬戸内技法が成立するわけである。このことからも，他石核と翼状剥片石核を区別する基準として，山形状の打面調整は重要な要素であるといえる。そもそも，打点を限定し，翼状剥片を作業面幅一杯に剥離するために打面調整が施されているのであり，並列して２枚の剥離が行なわれていること自体矛盾することなのである。ところが，この矛盾が矛盾として成立しないのが，石核作業面の補正作業なのである（図34）。

さて，このような作業面の補正は，その資料数からみても，瀬戸内技法関連資料全体と比較してきわめて寡少である。したがって，それほど顕著に行なわれる調整技術ではなかったのであり，逆にみれば瀬戸内技法の技術としての完成度を示しているといえる。原産地遺跡においては，作業面調整がなされて後，石核が放棄された例が多いが，これは，原産地という石材供給の点で有利な性格が反映されているのであろう。実際，原産地遺跡と消費地遺跡で，このような作業面調整技術がどのような使用のされかたをするのか，今後検討されるべき課題となろう。

瀬戸内技法をめぐる議論が顕在化してきた近年，これまで概念的に説明されることの多かった瀬戸内技法と，個々の資料レヴェルでの認識のズレをどのように考えるのか，瀬戸内技法の変異形態が本来的に存在するのかどうか，逆に，他技術として分離独立して考えることができるのかどうか，解消すべき問題点は多々あろう。これまで，単に瀬戸内技法の変異形態として考えられていたものや，他の横長剥片剥離技術として認識されているものの中には，作業面調整が施された翼状剥片石核が存在する可能性がある。それらは，結果として変異的な形態を示しているのであり，本質的に瀬戸内技法の所産によるものであるのは言うまでもない。今後は，このような作業面調整の有無を明確に認定しうる分析方法を模索していかねばなるまい。

本論の作成にあたって，近藤義郎先生（埋蔵文化財調査研究センター長）には，資料使用の快諾，ならびに諸々の御配慮をいただいた。また，高木洋，大谷輝彦，山本誠の各氏からは，資料の実見を通して多くの御教示を得た。末筆ながらあつく御礼申しあげたい。

註

(1) 国分台遺跡は，香川県綾歌郡国分寺町に位置する。標高約400ｍの台地上にあり，1959年に岡山大学を中心とした国分台遺跡発掘調査団によって，台地の東端（東区），西端（西区）が発掘されている。

(2) 翼状剥片石核における打面調整の類型は，国分台遺跡群で竹岡俊樹氏が，二上山北麓遺跡群で松藤和人氏が，そのバリエーションを指摘している。

(3) 西区は２×３ｍのトレンチが２ヶ処設定されている。

(4) この資料は，以前にも写真で紹介されたことがある（稲田1982，P31）

(5) 東区は２×３ｍのトレンチが７ヶ処設定されている。東３区の資料については，筆者がすでに分析を行

なっているが，この石核は出土層位が不明であったため，〝石核不明〟の項目に分類していたものである。その後の検討から，表土層より出土したものと考えている。

(6) 三国技法については，認定された資料数の僅少さが指摘されており（松藤1985），現時点では評価が分かれている。

(7) 佐藤氏は，粗い打面調整を施し，並列して目的剥片を取得した石核として，桜ヶ丘第１地点（本論紹介以外のものも含む），鶴峯荘第１地点，同第２地点，大阪府穴ヶ谷Ｂ地点，地獄谷の諸遺跡から例を見い出している。このうち，鶴峯荘第１地点遺跡のものは，翼状剥片石核として問題はなかろう。また，桜ヶ丘第１地点（本論紹介以外の１点）のものは，まったく異質なものであり，翼状剥片特有の山形状の打面調整が石核幅一杯に施されていない。翼状剥片石核と報告されるが，翼状剥片が連続剥離されたことを，積極的に認めうる痕跡は残していない。むしろ，偶発的に生じた石核であろう。他の三点は，横長剥片石核として報告されており，打面調整も翼状剥片石核と質的に異なり，非常に粗いものである。

(8) この遺跡の資料に関しては，筆者は実見する機会を得た。

(9) 報告書中のＡ，Ｂグループ12点がこれにあたる。

(10) 報告書中のＣグループ４点（翼状剥片３枚分）がこれにあたる。

引用・参考文献

稲田孝司　1982　「旧石器時代」『日本の美術』188　至文堂

織笠　昭　1987　「殿山技法と国府型ナイフ形石器」『考古学雑誌』72巻４号

鎌木義昌　1960　「先縄文文化の変遷」『図説世界文化史大系日本１』　角川書店

　　1965　「刃器文化」『日本の考古学Ⅰ　先土器時代』　河出書房

絹川一徳　1988　「国分台遺跡における石器製作の技術構造―原産地遺跡間の比較を通して―（上）（下）」『考古学研究』35巻１号・35巻２号

岐阜市教育委員会　1987　『寺田・日野１遺跡』

佐藤良二　1984　「二上山麓・清風荘第３地点遺跡東採集の石核」『旧石器考古学』29号

竹岡俊樹　1980　「瀬戸内技法再考」『どるめん』No26

平口哲夫・松井政信・樫田誠　1984　「福井県三国町西下向遺跡の横剥ぎ技法―主要石器類の定性分析を中心に―」『旧石器考古学』28号

松藤和人　1974　「瀬戸内技法の再検討」『ふたがみ』　学生社

　　1979　「再び瀬戸内技法について」『二上山・桜ヶ丘遺跡』

　　1983　「国府型ナイフ形石器の製作」『季刊考古学』４号　雄山閣

　　1985　「瀬戸内技法・国府石器群研究の現状と課題」『旧石器考古学』30号

　　1987　「〝殿山技法〟は成立するか？―織笠昭『殿山技法と国府型ナイフ形石器』を読んで―」『旧石器考古学』35号

柳田俊雄・藤原妃敏　1981　「瀬戸内技法―調整技術のもつ意味―」『旧石器考古学』23号

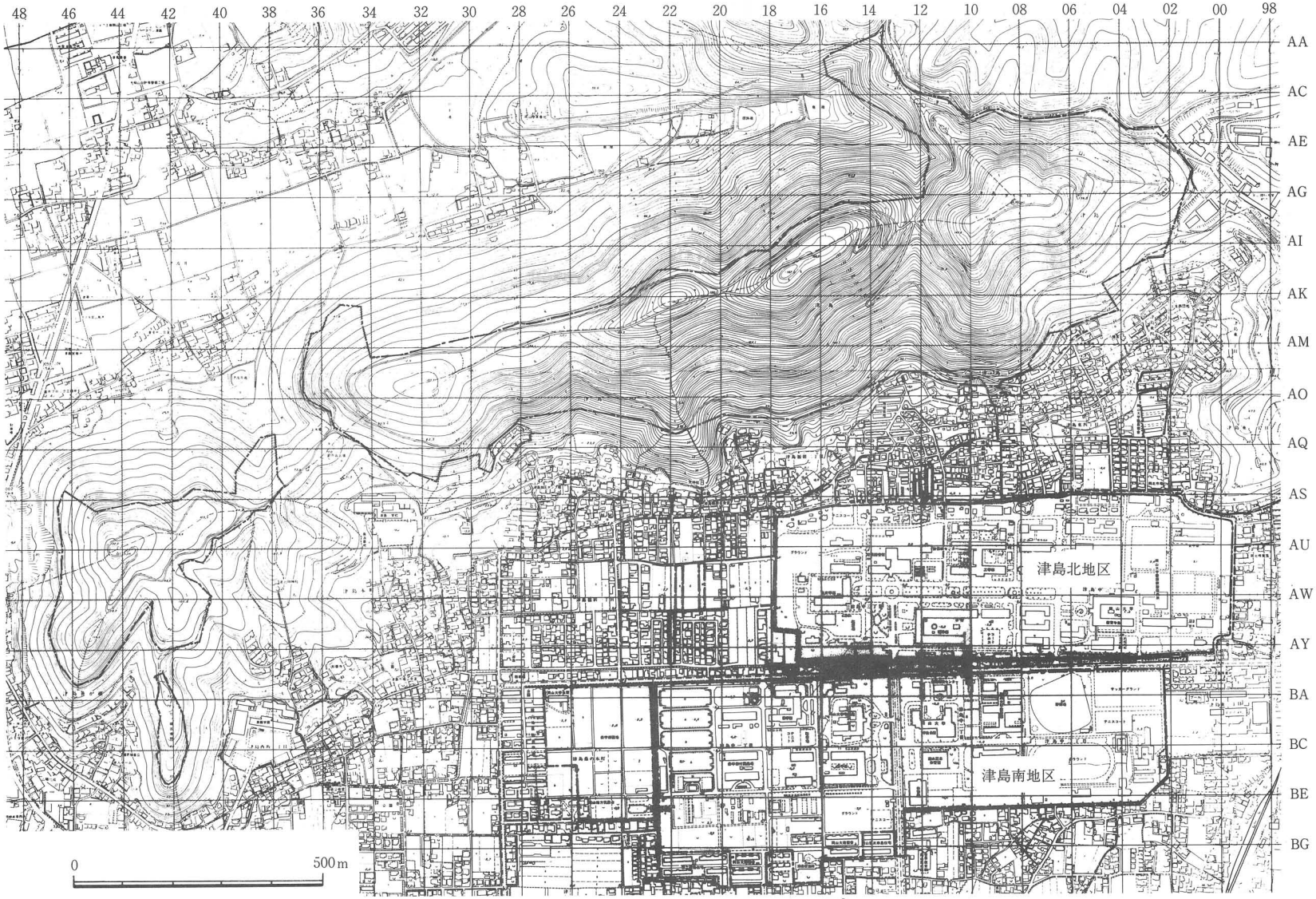
　　1982　「瀬戸内技法の打面調整の意味」『郡山女子大学紀要』18集

　　1983　「大分県岩戸遺跡第Ⅰ文化層出土の石器群の分析とその位置づけ」『考古学論叢』Ⅰ

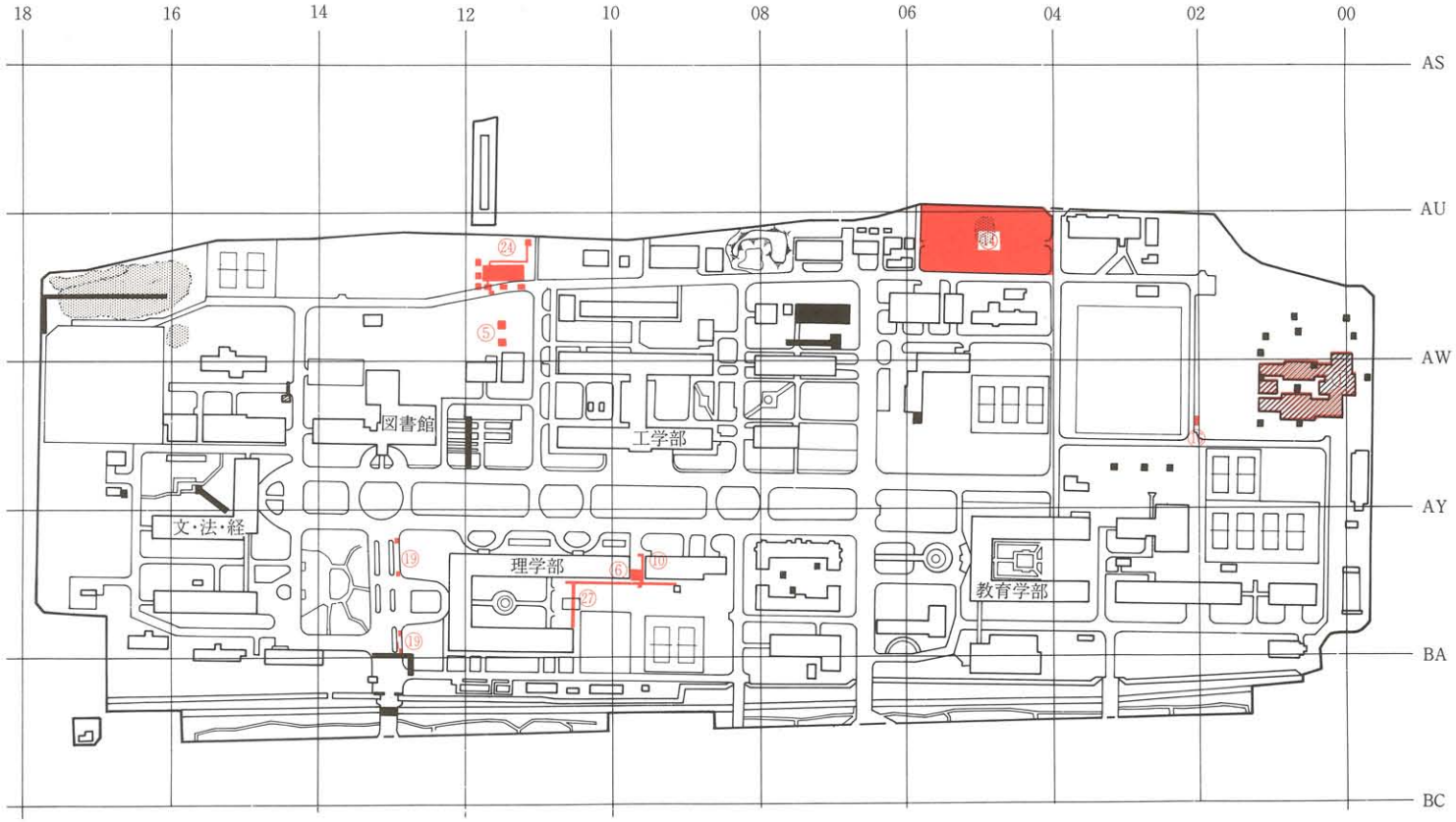
　　1984　「瀬戸内技法」『考古学ジャーナル』No229

　　1985　「大分県岩戸Ⅰの瀬戸内技法」『旧石器考古学』30号

綿貫俊一　1982　「東九州における瀬戸内系の人類遺物」『旧石器考古学』25号

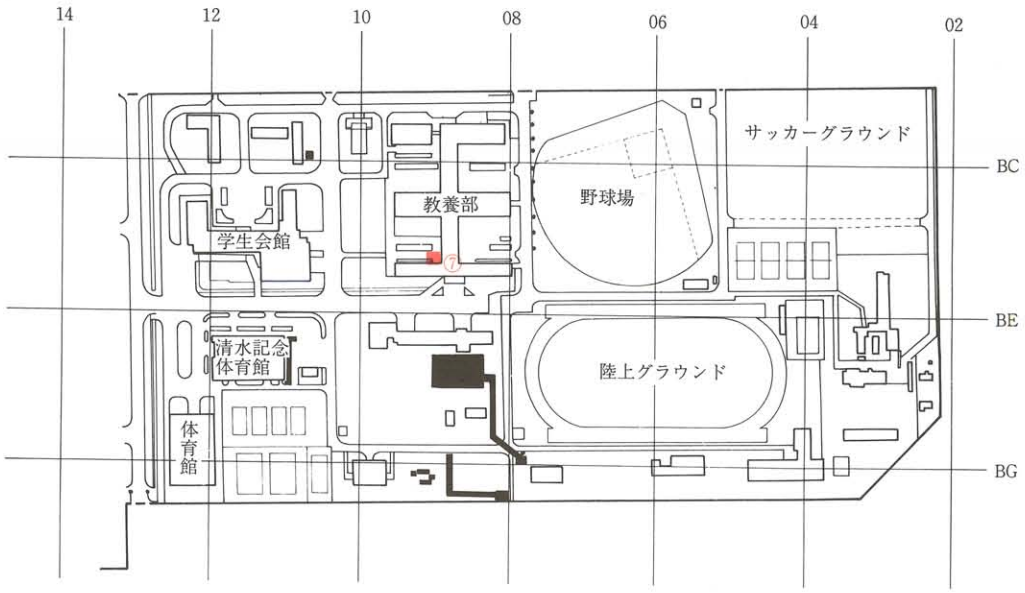


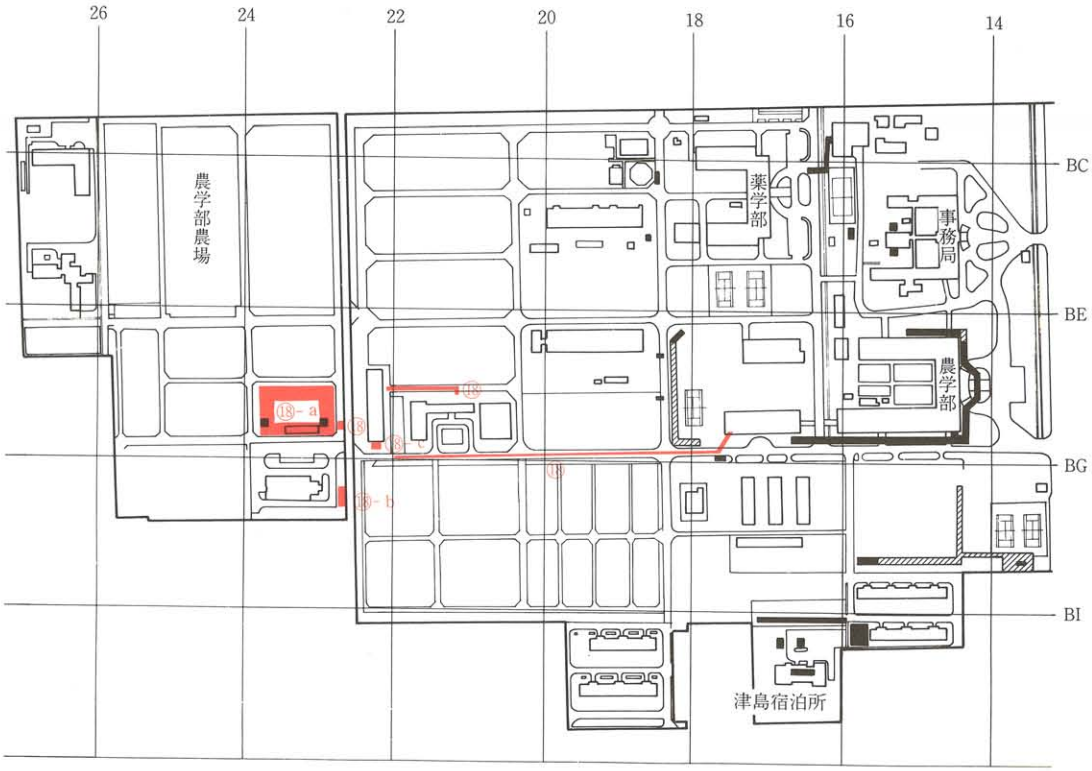
図版1　津島地区全体図（縮尺1/12000）



図版Ⅱ　津島北部図（縮尺1/5000）

図版三　津島南地区（縮尺1/5000）





赤印部分：1987年度調査　黒印部分：1986年度以前調査

発掘調査地点

0　200m

図版四　鹿田地区全体図（縮尺1/2500）

赤印部分：1987年度調査

黒印部分：1986年度以前調査

発掘調査地点

樹木移植地域

0　100m

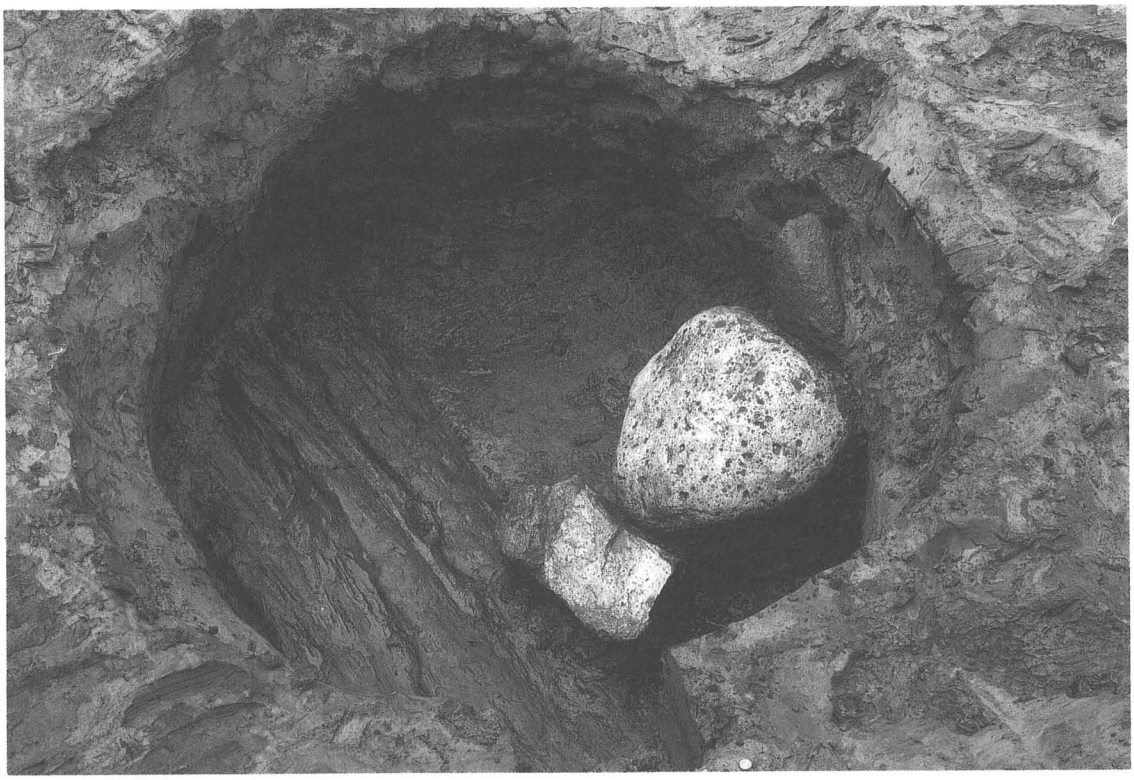
図版五　津島地区（学生部男子学生寮発掘調査）

1　7層上面遺構検出状況（西から）

2　8層上面遺溝検出状況（西から）

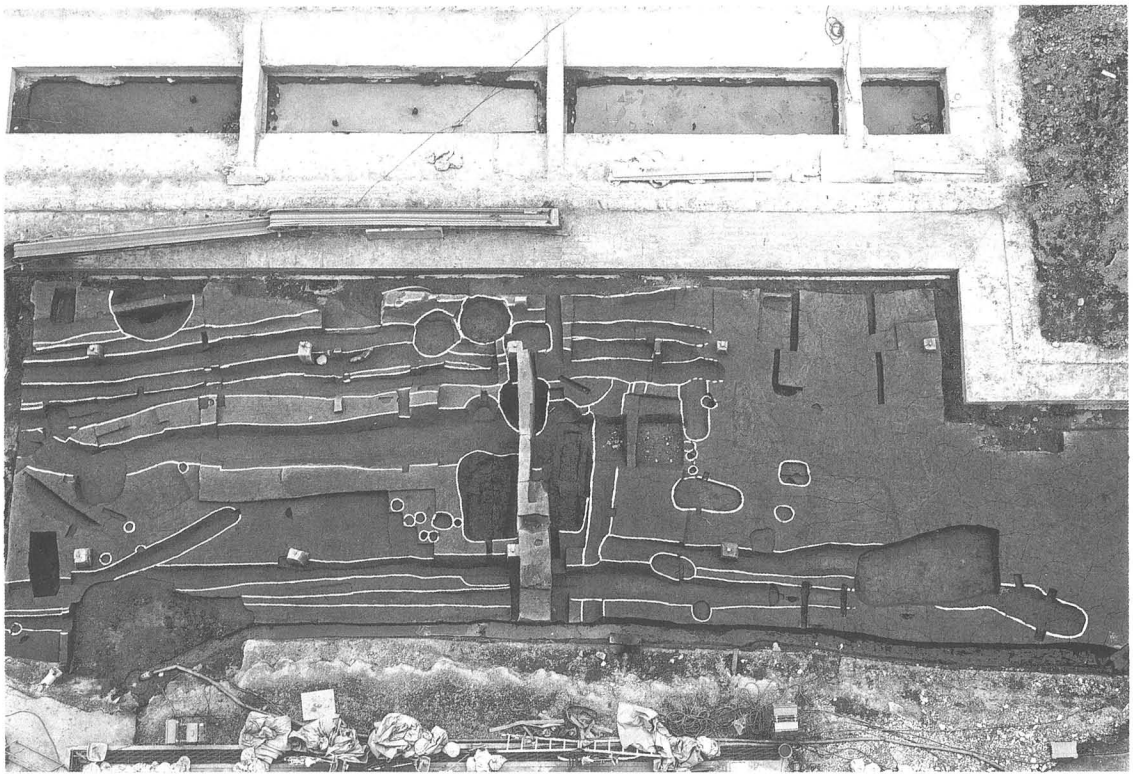
図版六　津島地区（学生部男子学生寮発掘調査）

1　11層上面遺構検出状況（西から）

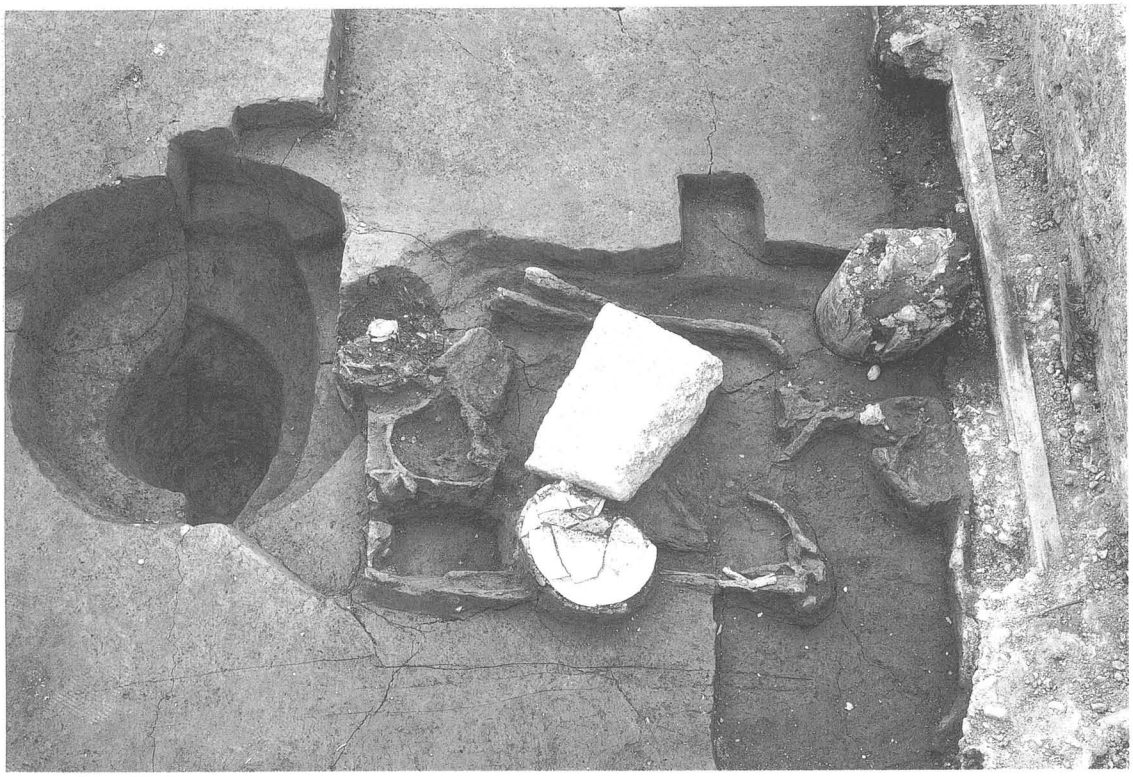


2　貯蔵穴１（南から）

図版七　鹿田地区（医学部附属病院管理棟発掘調査）

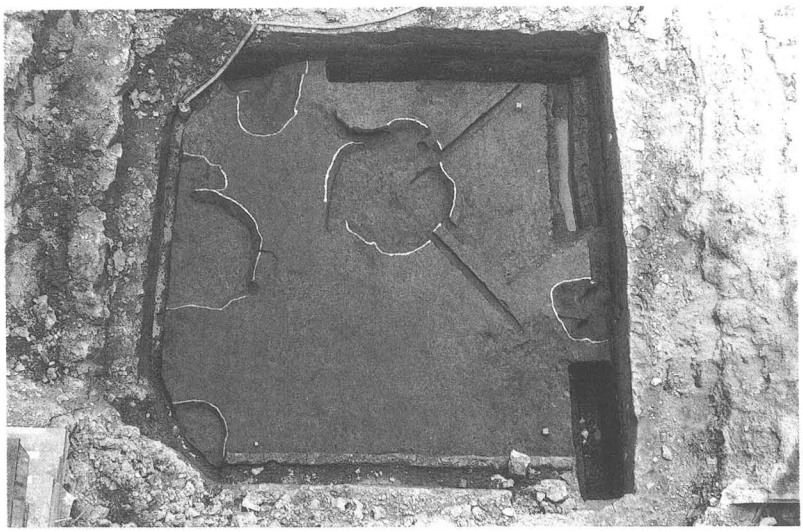


1　南区中世遺構完掘状況（南から）

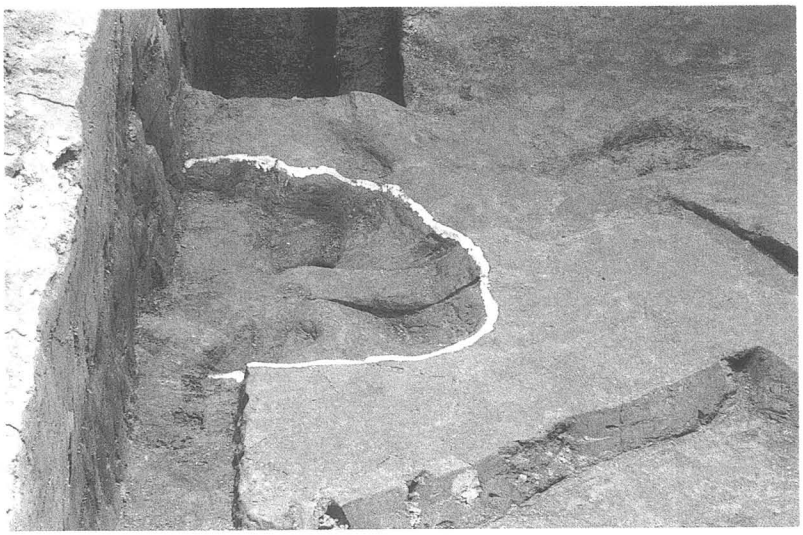


2　土壙墓１（北から）

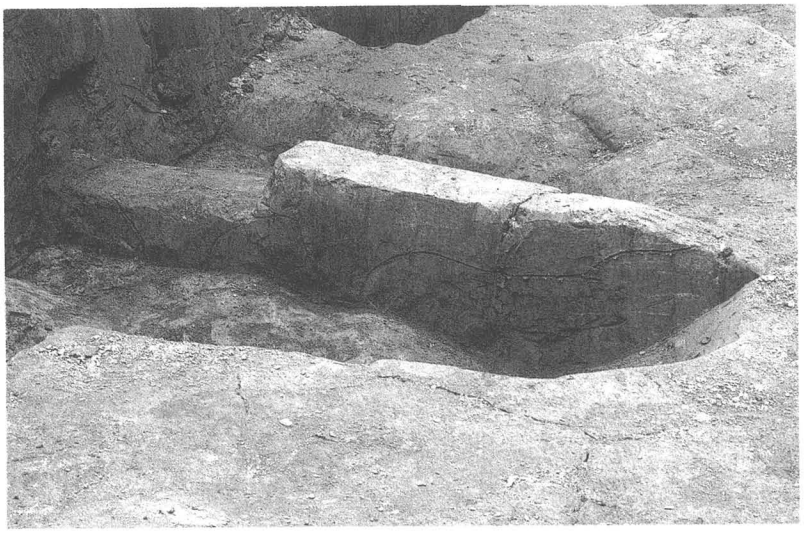
図版八　津島地区（教養部身体障害者用エレベーター設置試掘調査）



1　縄文時代遺構
完掘状況（東から）

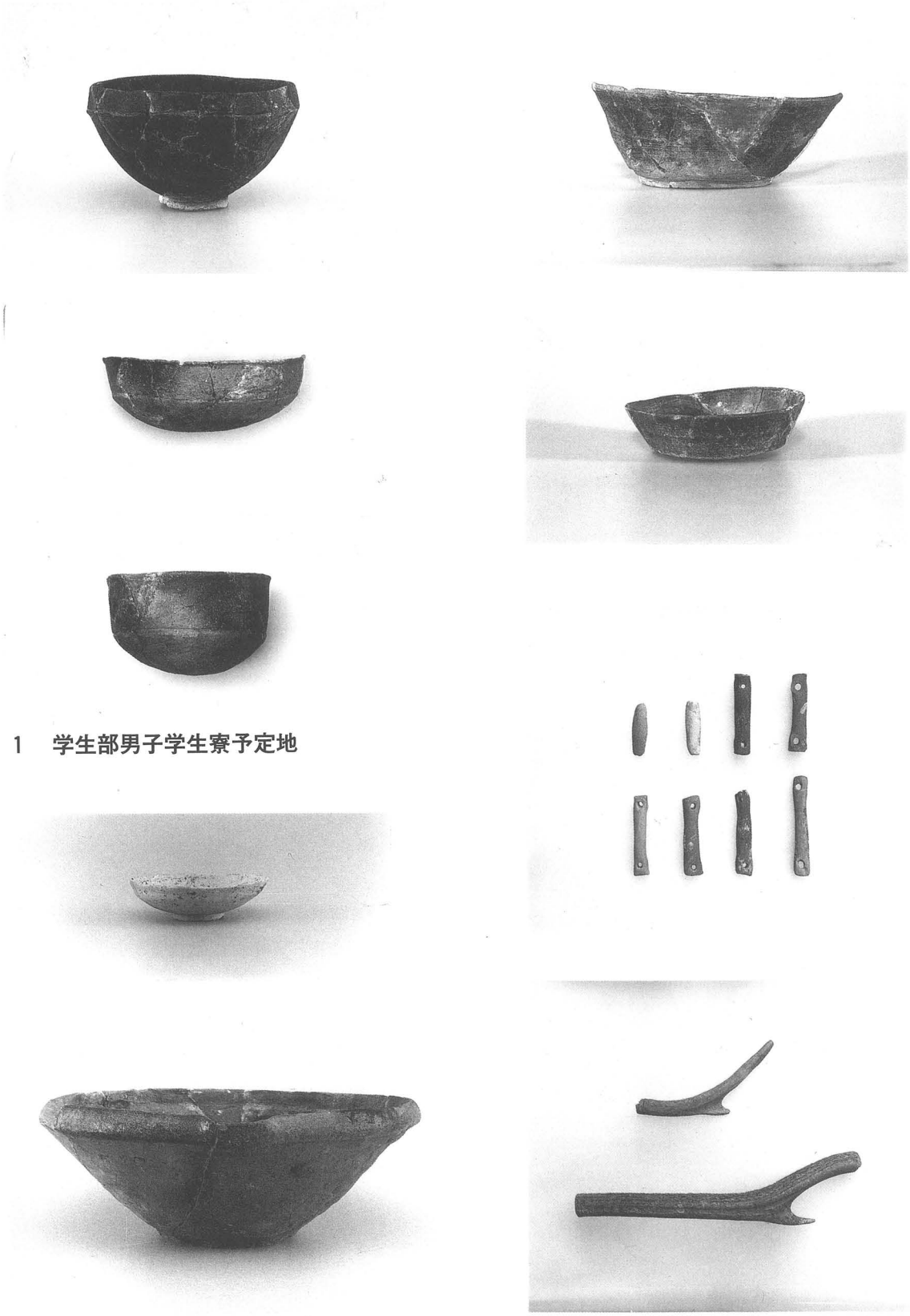


2　土壙０１
完掘状況（西から）



3　土壙０１
断面（西から）

図版九　出土遺物



1　学生部男子学生寮予定地

2　医学部附属病院管理棟予定地

3　医療技術短期大学部配管工事部分

図版十　センター施設

1　センター事務所（津島地区）

2　収蔵施設（鹿田地区）

1988年10月31日　印刷
1988年10月31日　発行

岡山大学構内遺跡調査研究年報５　1987年度

編集　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
発行　岡山市津島中３丁目２番１号
(0862)52-1111(内線246)
印刷　サンコー印刷株式会社
総社市真壁871-2
(08669)3-2121㈹